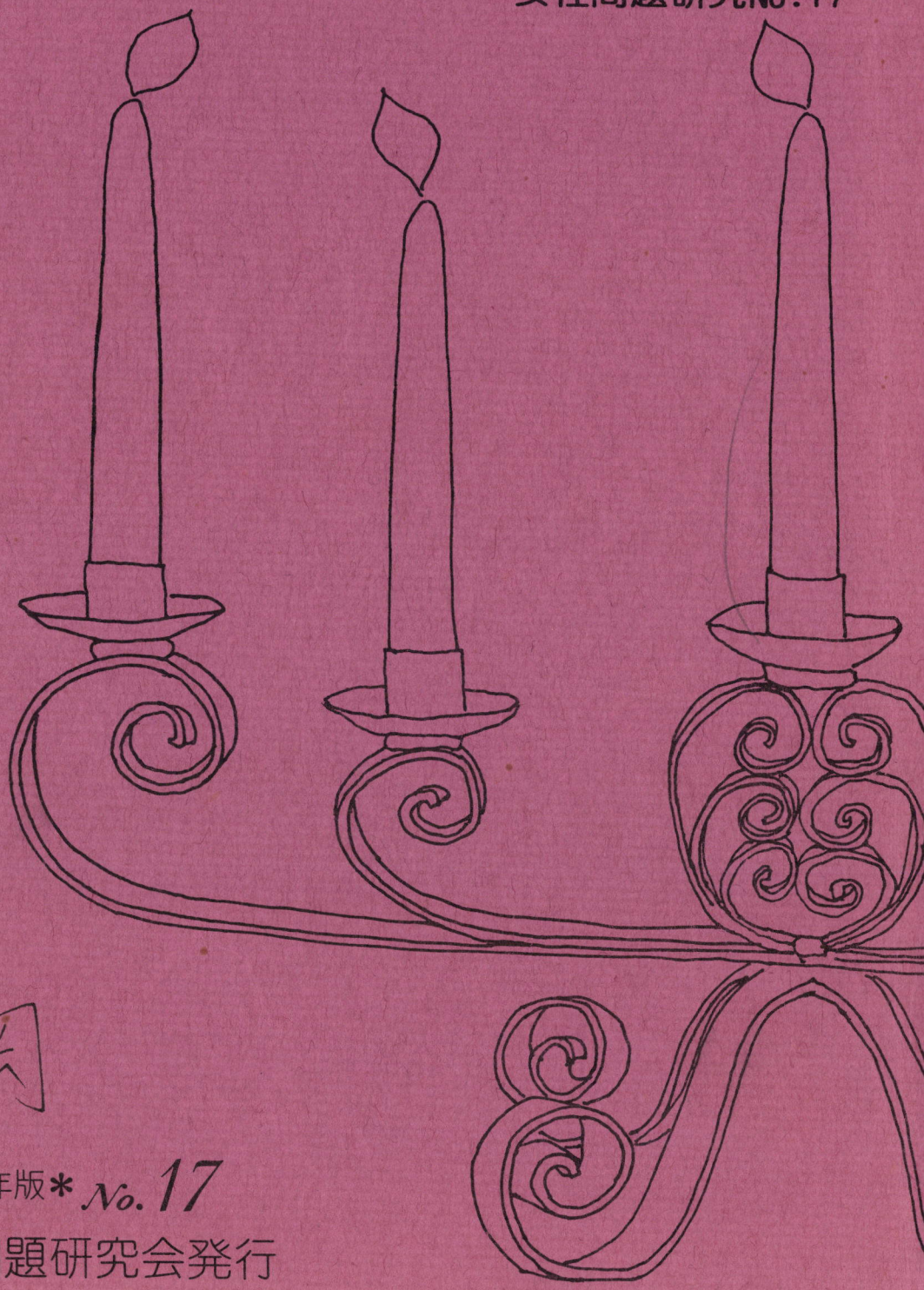
ゆ・ふあむ

女性問題研究No.17



片岡

1983-84年版＊ No.17

女性問題研究会発行

はじめに

今まで名前さえ知らなかった国グレナダへのアメリカの侵略、レバノンでの数々の戦闘、毎日世界のどこかで戦争が行なわれている。

中国におきざりにされた日本人孤児たちの家族との再会――まだ戦争の跡仕末も終ってないのに、次の戦争が始まっている。

戦争は人間が起こすものだから、人間の力で必ずやめさせましょう、と子どものころ学習した。このあたりまえのことに何故かちゅうちょする。憲法第9条という立派な法律をもつ私たちの国で、まずは軍備をふやさないこと、安保条約をやめて中立国になること、理想をたえず持ちつづけることなど、すごく簡単なことなのに、なぜか国民の意識が分断されている。

〝分裂させて支配する〟というのが、いつでも支配者の論理なのだ。私たちは、時間がかかっても一歩ずつふみかためよう――納得し、団結し、そして平和と平等を獲得するために。

ことしは〝男女雇用平等法〟をめぐって、人間らしい働き方について、大いに議論しよう。仕事の中味についても話しあおう。いまこの手でつくっているものは、果たして人間の幸せになるものだろうか、公害をもたらしたり、人の命をちぢめたり、戦争へとつながるものでは決してないことを。

労働の場における人間の復権――まもなく来る一九八五年の国際婦人年の終結はそういう年にしたい。国際婦人年のスローガン〈平和・発展・平等〉が世界中に具体化され、根づくように私たちなりにがんばろう。（正路）

〝れふぁむ〟とはフランス語で女たち。一九六三年、神戸外大で生まれた女性問題研究会の機関誌の名前で、学生時代に三号まで刊行し、卒業後五年のブランクの後、初めの発起人を中心に年一回の機関誌づくりと例会を四回行なう気楽な集まり。参加資格はすべての女性と女性問題に関心のある男性。会費、会則、会長すべてなし。参加希望者はハガキで下記へ。荒井由美子／西宮市高木西町一一の三一

もくじ

I 私のこと・そして夫と子と……

私の時間、私の世界　網野和子…2
親にしてくれてありがとう
——三〇代の覚え書き　山崎万里…9
昼間家にいると
——専業主婦をとりまく状況　高木恵美子…13
ひとーり、ふたり、さんにん、よにん
——夏から秋へ　片岡陽子…16
心おだやかならぬものを
——例会に出たばかりに　阪口マサ子…18
木に登る魚
——私の共働き失敗談　三刀美樹子…19
ああ、男たちよ　吉田喜代…21
「れふぁむ」の妹「それいゆ」　尼川洋子…23

II 日本を離れてみると

スウェーデン・レポート　米家佐奈恵…24
女同士の結婚
——東独の短篇小説から　森良子…37
とき子さんの岩田帯　久世裕子…38
スペイン、旅と大風呂敷
——五十四歳の近況報告　若松千代子…40
東南アジアにて　田丸青実…42
アジアの女子労働者たちと　正路怜子…44

III 働く・生きる・踊る

フラメンコ——その魔性の魅力　荒井由美子…45
踊る意志　片岡美智子…48
私の読んだ本『女としごと』　川口祥子…49
ボランティアについて　由里洋子…51
一年に百本の映画を　浅野祐子…53
六十二歳のお見合　田畑鞠子…54
雇用平等法あれこれ　正路怜子…56
年収二百万円でも暮せる　神崎房子…58
あら、不思議　シンプル…59
組合つぶしの波の中で　平海ルツ…60
「働く婦人の家」で一年　人見和子…62

IV 評論・エッセイ

安政生まれの新しい女——山下りん　尾形ゆき江…64
乾いた街の夢——シュールレアリズム絵画　土倉智美…76
ウェンツェル婆さんへの道　岩田典子…77
村上信彦さんとの出会い　三木草子…78

カットとカバーデザイン　まつのきよこ
カバーのレタリング　中川信子

I 私のこと そして 夫と子と

私の時間 私の世界

網野和子

休日以外、私の一日は五時半の起床とともに始まる。目ざましのベルをとめると同時に「鳴ったよ」と夫に声をかける。目ざましの音には気づかない夫も、私の一言にはすぐ返事をして起き、身仕度を始める。私は顔だけ洗って台所へ直行、テーブルの上の連絡帳をひろげる。

「朝A――うどん。朝B――パン、ゆで玉子、サラダ。弁当――れんこん、ほうれんそう、牛肉巻き、切干大根」。

朝Aは夫の朝食。お湯をわかすことと朝Aの準備、弁当づくりを同時進行でやらなければ間に合わない。朝、出かける前にはたっぷりの食事とゆっくりした休養が必要な夫で、「時間がなくて顔洗っただけでとび出す」という人が、世話がやけず羨ましい気もする。

六時までには朝Aをテーブルに出し、六時二十分には弁当を詰め終える。夫がそれを持って出勤するのは六時半。朝の一時間を二人きりで過ごしているのに全くしゃべらない夫婦である。ケンカをしていても、ふつうの時でも、特別の用がないかぎり無言だ。テレビのニュースを耳でききながら、その間は考えごとをしている。

夫を見送ると、子ども達が起き出す七時までは私の時間だ。新聞に目を通すか、あるいは、さっと自分の部屋に入り、机の前に坐って手紙の一通を書き上げるときもある。

私の部屋――主婦には「ぜいたく」な一つの部屋を確保している。三帖余りの洋室で、北向きに大きな窓がついている。本来はとなりの和室の控えの間か、物置きのように使う目的で設計されているようだが、狭いながらも、とても気に入り、落ちついた気分になれる部屋である。机の他に本箱とドレッサー。そして、高い背もたれにバラの花をくりぬいた民芸調のいすがあり、これを花椅子とよんでいる。机のいすは、機能性第一のもので、花椅子の方はくつろぎ用。

この部屋に入り、最近では、わずかの時間

にも、毎日は会えないK介に対話ノートを書く。そこには日常の雑事から切りはなされた時間があり、一日に何度も、その夢の世界へと誘いこまれていく。

よく晴れた朝。あなたはいまごろ、まだぐっすりとお休みの時間ですね。私はもう朝の一仕事を終えています。この間と同じように晴れて透きとおった朝の空気なのに今日は会えないのだなあと思うと、淋しさが全身をつきぬける感じ。

この前お会いしたのは五日前。九時に約束していたので、大忙しで朝の用事を済ませたのですが、あの弾んだ気持ちと、そのあとの楽しかった半日を、またも思い出します。

万葉集に一番たくさん詠まれているという花——萩を見に新薬師寺へ行った日でした。万葉集に導かれるように出会った私たちは、万葉時代にも似た愛の世界を築こうとしているのですね。

バスを降りてから、飛火野の木かげで、まほうびんのコーヒーを飲みながらキスをして。まるで二十年も三十年も昔に戻ったように新鮮で大胆な私たち。あなたは午後からの勤務が気になったでしょうに、私と会うための時間をつくって下さってありがとう。いつもいつも時間がなくてゆっくり会えないので、このノートには書きたいこと、お話したいことがいっぱいあります。

萩には白い花もあるって知らなかった。あのお寺の境内に一歩入ったときの印象は鮮やかです。本堂の屋根のなだらかな勾配や、紅と白の花をつけた萩が一度に目に入り、それをあなたと共に味わう喜びでいっぱいでした。ずっと昔にこのお寺には来ているし、宿泊したこともあるのですが、この秋の印象は全く別です。不思議ですね。本堂で十二神将をみて歩いているとき、二人ともお互いの手を握りしめている、その感触に心を奪われて、うわの空で説明を読んでいましたね。受付の人が向うむきになっている間にキスをして、おもい出すと笑ってしまいそう。そんな二人がいとしくて。

「七時やで！　起きなさい！」

小、中学生の三人の子どもに声をかけて回る。五分待って、また声をはりあげる。その間に、朝Bの食事をテーブルに並べ、洗たく機をまわす。

「ゆうべのみそ汁の残りほしい人、先着二人まで！」と、また声をかける。

小さい者順に起き出し、その順に学校へ行く。時間割は？忘れ物ない？なんて声はかけない。雨が降りそうなときだけ、傘を持って行ったら？と云うくらいのもの。子どもが食事をしたり、新聞を読んだりしている間に、洗たく物を干す。その次は食卓を片づけて食器洗い。

八時を過ぎると電話がよくかかる。

——四年生の児童に一人、長欠の子がいるんですが、PTAからお見舞は出るんですか。

という学年部長からの問い合せがあったりする。

——PTA規約の慶弔規定では、一カ月以上病欠のときは出ることになっています。その子どもはもう一カ月休んでいるのですか。クラスの委員さんと連絡をとって、もっとくわしいことを知らせて下さい。

というような返事をする。

——○○部長ですがきのうの講演会は無事おわりました。出席者は二百名を超えました。

——予想以上の集まりやったね。どうもごくろうさま。

と慰労する。

やむなくPTA役員に引っぱり出された立場上、えらそうな口をきいているが、内心はいつもドキドキ。とくに他校のPTA役員と同席する場に出たりすると、どの人もしっかりしていて、圧倒されてしまう。私は、下を向いて本をよむことだけは人に負けないつもりだが、それ以外はダメ、全く不向き、ミスキャスト……と心の中でぶつぶつ言う。

家事も得意でないというか、いつも負担におもいながら、やっとこなしている現状。掃除は気になったときはやるが、毎日は、やらない。これは長年の共働きで、掃除が一番後まわしだったせいもある。

今日は午前中に広告代理店を一軒訪ねるだけの仕事。K介からの電話を期待しながら、

コーヒーをたて、新聞をひろげながら、ゆっくり飲む。

お電話ありがとう。いつ聞いてもあなたの声は、すてき。まだ私たちは、お互いの顔も声も知らないのに、手紙を交換していた時期がありましたね。

ある調べ物の資料のことで、あなたの会社に問い合わせの手紙を出したら、それがあなたの担当で、それから文通がはじまったのでした。お互いに書くのが好きだったから続いたのでしょうね。資料や原稿のやりとりの折に、はじめは便せん二、三枚、あいさつを同封したのでしたが、だんだんと便せんの枚数がふえ、個人的なおしゃべり手紙に発展したのでした。

どんな人だろう？　こんなに話が通じて楽しい人は？　あなたの会社の近くまで行った折に、ふと電話をかけてみました。そのときはじめて声をきいたのですが、若々しく張りのある声でびっくりしたのを思い出します。だってそれまでは、あなたのお手紙の「頭まっ白のオジンです」という言葉を真にうけていたのですから。

はじめてお茶を飲んだとき、あなたは私を、女学生みたいと思われたとか。もう、そんな年頃の子どもがいる、四十を過ぎたオバサンなんだけど。

きょうも、あなたの若々しい声をきいていると、ふとこんな初めの頃を思い出し、胸がいっぱいになりました。幸せな気分に満たされていながら、私たちはこれ以上、交わることはないのですもの。あなたも私も縞もようが好きですが、ちょうどとなり合わせにいても、決して交叉することのない縞のようなものです。あなたは紺で、私は黄色の。

仕事の合間をみつけて会えそうだと、K介からの電話に、今日も充実した一日になりそうな予感。会期中にぜひいっしょに行きたかった佐伯祐三展をみることにした。会場は都心の美術館でK介の会社からも近い。

K介からの電話に満たされた思いで、自分の部屋に戻り、昨夜仕上げた原稿に目を通す。これを午前中に広告代理店に届けて、次の仕事があるかどうかきく。そのあと本屋へ寄ったりしていると、ちょうどK介との待ち合わせ時刻になりそうだ。

シャワーを浴び、簡単な化粧をして着がえる。うす茶色のセーターに濃い茶のスカート。上には黄色のジャケットをはおる。ことしは春・夏を通し、ずっとこのジャケットを愛用していた。私の好きな黄色のジャケット。

万葉集に詠まれていながら、幻の古代染色といわれた黄土染を、大阪の中学教師が発見したことは、二、三年前に報道されたが、その黄土の実物と染められた糸や、絹製品を展示する催しがあり、先月、K介と見に行った。そのときにはじめてみた万葉イエローは、淡くやさしく上品な色だった。その色あいは偶然にも私が愛用していたジャケットの色と似ていた。

それ以来、またまたこのジャケットをはおって出かけることが多くなった。セーターの胸には赤膚焼のペンダントをつける。これは初めてK介と奈良へ行ったとき、立ち寄った窯元で、K介からプレゼントされたものだ。

出かける時は、台所の連絡帳に、子どもへのメッセージを書きつけておく。これには献立も書きこんでいて、もう何冊かたまっている。

「おやつはやきいも一皿ずつです。一番に帰った子が、玉子をとりに行ってね。二番目の子は、洗たく物をとり入れる。最後に帰ってきたら、お米三合洗っておく」とメモ。

十時半に家を出ると、近所の人が三人で玉子をわけているところだった。有精卵を共同購入するグループで、私も仲間に入れてもらっている。

「いつもお世話になってすみません。あとで子どもがもらいに来ますから」。

あなたに学生時代のお話を伺っていたとき、カトリックの教会へ行ったことはあるが、神父と議論して、納得できず、聖書を読むチャンスは逸した、と云われましたね。あのとき、私は自分のことを話しませんでしたが、聖書に関しては高校生の頃から興味をもち、時々読んでいました。

そして三十代の後半には、まじめに旧約

の創世記から読み進んだこともあります。
旧約には、すでに一般になじまれている話も多くありますし、さまざまの興味ある人間も登場します。ギリシャ神話とちがって、神は唯一神、エホバのみです。（エホバというよみ方はまちがいであって、正しくはヤーウェといわれますが、私が愛読している明治時代の文語訳聖書のとおり、エホバといわせて下さい）。
その旧約に出てくる人物の中でも、ダビデには関心を持ち、もっといろいろ調べたい、聖書も深く読みたいと思っているのです。ダビデはミケランジェロの彫刻でも有名ですが、少年時代は父の羊の番をしていました。姿美しく、たて琴も上手でした。その後、サウル王の後を継ぎ、イスラエルの二代目の王となります。ある夕暮れ、ダビデは屋上を散歩していたところ、一人の女が体を洗っているのが見え、その女が甚だ美しいので、それが誰であるかを確かめると、ウリヤの妻、バテシバでした。だが人妻であろうとダビデは迷わずにその女を自分のものにします。聖書ではサムエル後書第十一章に「ダビデすなわち使者を遣はしてその女を取る。女彼に来たりて、彼、女と寝たり」と、簡潔に書かれています。このような描写は、清々しいとさえ思いませんか。
バテシバはダビデの子を身ごもりました。夫のウリヤは戦争に行ったままです。驚いたダビデは、妊娠のつじつまを合わせようと、ウリヤを戦線から呼び戻し、妻のところへ帰るようにいいます。だが、任務に忠実なウリヤは、妻のところへは寄りません。困ったダビデは、「この者を前線に立たせよ」との手紙を、ウリヤに託して上官に送ります。こうしてウリヤは戦死。バテシバはダビデの宮殿に入ります。ところがはじめて身ごもった子は、エホバの怒りにふれて死に、その次にダビデとバテシバの間に生まれたのが、ソロモンです。
ダビデは、不義をした上に、ウリヤを死なせたことを悔い、エホバにひたすら祈ります。この悔い改めの祈りのうたは、詩篇にも出ていて、よく知られていますね。
あなたが、私たちの出会いは運命的な気がする。私たちだけの愛のかたちを育て、全うできるように、神にも祈りたいと思うようになったといわれましたね。私も、そんな気がします。
そして、「愛」とよぶものは、一体何なのでしょう。男女の愛も、真の愛は無償の愛だといわれますが、ほんとうでしょうか。そんなになれるでしょうか。
やはり聖書で、これは新約の方ですが、愛について述べた有名なところがあります。コリント前書第十三章です。明治の文語訳ですが、ちょっと読んでみましょう。
「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行わず、己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念わず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、おほよそ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。愛はいつまでも絶ゆることなし——」。
広告代理店といっても、大手とちがって、小さな事務所に電話と、社長と社員一人というところも多い。私がアルバイトで、時々取材や原稿書き、レイアウトなど編集を手伝っているのも、こうした小さな広告代理店である。仕事も、続けてあるかと思えば、一カ月間、何の音沙汰もなかったりする。
時には、「私はフリーランサー」と、名刺を作って気どってみるが、現実は厳しく、とても「仕事をやっています」とは言えないのである。だから仕事も先方の注文どおりに応じなければならない。特急でやってほしいとせかされても、わずかの支払いが先付小切手になっても、「はい」。働きたいのに仕事が

ないというのはとてもつらい。

女は結婚しても働くべきである――という夫の考えに支えられて、私も三人の子どもを産休明けから共同保育所に預けてがんばってきた。高校卒業後、ずっと生命保険会社で事務員をして、三十歳のときある業界新聞社に転職した。ここに七年間いて、編集の技術をおぼえ、その後、あちこちを転々とし、今はとくに務め先のない身分になっている。

振りかえってみると、私自身、固くるしいまじめ人間ではなく、やろうと思い立ったことには何でも挑戦し、見込みがないとすぐに方向転換して次のことを考えるというところがあった。今でも、直観で行動し、あとで考えるというところは変らない気がする。

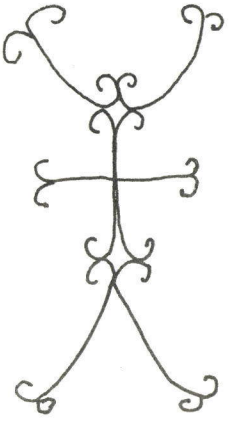
短い時間でしたが、お会いできて共通の時間がもてた、今日の日に感謝します。ほんとうに、二人をひき合わせた神さまに祈りたいくらい、やさしい気持ちにつつまれた時間でした。

佐伯祐三展をみたあと、館内の喫茶店でコーヒーを飲みましたが、おちついた雰囲気で、絵画の余韻を味わうのにふさわしいひとときでした。

佐伯祐三は一八九八年に大阪・中津で生まれ、三十歳で亡くなりました。その死後六十年になるのに、その作品の生々した魅力。それも最後の三年くらいに集中して傑作を多く残し、まるで燃えつきるように、命絶えたのです。その激しい生涯は、ゴッホに似通ったところもありますね。死の前の作品に、黄色が多く使われていた点も。

ゴッホとちがって、佐伯には同じく絵を描く妻・米子と、娘の弥智子がいました。ところが、パリで弥智子が病死し、娘を追うように佐伯も肺患と、調和を失った精神のため、朽ちてしまったのです。

あなたと絵をみながら話していたように大胆な表現と繊細な感性が溶けあい、壁や広告塔を題材にした絵にも詩情があり、自分の日常に忘れてきたものを探すような気持ちになりました。



美術館を出たあと、私たちはパリならぬ大阪の高層ビルのかげでお別れ。信号を渡り、並木の向うへと何度もふり返り、手を振りながら職場へ急ぐあなたを、見送っていました。左肩をちょっと上げて歩かれる後姿も、なつかしい目の中の光景です。忍ぶ恋の間柄――といいながら、人と車の多い通りで、あんなにふりかえり、手を振っていいのですか？　ほんとうに「野守は見ずや　君が袖振る」とでもいうところですよ。こんなことを言いながら、子供っぽいことをして、喜んでいる私たち。

街に出かけると、つい寄ってみたくなるのが本屋である。小遣い不足を嘆きながら、一冊、二冊と買ってしまう。

最近はK介と会ったときに話をしようと思うと、本の読み方も少し変ってきた気がする。その本を読んでいない人にもわかるように、内容を説明し、そこから得たもの、感じたことを話す――ということのために、以前に比べると読み方も深くなったとおもう。私のいまの精神世界を支えているのは、K介の存在が第一といってもいい。

たった今まで会っていたのに、家へ帰るために電車に乗ると、言い知れぬ淋しさにおそわれる。それは胸をしめつけられる、という表現がぴったりのものである。

K介も仕事が終われば、その妻と子が待つ家庭へ帰る人だ。そこにはお互いに踏みこめない世界がある。お互いにもう「恋は卒業」の年頃になって出会った二人。それだけに、魅かれあうものには深さがあり、またどうにもならない間柄は、のめりこむほど、淋しさにおそわれるのだろう。

家の近くまで帰ると、スーパーマーケットへ寄る。特売の材料でできる献立を考え、あ

とは酒屋へ寄って、二級酒の紙パックを二つ買った。一つは夕方の淋しさをまぎらわすためと、一つは夜、一人で起きているときに飲むために。

万葉の時代には、愛する男と女はいつもいっしょにいたのではなかった。通い婚の時代である。万葉集には、だから、切ない感情をうたったものが、非常に多い。

K介との間も、いつもいっしょにいられないから、万葉の時代と同じなんだ。万葉の世界に生きているんだ。と言いあっても、現実の日常生活との落差は大きい。サンマを焼き大根をすりおろし、同居の夫と子どものための食事を作っているのである。

「洗たく物をとり入れなさい」

「学校からのプリントはなかったの」

などと、子どもに声をかけながら、コップにうつした二級酒を立ち飲みしている私。出来上がったきんぴらごぼうを一本つまんで、また飲んで。

あと三日待てば会えるというときでも、いつも淋しく不安です。ほんとうに会えるだろうか、会いつづけられるだろうか、と。

有配偶の男女が、あるいは中年の男女がどのような愛の世界を築いてきたかを、思いおこしてみます。

渡辺淳一の小説「ひとひらの雪」の伊織と霞の関係は、愛とは言えないものですね。大人の関係——情事のみ。あの二人がいったい何で結びつけられていたのか、描かれていません。何にも対話をしていないのです。

霞は夫ある身で、伊織と奈良や京都へ一泊の旅行をするし、ヨーロッパにも行きます。あれはドラマの単なる色彩であって、何の必然性もありません。二人の関係は、ついに霞の夫に知られて、二度と会えなくなりました。あのようにしないと、ドラマの結末がつかないのでしょう。

「ひとひら族」という流行語もできたといいますが、私たちの関係の方がずっとすばらしいと思いませんか。なぜって、私たちの方には、会話があり、高めあう努力をしようという気持があるから。

つい最近、あなたと見に行った、往年の名画「慕情」。美しくいい映画でしたが、やはり二人の会話は、あまりなかったと思います。それに、この種のドラマには、ふつうなら子供がいて当然の人物にも、子どもはいないという設定になっているのが多いですね。それとも子持ちの私たちの方が例外なんでしょうか。子どもが出て来ないのは、ストーリーの効果を高めるためと、実際には描きにくいということもあるのでしょう。

「慕情」の新聞記者マイクと、美しい未亡人の医者のハン。この二人は一九四九年の香港を舞台に愛しあうようになります。革命前後の中国。そして朝鮮戦争という社会状況の中で、二人の愛は、マイクの戦死という悲しい結末を迎えます。

マイクとハンは、知りあって二度目のデートで海へ泳ぎに行き、夜の浜辺で二人はタバコとタバコをくっつけて火を点じます。

あのタバコのシーンを

「あのとき二人は結ばれたんだね。早いなあ。でも、美しい描き方だ。学生のときもこの映画をみたが、あの頃は二人に肉体関係はなかったとおもっていたが、今度みたらちがうんだな。そんなことがわかる年になったんだなあ」

といわれた、あなた。

私は、今度みても、あのシーンが、二人の肉体的結びつきを暗示するとは気がつきませんでした。私の方がやっぱり子供ね。だって十歳もちがうんですからね。あなたも私も、以前に別々にみていた映画をいっしょにみて、現在の自分たちの状況に似た心理状態を味わいました。すでにストーリーを知っていただけに、あの楽しそうな二人が、やがて引き裂かれて別れるのだと思うと、涙がとまりませんでした。

今の私たちも会えば楽しい時間を過ごしているけれど、ほんとうにこんなことがこれからも続くのでしょうか。私たちがいくら愛しあっていると言っても、誰も祝福はしてくれません。引き裂かれることはあっても——。

こんなことを書いていると、またいっそ

う、はかなく淋しい思いにとらわれます。

夕食ができかけた頃に夫が帰宅。ああ男はいい。夕食の支度のことなど気にしないで好きな時に帰れるんだから。以前そんなことをもらすと「それなら一家を支えて働いてみろ。その方がよっぽどしんどいぞ。時間が自由になって、好きなことやれて、そっちこそいい身分やないか」と言い返された。それでも何か割り切れない。女の身分の方が「まし」だとは思えない。

わが家ではほとんどの日、夕食は家族がそろって食べている。食卓に全員がそろってから、「いただきます」とあいさつして食事のはじまり。テレビはちょうど七時のニュースを伝えている。五人がそろっても、めいめいテレビの音に耳を傾けている方が多く、とくに会話がはずむこともない。気むずかし屋の夫は、誰かのお箸から食卓にこぼれおちたものをいちいち指摘するのに忙しく、何とか行儀よく食べようと、みんなそのことに気をとられている。

その夫は、ガラスのコップを使うときなど電灯の方に向けてくるくるまわしてかざしてみて、一点のくもりもないのを確かめないとビールもお茶も入れようとしない人である。もし、コップの洗い方が不合格のときは、カチンと音をたててテーブルにおく。次のを出す。手にとってくるくるカチン。また次、とうとう家中の十個近いコップが、カチンカチンと並んでしまうこともある。

こういう人とつきあうには、私もピリピリしなければならない。洗たくをしてとり入れたタオルにもたたみ方の順序があり、それをまちがえてはだめ。玄関のはき物も、ちらかっているということはない。靴もサンダルもきちんとそろえてある。掃除は毎日しなくても、家の中がよく片づいているせいで、きれいに見え、訪ねてきた人には感心される。

だが、せっかくそろって食事をしているのに、楽しい会話はないものか。それを提供するのは私の役目かもしれないが。

静かな夜ふけです。家中がもう寝しずまっていて、ひとり自分の部屋にこもっています。いつかお話した私の好きな花椅子の上は、いま本の山。坐りたいときは、それを床に移して、腰かけます。せまい上に家の中で一番雑然とした部屋。でも、私にはこのくらい、斜めに物が置いてある方が落ちつくようです。

時差勤務のあなたは、まだお仕事の時間ですね。私も、あなたのお仕事が終るまでここで起きているつもり。

「夢はいつもかへっていった。山のふもとのさびしい村に……」という、立原道造の詩がふと思い出され、新薬師寺へ行ったとき、目の前にひろがっていた田園風景の中に、立っています。

彼岸花が赤く、点々とあぜ道に咲いていました。あの花は、不吉な花のように言い伝えられていますが、そんなことはないでしょう。思いがけぬところに、一本、二本と咲いていたり、群生していたりで、その鮮やかすぎる色に、驚くのでしょうか。

「むらがりて、いよいよさびし　ひがん花」というのは誰の句だったか。

「ゴンシャン　ゴンシャン　どこへいく
赤いお墓のひがん花　ひがん花
けふも手折りに来たわいな」

とうたったのは北原白秋。「地には七本、血のやうに」と、この花を表現しています。

いつも私の心にふとよみがえる、若いころの愛唱の詩。白秋や藤村のものが、いくつか、なつかしく思い出されます。

「バラノ木ニ
バラノ花サク
ナニゴトノ不思議ナケレド」

これも白秋。この詩には「バラの木に花が咲くのは自然なことのように、人を好きになり、愛しあうのも不思議なことではない」と、私流の解釈をして、少女時代から愛唱している詩の一つです。

あなたと私の偶然の出会い。それからは一つずつ積みあげて築いてきた、楽しく、夢のような時間。公表できないのは社会の掟にそむくからで、二人の間では、何もかも、当然のことのように私たちだけの時間を持っているのですね。

一度、あなたのお住まいの近くまで出か

けてみて、そういうことをする自分自身を嫌悪し、悩み、辛いとも思いましたが、今は少し余裕もできました。一種の開きなおりかもしれませんし、やっぱりどこかで、あきらめているところもあるのです。

中年の男と女が、それぞれの家庭につかりながら、「純粋な愛」といっても、それは願望、見果てぬ夢にすぎないのではないか、と。

私たちの愛が、ほんとうに永く続くものかどうか、それは賭けのようなものです。いまは信じあえる間柄ですが、どんなことが起こるかもわからないし、そのときに耐えるのか、転ぶのか、自分でもわかりません。

あなたの口ぐせ「静かに永く、死ぬまで」つきあいたいということに、やっぱり自信はありません。私の中には、もっと激しくぶつかって何とかなった方がいい――と思う火の玉があります。今も、その想いに冷たいお酒をかけて静めているところ。

「秋萩の上に置きたる白露の消かもしなまし恋ひつつあらずは（万葉集・巻八）」

あの新薬師寺の萩の美しかったこと。その中にいた、あなたと私の夢の時間。いつかは醒めることがあっても、悔いはしないとおもいます。

ノートを閉じ、時計をみるともう夜中の二時前だ。あと三時間半で、また次の一日が始まる。コーヒーカップに入れたお酒ののこりを一息で飲むと深呼吸をして、部屋の灯りを消した。

れふぁむ例会レポート

＊52回／1月30日京都嵐山「京の幸」にて

読売新聞に「興味深い〝生きがい修正〟」と16号のことがのり、片岡さんの家の電話をかいたものだからたまらない。ひっきりなしの電話でどうなることかと思ったが、フタをあければまずまず。前日からのとまり込みは14人。夫とケンカして、荷物をまとめてとびだしたという堀さん、交通事故のためすっかり顔がかわり、離婚を考えているという川口さん、4年ぶりに福井から京都へまいもどり参加したという西村さんなどで、夜おそくまでダベルこと。

翌日は浅野、金本両氏の指導による太極拳で目をさまし、渡月橋あたりまで散歩。午後からの参加者3人を加えて〝子どもを持つことの意味〟など議論。「5年間子どもができず、石女といわれた。29歳で初めて出産、3歳までは自分の手でと退職した。子どもは得たが、失うものも多い」「子どもの成長とともに成長した」「子どもを持ったら親が成長するとはかぎらない」「持った以上はそうしたい」「いずれにしろ迷いはつきまとう」など。

親にしてくれてありがとう
――三〇代の覚え書

山崎万里

＊ワァーイ　四〇歳

今年の年賀状には四〇歳を迎えた同窓生からの「早くも四〇歳、わびしい」といったものが目につきました。でも、私にとっては「末っ子が一年生になる年が四〇歳だ」と待ちに待っていた四〇歳でした。大学の恩師には「研究的実践者から実践的研究者に軌道修正する年です」と喜々として宣言しました。

「れふぁむ」には、ちょうど一〇年前の七三年一〇月に、育児雑感（その一）「子どもを羅針盤にして――母と子は動く研究室――」以来、七七年一月に育児雑感（その四）「三人目への挑戦」を書かせてもらいました。そして、今年八三年四月、三人目が小学校一年生になったのです。

「子どもは、研究だけでなく、私の人生の変革の源泉であり、羅針盤だともいえる」と書いてから一〇年、まさに三人の子どもたち（一四歳、一一歳、七歳）は私にとって源泉

であり、羅針盤でした。

＊健一（一四歳）から学んだこと

健一も含めて保育所の子どもたちをみると、起きている時間でいえば家よりも保育所にいる時間の方が長いのに、一人一人の子どもたちはどうみても画一的どころか、全くその子の親の産物そのものでした。どの子も接触の時間の多少にかかわりなく親の影響をモロに受けてできあがっていました。

健一はもちろんのこと、私の特異な子育ての産物でした。絵本は求められるままにいくらでも読んであげる。すべてを語りかけてわからせようとする。本当に怒ったら黙ってしまう私の理・知・静の手の上で、健一は本の大好きな、おとなしい、泣き虫でみんなの中に入りにくい、大人の気持を読みとる子どもに育っていました。

私の手の内から何とかはばたかせ、もっと多面的な成長をと願った私は、健一にかかわるすべての人たちにともに育ててもらうために連絡ノートを書き続けました。

多勢の先生方の協力を得て、健一が子どもらしくはばたき出したのは三年生からでしたが、私が母親としてのあり方を変えることができたのは健一が五年生の時の担任の先生によってです。

五年の新学期、例によって新担任に連絡ノートを書きました。この連絡ノートは健一が一年生に入った時につくった大学ノートで、表紙に健一の字で「おかあさんとせんせいのれんらくちょう」と書いたものです。だいたい、学期の始めと終りに健一について思うことを書いて、先生も思うことを書き、返して下さっていました。

五年の担任のN子先生は一年生からの分も全部読まれて、家庭訪問の時に「健ちゃんがあーなのは、お母さんがこーだからだとつくづく思いました。お母さんは書くことを通じて健ちゃんを見つめ育てている」といわれました。さらに「私は学級通信を出しません。書く時間がないくらい子どもと身体をぶつけて遊んでいます。子どもが廊下で寝そべって何かしてたら寝そべってのぞきます」といわれました。

私はずい分多勢の人に「親子ともどもよろしく」といって育ててもらってきました。健一は年々明るく積極的に育っていましたが、私自身は健一に対する対し方をあまり変えていませんでした。その中でも最も変わっていなかった部分として、夫に「書き魔」と笑われるくらい子どものことを書きつづけてきていました。

「書くことを通じて子どもを見つめ、育てている」の一言は私に重大なことを気づかせてくれました。私は健一の観察者であり、論評者であり、記録者であって、書く作業の中で子どもをだきよせ、見つめ、語りかけていた。私はこれを〝とても熱心に育てている〟と思い込んでいたことに気づかされました。

絵本を読んだり、おしゃべりをすることにはおどろくほど時間をかけてきたけれど、子どもたちと同じ床の上で友だちとしてころげまわってこなかった私を先生はこの一言でいいあててくれたと思いました。

以来、私は子どもの日常を書きとめることをやめました。なぜなら、一緒になって遊んでいたら疲れるのと時間がないので理路整然と状況を描写することがめんどうになり、簡単なメモになり、書くことのおもしろさはなくなり、むしろ、しゃべる方が自然になってきました。私にこの変化をスムーズにおこさせたのは下の子のおかげです。

＊朝（一一歳）から学んだこと

健一はどんな子かということは私のノートの中に書かれており、書いた私はどういう子だと二〜三の事例をあげて適確に説明できるほど、健一は私の手の内にのっていて、私の理解の及ばない点が見当らなかったし、私に従順すぎることだけが悩みでした。

ところが、朝は三歳にして、すでに私の手の内からはみ出してる方が多くてお手上げ状態でした。朝は毎朝、保育所へ着ていく洋服のことでゆずらずもめました。夕方は保育所であったことを身振り手振りでしゃべり続け、聞き手の私が自分の方を見てないと怒り出すので、私は夕食の仕度をしながら何回も庖丁で手を切り、天ぷら油でやけどをし、布きんがけで目をついたかしれません。

私は朝が本当の子どもらしい子で、健一の方が考え深くて、行動的に言動しない子どもらしくない子どもに育っていたのだとわかったのは朝が五歳になってからでした。それまでは、健一は落着いたいい子で、朝は何とわがままで、虚栄心が強く、自己顕示欲が強く、強情な子だろうと憎らしく思っていました。

朝が四歳になる直前に義母がなくなりましたが、朝は義母に顔も性質もよく似ていましたので、私は「よーし、この相性が悪いとしかいいようのない朝に、姑につかえるつもりでつきあってみよう」と決心しました。そう思って一歩はなれてつきあってみると、何と子どもらしい卒直さ、明るさ、エネルギーをもった子だろうと思えるようになったのです。と同時に、亡き義母へ「母さん ありがとう」と心からいえるようにもなりました。

朝は本も好きですが、何らかの方法で自分を表現していることの方がもっとずっと好きです。

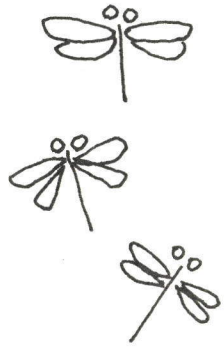
健一の時には、健一について何もかもわかっていることを楽しいと思っていたのが、朝の時の、私の及ばぬ側面が朝自身の手で切りひらかれていくのが楽しいと思うようになっていました。

ところが、拓郎はさらに私に勉強をさせてくれています。

＊拓郎（七歳）から学んだこと

上二人はどんな子と聞かれたら、まじめだとか明るいとか答えようがあるのですが、拓郎はこういう一言で表現できないのです。

おとなしいのかわんぱくなのかもわかりません。小心なのか大胆なのかもわかりません。拓郎は今だにテレビを自分でつけられません。急に大きな音とともにこわい場面が出てくるかもしれないと思うからなのだそうです。誰もつけてくれないと、まず音を小さくして顔をふせてテレビをつけ、パッとはなれてから画面を見、また近づいて顔をふせてチャンネルをあわせてから、ヤレヤレといった顔で見始めます。



かと思うと、先日は絵の具のパレットを忘れて、五年生の朝の教室へ借りに行き、すでに先生も見え、静かに自習をしている後の入口から、大声で「お姉ちゃーん、パレット貸してー」と呼ばわったそうです。帰ってから朝が「近くへ入ってきていったらいいのに」というと「だって、お姉ちゃんどこにいるかわからなかったんだもん。だけど、僕立派だろ、ふつうの子やったら多勢いてシーンとしていたら何もいえないかもしれないよ」というのです。

何事もものすごく慎重ですが一度身体でわかると大胆に立ちまわっていきます。理屈よりも実感の方に強く支配されて言動しています。

また、やる気のない事は全くやらず、気のむいたことは熱中します。小学校一年生の夏休みは「野放し」で本人のすごし方を見ることにしていますが、あと一週間で夏休みが終るという時に宿題を促したら、しばらく黙って考えてから「忘れたら、怒られたらしまいや」といい、朝の監督の下でやっとこさやりおえました。

また、何か失敗すると全身から大声を出して泣き、叱られると「僕、知らなかったんだ」といいます。たしかに、拓郎の失敗は結果がどうなるか知らなかったからおこっていることがほとんどです。拓郎がこのように自分のうかつさから失敗してしまったことと、初めてやったことで失敗したことを厳密に分けていちいち言ってくれなければ、私は注意の仕方を変えることはできなかったと思います。

拓郎は発達の法則「見る、聞く、やってみる気になる、やってみる、やれる、身につく」の六段階もキチンと手順を踏んでマイペースでやってみせてくれます。

上二人の時には、子どもがどんな子か正しくつかめることが親の能力だとさえ思ってい

ましたが、拓郎を見ていると、実に様々な側面をもっていて、生活体験を積み重ねながら刻々変化している。このすべてが拓郎であって一言でどんな子などといえなくていいのだと思うようになりました。

＊首に縄つけられた子ら

一九六〇年以降の高度経済成長政策の要請で出された文部省の教育方針「期待される人間像」は能力別教育の名のもとに膨大なカリキュラムを子どもたちに押しつけてきました。何事も合理化・スピード化の社会的風潮の中で、子どもたちの発達も"手取り早くモノにする"ことに押し流されてきました。

学校でも家庭でも、やってみる気になっていない子の首に縄をつけてこちらを向かせ、知識を詰め込み、やってみて失敗したら「何をモタモタしてるのだ」と怒られ、かろうじてやれると「よし、わかったな、ハイ、次へ進む」です。

好きな事に熱中していると「そんなことばかりしてないで苦手な勉強をしなさい」ととりあげられています。これでは身につくまでの多面的な経験を積む暇もなく、飛躍の機会もありません。その結果は、やる気のない、失敗に弱い、ヒ弱な、取り得のない人間を作りあげています。

その上、不況にあえぐ業界は、すでにここ一～二年、知的に秀れた技術者だけでなく、個性と巾をもった人間を採用したいと手のひらをかえしてきているわけです。文部省も「ゆとりのある教育」をいわざるをえなくなっています。

教育のゆがみを目のあたりに見ながら、この一〇年余りの間に、私は三人の子どもからそれぞれ、人間の発達・形成の重要な点を実体験を通して学ばされました。

それは"型にはめない、決めつけない、待つ"ということです。

＊木の上に立って見る

私はこの間、健一のアトピー性皮膚炎の治療から、また父母の影響から自然食運動とともに生活してきました。健一は、痒いのはいやだからと忠実に食べものの規制を受けいれ、効果も自覚してきましたが、下二人は胎児期、乳幼児期の予防のおかげで、物心ついてからはさしたる健康上の問題もないために、二人とも五歳ぐらいから食べものが他の家と違いすぎると文句をいい出しました。

農業さえもが自然を失ないかけている商工業優先の経済社会の中で、都市住人のまわりでは、最も自然を残しているのは子どもだと思います。でも、子どもは自然そのものかというと、テレビや世の中の風潮とたたかうことなしには子どもの心と身体の自然は守りきれないのが現状です。

子どもとの間で食べものの事で摩擦をおこし、押したり引いたりしながらも毎食は手づくりのおふくろの味を出し続けてきました。

そして、五年～十年待てば味覚や嗜好が育って「テレビのコマーシャルのものも食べてみたいけどお母さんの料理がおいしい」と言うようになることを上二人で体験することができました。でも、まだ拓郎は「こんなお母さんの子に産まれなかったらよかったな」と食べもののことでボヤいています。

"健康な精神は健康な肉体にやどる"を座右の銘としている私は、自然な食べものをとることとテレビを見すぎないなど生活時間のけじめだけはうるさいけれども、あとは本人たちのやる気にまかせています。

"木の上に立って見る"と書く"親"という字は人間が自然の法則（木）をふみはずさないことを最も重要な生き方とする生活の中からうまれたものだと思います。私は子育ての初期には"本の上に立って見る"親でした。でも、今はできるだけ自然とともに生きるという木の上に立って子どもを見守れるようになって、やっと"親"になれたと思えるようになってきました。

でも、時々、食べもののことや時間のことでしめつけすぎているのではないか、子どもに対して管理めいたことは一切しないで自由にふるまわせてやれたらと思うこともありました。

＊お天道様に笑われる

つまり、人間に対する管理と教育の矛盾ということを考えていた時、時あたかもプロ野

球の日本シリーズ（一九八二年）の前後で、西武球団の広岡監督について「管理野球」といわれているのが耳に入りました。それだけなら聞き流したと思うのですが、広岡監督が「玄米が身体にいい」とか「清涼飲料水をやめろ」とかいっているとなると聞きずてにできず週刊誌を読みあさってみると「広岡野球は教育野球だ」という言葉に一つならず出合いました。そして、最近出版された『意識革命のすすめ』（講談社、広岡達朗著）を読んで我が意を得たりの感を強めています。

広岡監督は選手に対して自己の健康管理・生活管理能力を持つことと、基礎技術の完璧な体得（身体へのすりこみ）の二つをすべての前提にすえています。

私は能力というのは自律力（繰り返しのすりこみ作業を可能にする力）と集中力と持続力によって獲得され、発揮されると思います。そして、これを保障するのは体力であり、体力は健康管理能力と生活管理能力によって保障できると漠然と考えていたことを広岡監督は西武球団で実践し、日本一をなしとげたわけです。

このことから、今まで親の主観で子どもを管理しすぎているのではないかと思っていた食べものや生活リズムの躾には一般性があるのではないかと思えるようになりました。

身体の自然、一日のリズム、一年のリズムを教えることは、踏みはずしてはならない自然の法則を身体にすりこんでやることで、何時の時代においても親の基本的役目なのだと思い至りました。たまたま今は「生命より金もうけ」の時代の真只中にいるために、少々やりにくく理解されにくいだけです。

親が立って見る"木"＝子どもを管理する依りどころが自然の法則だったから、昔の親は「そんなことしてたらお天道様に笑われるぞ」と子どもを戒めたわけです。

生物としての人間は何も変っていないのだから子どもを規制する基準はその時代の風潮よりも「お天道さま」であっていいはずです。でも、ある時、拓郎に「お天道さまに笑われるよ」と言ってみたら「太陽なんか関係ないやん」とにべもなく言われましたけど。

子どもを育てることは親として育てられることでした。子どもたちによって私の管理者意識はとり去られました。今、子どもたちは"自分自身を管理できる能力を身につけること"を課題にもった弟子であり友人です。教育方法は親がもって範をたれることと、繰り返しによる身体へのすりこみの二つです。その他はできるだけ多勢の人に育ててもらった方がよいと思います。

私の三〇代の覚え書きは、子どもたちと親たちとそれにつながるすべての人たちにむかって「親にしてくれてありがとう」で結ぶことになりそうです。

そして、四〇代もまた、私にとって子どもは源泉であり、羅針盤となることでしょう。

（一九八三・一一）

昼間家にいると△△△△ ▽▽▽▽ 専業主婦をとりまく状況

高橋麗子

「ピンポーン」とインタホンが鳴る。「ハイ」と元気よく答えると「子供さんがよくなる教えについて少しお話しさせていただきたいのですが」といわれる。「ハア、どちら様ですか？」と私。「K会といって人が歩むべき倫理の道を教える会です。」「うちは無宗教ですが……」「いえ宗教ではありません。人の道をお教えいただく会です。」

インタホンごしにことわるのも気の毒な気がしてついにドアをあける。感じのいい人である。いっしょに出てきた娘をみて、「かわいいわね。いくつ？」と聞かれ、娘は恥ずかしそうに「さんさい」と答えている。おあいそでも子供がほめられれば母親はうれしいものだ。少し気をよくした時、「お子さんがよくなる教え」なるものの本を出してこられる。

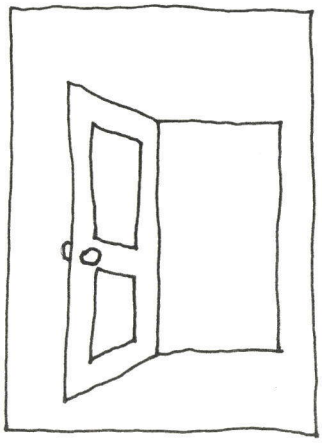
主婦の関心の第一は子供だから、こういわれれば一応の興味は示すのが普通だ。ではどうすれば子供がよくなるのか、いやその前にどういう子供が「よい子」なのか、いろいろ話を聞くうちに「素直で不足をいわず、親や先生を絶対のものとして敬まう子」ではないかと思われてくる。そしてその為に夫は妻を慈しみ、妻は全身全霊を棒げて夫に仕え、日々を楽しく過すことが子供を正しく導く、とするのである。

そこまで聞いてきて思わず、「もう結構です」といってしまった。戦前の教育勅語の世界へつれてこられたような場違いなこっけいさを覚えた。だが相手はまじめである。私は一言いわなければ、という気になってきた。

専業主婦にはどう理屈をつけてもやはり、夫に養ってもらっているという後めたい意識がある。事実、共働きから専業主婦になったわが家で夫婦の精神的な力関係の変化がなかったとはいえない。それをぬぐい去る為にある人は家事、育児の換金できない重要性を自らにいいきかせ、ある人は経済的自立の為に働きに出る。K会ではその事実を素直にうけとめ、それゆえに夫を絶対の夫として従うことを説く。そういう母の姿をみて子供がまっすぐに育つというのである。

男にとって随分都合のいい思想だなと思われるのに、会員は女性が圧倒的に多い。普及員も女性である。隷属状態に安住する思想を自ら広めゆく女性がいることに私は少なからずいらだちを覚えた。だが昔はともあれ、今の私に他人の考え方をとやかくいう気慨はない。人それぞれに心に感じる幸福は異なるのだから、家庭の中のみに幸せを感じ得る人はそれでよい。しかしそうでない人もいる。一個の人間として、妻であり、母であるそれ以外の自分自身を模索している人の道をはばむようなことはしないでほしい。

ここまで一気にしゃべった時、その人は、「ではお子さんはどうされるんですか」といわれた。「お子さんがかわいくないのですか」私はもうムッ！ときた。どこの世界にわが子がかわいくない母がいよう、この子を世界中で一番愛しているのは私だ。夫をないがしろにするつもりなどさらさらない。なのに自分たちの考えと違うからといって、別の信念をもって必死に悩み、生きている人に対して失礼ではないか、私は再び「もう結構です」といった。



「私は我が子をあなた方の思うような〝よい子〟にしたいとは思いません。人間なんだから泣きわめくこともある。感動もする。理不尽に対し憤ることもある。そういう熱い血潮の流れる人になってほしい。親だって完全ではないのだから反抗することだってあろう。親をのりこえて成長するのが子供だ、良妻賢母になりたければそれもよい。キャリアウーマンもよい。それは個人の選択にまかせるべきであって他人がおしつけるものではない。

まして女と生まれたその事で選択の可能性を一切断ち切られるなんて不自然だ。そういう思想を女自身が信じ、広めている限り、女性の現状は好転しないのではないか。」私は不覚にも目がまっ赤になっていた。

彼女たちはいつも四、五人ぐらいで組をくんで地域をまわっている。布教とはこうしたものだがあちこちの支部の連絡がとれないのか、とにかく人を変えて何度も何度もこられる。最初の時三十分ほど玄関先でしゃべってもう拒絶反応をおこしたので、ドアごしにおことわりしているが……。

それにしても教育勅語のような教えが現代にこれほど生きているとは驚きである。時代は移っても人の心はそう変らない。男尊女卑、女は家庭へという思想は永遠のものなのか、と気分が悪くなる。だが確実に浸透している。近所にも結構たくさんの会員がいるし、PTAでお知りあいになった方の中にも大勢いらっしゃる。年配ではない、若い方である。朝、三指をついてご主人を送り出すという。（う

ちの主人など気持悪がるだろう）その家庭はきっと円満で幸せなのだろう。子供も素直でよい子なのだろう。もしそうでなくてもそれを試練としてうけとめ、不足をいわず自己の精進に努めておられるのだろう。それで自分の心と家庭の平和が保たれるのならよいではないか。私はその人たちを否定しない。

だが一方で、男尊女卑、男女分業を天の理として、その中でのみ平和を得られるとする思想が広がるのをこわいと思う。敗戦後、一度はくずれたはずの価値観が、再び頭をもたげてきていることは事実である。夫婦関係、親子関係に悩む主婦の間に、こういう思想はいとも簡単にはいりこんでゆく。専業主婦という経済的、精神的に独立し得ない層に精神のよりどころを与えているのだろうか。

K会とは異なるが、「三分間だけおいのりさせて下さい」といってくるところもある。手をかざして祈れば悩みごとが消えるそうである。又、布教に必ずといっていいほど子連れでこられるところもある。その方が効果があるという意図をみるのはゲスの勘繰りだろうか。

いずれにしても主婦、特に専業主婦の関心の第一が子供であることにターゲットをあてているのは確かだ。K会の宣伝文句も「子供がよくなる教え」であった。昼間いろいろとやってくるセールスマンまでも「子供」を前面におしだす。幼児教材や本の売りこみなど「子供にこれを与えないと子供がダメになる」とまでいって脅迫気味である。音楽教室なども、ピアノを買ってならわせなければ「子供がかわいくないのか」といわんばかりだ。保険、化粧品など商品を買うのをことわると、次はお子さんの教育費の為にセールスの仕事をしませんか、というおさそいである。

事実、主婦どおし集まると必ず、子供の話か、働き口の話が出る。ここで働き口といってもすでに彼女らには正職員としての職をもとうという気はあまりない。子供が幼稚園、学校へいっている間、ちょっと出て、子供のおけいこ代と自分のこづかい程度を稼ぎたいのである。必然的にパート、あるいは内職の話になるが、これがまた、三日間それこそ夜なべして三千円とか、宛て名書きのバイトというのでTELしたらはんこを売る仕事だったとか、配布のみというので応募したら結局セールスだったりして何ともうまい話はない。だが決して子供を他に預けたり、カギッコにしたりして働く気はない。そうすることは今まで専業主婦だった自分を否定することになるのだ。

専業主婦には家事、育児を人まかせにしていない、子供を自分で育てているという誇りがある。女性の地位うんぬんは、こんなもんだと思っている。物価と教育には関心をもつが大きな変革を求めはしない。

共働きで、女性の地位向上に積極的に活動している人々にとって専業主婦のそうした意識はいらだちの対象だろう。共に女性として連帯を、といってみても、状況と意識の違いをのりこえるにはまだまだ長い闘いが必要だ。私自身、両方の気持を理解しながら、アップアップしている自分を情けなく思う。でも、ささやかながら始めよう。来春から幼小中生を対象に英語教室を開く予定である。娘は働く私をみて育つ。ただ夫に従い、子供のことばかり考えている私をみて育つよりも「よい子」になると思う。そうなってほしい。

れふぁむ例会レポート

＊53回／5月15日　堺の浅香山団地の柿坂緑さん宅にて

あのほっそりした柿坂さんがいつの間にかお母さん。小児科医の夫と大学院で児童心理学を勉強している彼女。大学院の友だちで、名古屋の日福大から大阪市大にきている吉田ひとみさんは例会初参加。

生まれて一カ月はおむつ洗いに3時間もかかるし、3時間ごとに授乳があり、くたくたになったが、思いきって貸おむつにした。赤ちゃんは生後2カ月でまわりがみえるようになり、笑ったりして母親の母性をひきだす。障害児のおやが育児ノイローゼになるのは子どもからの働きかけがないからではないか。

「出産直後からすでに子に対して強い愛着を示す母親とそうでない母親とがいる」（ロブソン）。研究によれば、母親役割の受容に積極的な人ほど、お産も軽く、育児態度も安定しているとか。

ひとり、ふたり、さんにん、よにん

○○夏から秋へ

片岡陽子

今まで何かというと夫とのことを書いてきた私だが、今年は娘たちとの対決を書こうと思った。実際七月の終りごろに書き始めてかなりの分量になったくらいである。しかしつくづく思うことは子供というものが変転きわまりなく、したがって子供との関係は捉えがたいし、本質をみきわめるのもむづかしいということである。夏に書いたものがもう今では現状に合わなくなっている。

ところで八月十五日「れ・ふぁむ」15号を読まれた読売新聞の清野博子さんと「少女たち」という連載のために話をすることになった。ちょうど娘たちのことを書いたところだからタイミングはよかったといえる。一方今話していることがいつまで持続することだろうかという不安もあった。

二カ月後、記事になって送られてきたものを読んでもやはりその危倶はあたっていると言わざるをえない。たしかにあのころはまきこが四年制の大学へ行くことになった経過をふり返ってみて、記事に書かれたようなことで納得していたのだが、今になるとそれも怪しく思われる。なによりそれ以後のまきこの行動をみているとなかなか確信を深めることができないのだ。受験勉強はしているが、それ以外には何もしない。あるいはしていることが幼稚すぎる。そこで私は自分が自立することだけを目ざし、娘たちに働きかけるゆとりのなかったことを反省するのだが、同じく清野さんのインタビューに応えられた吉田喜代さんの次のような言葉にいささかの慰めを見出してもいるのである。

「娘が選択する前に、自立する女のイメージを暗示にかけていた部分があって、あまりにも母親の影響が強すぎるのですね」

夫がまきこと大学受験についてあれこれ話し合っているのを聞く時、私が感じる喜びにはほとんど一点の曇りもないと言い切れる。やっと父親の出番がきて、どうにかそれに間に合ったのは幸運と言うべきであろう。働いて欲しい、自立して欲しいと願う私の気持が夫に理解されているかどうか不安は残る。わかっているはずと思っていたことがそうではなかった例は枚挙のいとまがない。もっとも夫の立場が私とぴったり一体でなくても当然だし、私としては機会はすかさずとらえて、自分の気持を夫に伝えるように努めてはいる。

たとえば高校のＰＴＡが三年生の親にアンケートを行ったなかに

一、親として子供の将来に何を期待しますか。

二、どんな仕事をして欲しいと思いますか。

というのがあった。

一、にたいして

○女だからと結婚に逃げこまず一生働くこと

○恵まれた半生をすごしてきたことを自覚しこれから先いかなる試練があっても耐えぬくこと

○社会的視野が狭いことを認識し、視野をひろげる努力をすること

二、にたいしては

○農業

○福祉

○国際交流

と書いて夫に見せた。夫は農業を最初にもってくるのだけはあまりに実状を無視している（まきこは私の畑へも恐る恐る一回足を踏み入れたきりなのだ）と順序を変えたが、あとは同意したので、私はいささか心安んじたのである。同じくまきこの性格について、これまであまりに順調にきてつまづいたことのない人間として、物事に感動する深みに欠けると分析したが、これにたいしても夫は異論をとなえなかった。

数年前の正月、娘たちが母のところに五日間も滞在したことが一度だけあって、その時私は「子供のいない正月」に有頂天になった。あまりにも幸せで、必らず不幸が隣り合わせているのではないかと恐れたくらいである。私がこんなにも子供を重圧と感じるのはみわこの湿疹のせいでもある。みわこが私の手の届く範囲にいる限りはかかないように、かいていたら気をそらせるように配慮せざるをえなかった。京都へきて彼女が自分の部屋をもち、そこにこもるようになってからこの重圧はさらに増したといってよい。かいていると聞えるのだが、音がしなくても姿が見えないからいつもかいているような気がしてしまうのである。

ところで高校受験前の二年間、みわこは湿疹のせいでクラブも続けられず、学校以外はほとんど部屋にこもっていた。そして姉の行った公立を目ざしながらもその可能性はきわめて少ない現状と向きあっていたのである。本人はもちろんそこで勉強しなくてはと思っているにちがいないのだが、それがわかっていてなお「勉強しなさい」と言いたくなるのが親の常。しかしこれは多くの場合逆効果であろう。みわこの場合はまさしくそうで、私は「まったく勉強しないで入れるのが本当なんだ。いやいや勉強して入っても無理が生じるだけだ」とだんだん達観していった。そうしてやっとのこと「勉強しなさい」を禁句としたのである。もちろん公立へ行けなくても私立もある、定時制もある、働いたっていいと彼女をひとつの可能性だけに閉じこめないように努めた。

しかし暗い予感に閉ざされつつ、そこを切り開いていくようにはみえぬ子供を前にして黙っているというのは難行苦行に近い。せめて何かに夢中というのならどんなにいいかと思ったものだ。もっとも最後の方でいつの間にやらロックに凝り始め、それが高校入学後吹奏楽部に入ってパーカッションを受けもつということに結びついたのである。こうしてクラブの合宿でみわこが家を明け、まきこはもともと友だちの家へ行くことが多く（これも小学校時代の彼女を思えば、驚くべき変化なのであるが）、ふたたび「子供のいない日々」を経験することになった。私はにわかに信じられず、ほほをつねらずにはいられない気持で、喜びを味わったのである。

今また湿疹が悪化しているみわこがクラブを続けられるかどうか予断を許さない。はっきりしているのは、見守る（いや見守ることさえやめて、湿疹が悪化しても自業自得とつき放すべきかもしれない）にしても口は出さず、ましてや悲観的な予言などしてはならないということであろう。

家にいることの多い夫なので、私たちは普通の倍くらい、つまり二五×二年くらい共に暮してきたと言えるのであるが、十年ぶりに夫は半年の予定で日本を離れた。その間『妻と夫の社会史』の三人に加えて二人の女が加わって取り組んだ『十九世紀フランス女性の栄光と悲惨――路地裏の女性生活史』の翻訳が完了。さらにもう一人加わって『家族の社会学』の翻訳グループが出発した。始めて夫をまじえずに女ばかり集まって、私は夫が留守であることを大いに羨ましがられた。その異口同音ぶりには、私は自分のことを棚にあげて暗たんともしたのである。こうしてまた話は夫に戻って、この一文を終えることになってしまった。

（一九八三・一〇・二五）

「妻と夫の社会史」、新評論刊、二八〇〇円

一九～二〇世紀中葉にいたるフランス社会の妻と夫との間の労働と役割の実像を描く。片岡陽子さんは翻訳者の一人で、巻末に「日仏女性史の接点を求めて」と題して自分なりの女性史論を展開。高群逸枝は母系性社会では女も生産者である故に地位が高かったと言っているが、フランス農村においても、たくましく働く女たちは権威があった。

心おだやかならぬものを

例会に出たばかりに

阪口マサ子

先月、男子の多い進学校である高校の同窓会に出た時は、社会で働く、働き盛りの男性たちの話には刺戟されずに帰宅したのに、レファムの例会に出てからというもの、何か引っかかりを感じて、心穏やかならぬものがあり、最近、またもや英語のテープなどを買って勉強するようになった。

私は、どちらかというと直感的に物を考え判断する方のタイプであると思う。しかし、その瞬間の決断の基準となるものは、長い歳月の間にその人につちかわれたものに他ならぬから、私がレファムに参加して何か行動を起そうとしたことは、私の人生にとって、とても大事なことが起きたのだと思う。

成績でははっきりと抜いていた男子の級友たちが、誇らしげに、現在の社会的地位をふまえて語り合う時、どこでどう人生違ったんだろうと、すでに通ってしまった過程を反芻せざるを得ない。

上海に一年間駐在していた同窓生が語るには、中国では、女性が、男性と対等な位置で仕事に従事している由、日本の女性たちが、いかに不当に扱われているか、身をもって知らされたそうだ。

その日のクラスでは、我々女子どもは、さしみのつまか、はたまた酒席に侍る美女どもか。同窓会というものが、男子たちにとっては、旧交を温めるだけのものでなく、一種の社交の場を提供するものであるが、女子にとっては、日頃の単調な、埋没した家庭生活のうさ晴らしの場以外の何ものでもない。個人的には、何ら、誇示する肩書きも、名誉もない。強いていえば、夫の職種か、子供の自慢か位である。

女子の中にも、著名な書を翻訳されて奮闘している級友が居ります。なかなか家庭持ちや子供ちの女性では、持てる才能を伸ばすには世間の風が余りにも冷た過ぎるといい切るのは甘い考えでしょうか。

当の私はといえば、大学を卒業する段になって初めて、就職という壁にぶち当り、男女差別の問題について、社会の矛盾に目覚めるようになった。非常にオクテの方で、就職戦線には完全に落伍者であり、怠慢な大学生活の気分から脱し切れず、今日に至っている。

結婚して、生活のためにのみ働いて、子供を産み育て、保育所運動など婦人の働く条件に関る運動に参加した。父ちゃんの稼ぎがやっと人並みになると、職場と家庭の両立など疲れ果ててしまって何かが起らない限り、重い腰は上りそうにない。

どうにかこうにか、団地の二DK生活からマイホームに移り、家庭にどっぷりひたろうとした矢先、共働きの長男の家に寄寓していた姑が、急に体力を弱め、寝た切りとなり、どうにもこうにも仕様がなくなって、専業主婦である次男の嫁である私の手にゆだねられた。力も知恵も乏しい身に負わされた荷の重さに、ともすればおしつぶされそうになり、老親の問題で、夫と争いが絶えず、明るかったわが家は、一転して地獄の庭と化し、崩壊寸前までに至った。

姑が来てから二年余、幾度かの危機を、夫婦の絆の再点検、姑の人間蘇生——こちらの苦しみ、努力にこたえて、数年来、笑ったことのない姑が一日中笑い声や明るい顔を絶やさなくなった。子供たちの存在、近隣の友人たちとの、人間的触れ合いによって、困難は乗り越えられ、今や、「阪口丸」は平穏な波の上に漂っている。

婦人と仕事、老後、医療、福祉等々、問題は多くある。しかし、今自分の置かれている足元の、不確かであるが「明るさ」を見る時自己の確立とは一体何なのか考えさせられてしまう。

夫と妻が愛し合うこと（つまり人を愛することの原点とみる）、子供を育てること、家を守ることが、何を意味するのか、人類史上永代に続く人間の営みとは、何なのか。

「世の中、便利になると女性も楽になり解放されるなどというのはウソ。工業化の中で女性は家事、男性は仕事という性別分業はますます固定化されていく。生産性向上の名のもとに人間を部品化し、生態系までメチャメチャにする巨大な産業社会、そうした産業社会の構造、ひいては文明のあり方を根底から問い直さなくては、本当の女性解放、人間解放などあり得ません……女性たちのほとんどが、十九世紀に歴史的に成立した性別分業を有史以来のものと思い込んでいる。そういう意識が変らない限り世の中変らない。……」と十一月十日付毎日新聞夕刊に、京都精華大の藤枝澪子氏が発言しておられる。

現代文明の在り方の根底を問い直す作業は決して「婦人」問題の枠内に限られたものでないことは確かである。

弱者である婦人、子供、老人、身体障害者、貧乏人が浮かばれない世の中にあって「婦人」の分野で社会の矛盾に立ち向かおうとする時、他の分野に広範囲に渡る視野の広さを持つことが、必要である。

生態系を狂わせ、人類を破滅させ、地球の存在を否定する「戦争」への道程を、つまびらかにし、各分野の人々と、手をつなぎ、統一戦線を組むことは、今この平和を永遠のものとし、婦人の真の幸せを達成するためにも必要な課題であると思う。

木に登る魚

私の共働き失敗談

三刀 三樹子

仕事をやめてかれこれ二年たった。本当に退職したのはこの（五八年）一月でそれ以前は産休・育休だから、気分の上ではある意味では二年というようなあいまいな数え方だ。「仕事をやめなかった話」（れふぁむ13号）を書いた手前、「仕事をやめた話」も書くべきだろうと思いながら、どうしても書けなかった。

一つには、あまりに早い時点では、私達の計画を大巾に混乱させた義父母や夫を一方的に責めたり怨んだりする見苦しいグチ話になるという危険を自覚していたこともあるが、もっと深く、語ろうとして語れなくさせる不明部分があったからだ。

どうしてもわからなかった。なぜあんなことになったのだろう。そこから全ての話が始まっているに違いないのに。一度夫に尋ねてみたことがあったが、やはり彼にとっても答えられないし触れたくない話なのだろう、急に口をつぐむと向こうを向いてしまった。

どうしてあんなことになったのだろう。

それは実際には一年足らずの間のことだ。

その前年に私達夫婦は夫にとってストレスの多かった社宅を出て、自分達の家を建てた。義父母が他県の田舎の暮らしを捨てて同居するつもりだというので、やはり相応の大きさが必要だった。続いて長男を出産した。子供は義父母が見てくれるので新年度になれば元通り復職できるはずだった。

ところが義父母はいざという時になってためらいだし、結局計画と現状の接点として義母のみ同居し、月に数日田舎に帰るということになった。私は月に数日の約束で子供を預かってくれる人を探した。この約束は守れなかった。結局義母は月の半分以上を田舎で過し、おまけにいつ出て来ていつ帰るかは義母の都合が最優先された。四月に復職した私は五月に妊娠してしまった。こちらの都合にふり回されるのに疲れたのか、子供を預ってくれた人は九月になるとやめさせてくれと云ってきた。

夫は身の回りにあまり気を使わないたちだったのが一段とひどくなり極めてだらしなくなり、酒量はどんどん上がった。目をつり上がらせてろくにものも言わずグラスを重ねた。あれほど火の始末にやかましかった男がじゅうたんの上にグラスに並べて灰皿を置きっ放しにして寝た。

学校はすさみ切っていて授業のはじめ十分はいない生徒をさがして回り、あき時間は廊

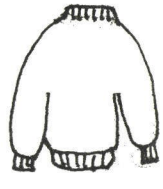
下をうろつき屋上にたむろする生徒に教室にもどるように空しい説得をくり返すのだ。決して休めなかった。休暇をとって自習時間をつくることは握った手をゆるめるようなものだった。妊婦健診は遠足、運動会、文化祭に出かけた。いつも気がせくせいか、ひどい腹痛にたびたび襲われ、出張帰りの駅前で無人の派出所のベンチに倒れこんだり、帰宅のバス停で、山の上の学校まで戻る力もなく近くのスーパーのトイレの床の上に三十分ほど横になっていたりしたこともあった。子供が健康でいてくれたことだけが救いだった。

それでも下の子、長女は無事に生まれたがあんなことと言うのは、そんな具体的な暮らしの一つ一つのことではない。それらを覆っていたあの陰惨な空気のことだ。私達はちっとも希望を持てなかった。力を合わせて状況をのり越えていくのだという意識など持てなかった。お互いの仕事の話などもうしなかったし聞きもしなかった。義母がいる時はもっと悪かった。三人が三様にピリピリした。私は姑の悪口を夫に言ったりはしなかった。考えて言わなかった部分もあるが、悪口を告げられるような連帯意識をもてなかったからだ。

私は一人でがんばっているつもりだった。ろくにものも言わないあんな男などなんでいるのかわからないと思った。男なんて所詮子供なのだと納得しようとした。私は自分勝手な怠け者だと姑を切り捨てた。私は一人で何もかもやってがんばっているのだと思い、よくがんばると自分に満足し、そして呪わしい気分だった。

出産後一月してカタストロフィがやって来て、結局、私は退職して、義父母は田舎で暮らすことにこまを置き直すことで話はつくのだが、本当の修復にはそれから一年以上もかかっただろうか。そして離任式の日も私は、どうしてあんなことになったのだろうと自問し続けていた。

支払いは高くついた。忘れようったって忘れられやしない代償だ。しかし夫は次第に以前のように灰皿の始末に気を配るようになり、以前は一ケ月も続けて着ていた（注意を促すと怒った）セーターも妥当な間隔で着替えるようにもなった。



ついに先日は「酒もちょっと減らさなきゃなあ」と言い出した。月に二度ほどの休日をフル回転して庭木の消毒をしたり草とりをしている。そのせいか桃が五十個ほど収穫できた。みかんも三十ばかり、柿もゆずもたわわに実るちょっとした果樹園になった。

私は専業主婦となり、毎日二人の子供を散歩させながら町内、季節ごとの花見を楽しんでいる。雑誌「婦人之友」の愛読者グループ「友の会」というのは倉敷で総勢百五十人ばかりの婦人グループだが、そこに属して月に数回その集まりに参加。二人の子連れは出るに入るに大事で他の会員の方には荷物から車のことから世話になりっぱなしである。医者通いその他どうにもならない時には近くに住む会員の方が留守番兼子守に来て下さったりで、私は今他人から与えられる一方である。

他に同年輩の子供を持つ近くの主婦二人と月に二回互いの家を会場にめいめいの選んだ絵本を持ち寄って読み合うささやかな集まり、それから近所に片っぱしから声をかけてようやく発足した生協の班、そんなものにかかわりあって暮している。人にかかわるのは単に好きとか退屈だからではない。身内が一人もいない県に住む核家族の私達、特に子供にとって今後成長途上で声をかけたり気をつけたりしてくれる人々の存在は不可欠だと思うからだ。

生活はようやくゆったりしたテンポで流れ出し、地域の風景の中に私達はとけこんでいった。

そうして私は、ずっと何が悪かったんだろう、どうしてあんなことになったんだろうという疑問を持ち続けてきた。

この夏、夫は課内移動で部を移った。そう

して入社以来初めて満足すべき仕事にありついた。極めて多忙だがそれだけやりがいある重要な仕事で、そのせいか、忙しいにも拘わらず穏やかで落ちついてきた。「この前の異動はそういえばいつだった？」「あれは丁度二年前」私はぎくりとした。そうだった。いやそうだったのか、と言うほうがあっている。丁度あの頃だったのだ。それが疑問のとける糸口だった。

夫はその前の部に約七年、本人の言によれば「仕事もなく」暮らしていたのだ。それがあの年の夏、やっと移動したのだ。そして私は先の会話まで、彼が異動したことがきちんと胸に落ちていなかった。何やらあったらしい、という程度にしか認識がなかった。あの年の夏、久々の大異動で、きっと夫にとっては大変な出来事だったに違いない。彼はきっと私にその話を興奮気味に話したに違いない。それでも私には聞いた記憶がないのだ。そして丁度よその子の名前をすぐ忘れるように、夫に何度も「違う違う今は○○部なんだから」と言われたことは憶えている。

私は、自分はしっかりしていてよく頑張ったと思っていたが、実はよっぽど余裕のない精神状態だったのではないか、もっというとあの頃の私はうろたえて前後不覚だったのではなかったかと考えるようになった。恐らく夫が一番聞いてほしかったに違いないことを私はまるで聞いていなかった。私はひょっとするとあの頃何も見えず聞こえずのうろたえぶりだったのではないか。そしてそれが、あんなことを引き起した原因ではないだろうか。

年子を抱えて暮らしていると、これは一種の社会的弱者である。ずいぶん知った人知らない人の親切を受けた。世間には何と暖かい心の人が多いのだろうと、私は感謝する以前に驚いている。

本も読まず、難しい理屈も言わず、様々な困難や苦労を抱えているのにグチも言わずにまめやかに体を動かし、そして空いた手で人を助けて、別に損をしたとも時間を奪われたとも思わぬらしくゆったりと落ちついている、そんな老若男女に助けられていると、やはり自らのありようを反省させられる。（以下略）

れふぁむ例会レポート

＊54回／7月17日　奈良榛原町の塩田さん宅

片園陽子さんが夫や友人たちと共同で翻訳した「妻と夫の心理学」（マルチーヌ・セガレーヌ著、新評論）のレポート。この本がフランスで出版されたとき、農村女性の実態がはじめて明るみにでたと絶賛されたとか。農村では妻も働かないと生活がなりたたないので、男女の力関係は対等であったと。

初参加は家主の塩田さん（一人ぐらしで、こんな立派な家をもち、お琴、三味線、地唄をたしなむ）、近所の阪口さん、米倉さん、人見さん、高島さんら。万葉で有名な阿騎野にも近いそうだが時間ぎれで残念。

ああ男たちよ

吉田喜代

男の人、こっちへいらっしゃい。どうして男の人ばかり固まって、タバコの煙をもうもうとさせているの？

あなた方は、れふぁむのような会にはめったにやっては来ませんね。あなた方はほろ酔い機嫌になれば、男同志で肩を組み、仕事の話を肴にいっそう男のワを作りますね。女性の解放運動だの、男女の役割分担だの、男の自立だの、今のところオレには関係ないよ、ですか？、それでも何かしら説明のしようのない不安がシコリのように残っているのではありませんか。

男のグループをのぞいてみれば

この人たち、一体どこへ行くのでしょう。ちょっと後ろをついていってみましょうか。

働き盛りの男たちがギコチなく開いたグループ活動の例会に、私は二、三回もぐり込んだことがあります。会場のドアを開くと、わあ、

男性ばっかり。30人くらい。スナックのテーブルを集めて窮屈そうに坐っていました。話の途中でビールやらおつまみやら賑やかに出ていました。

スピーカーが毎回〝仕事に役立つ話〟をします。マーケティング論あり、宗教の話あり、仕事の夢あり、さまざま。出席者の職業もさまざま。特許の1つや2つは持っていそうな中小企業の経営者、流通業界のエネルギッシュな社員、コンピュータのソフト会社の技術者社長。ここへ何かをさがしに来た人たちです。それは発想の転換か人脈づくりか…。彼らはやたらと名刺交換をします。

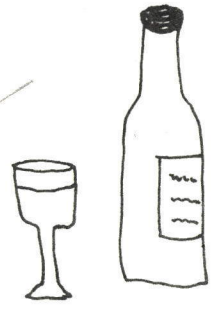
私たち女の例会活動からみれば、男の人のやっていることは、まどろっこしいですね。グループ活動をする共通の目標が不明で、何だか、自分たちの仕事を愛する姿ばかりが際立ってみえたものです。

仕事で自己実現？ とんでもない！

今度は終電車の男たちをみてみましょう。酔っぱらいばかりが乗客じゃないんです。意外と多いシラフの中年男。黒いバッグから取り出すのは、例の、コンピュータ連続用紙。黒カバン氏は数字と英文ギッシリの紙をにらんでいますよ。9時台も黒カバン氏タイムのようですね。

そんな時間まで何をしていたのかって？残業ですよ。一部上場の、日本を代表するA社社員の残業に私は付き合ったことがあります。

展示会の準備に何日も残業が続き（この会社は残業して当り前の会社だった）、今夜はそのピーク。で、彼らの仕事は……え？　そんな事をしているの？　商品の小さな断片をああでもない、こうでもないと、あっちへやったり、こっちへやったり。女子社員だったらさっさと片付けてしまうのにね。でも、彼女たちはこの時間にはいない。男たちがグチリ始めました。もう一週間も女房と夕飯を食べていない、子供は寝顔しか見たことがない、女房が文句を言うんだよ、etc。



B社の場合。ここは驚異的な成長を誇るメーカー&販売会社。夜8時、9時だというのにフロアマイクが各セクションの担当者をたえず呼び出しています。ここでのミーティングでは外部スタッフの私もカシコそうにしゃべらなくてはいけません。先程から、わが担当者殿はガンとしてこちらの説得に応じようとしません。なぜなら、彼はもっと欲張りたいのです。もっと業績のアップする材料を求めて、上司をうならせたいのです。

C社の場合…。もう、やめましょう。ちっとも楽しくありません。そうなんです。仕事を通して自己実現というけれど、男たちの大多数は自己を抑え込んでうっ屈しているみたいです。

男の労働条件こそ改善すべきでは？

私が出会った男たちは、疲れていました。疲れを顔に見せることすら〝修業が足りない〟といって笑顔をつくっていた営業部長がいましたっけ。

半日坐り続けた会議室から出て来た男の人の表情は、ほっとした顔の人ばかりではありません。苦虫、イライラ、げんなり。大急ぎで次の会議室へ移動する人は、ピリピリしていて、声をかければハジキとばされそう。でも、こういった表情はすぐ消えてしまいます。一般に、男の人は表情に乏しいですね。何を考えているか、すぐ分らないようにしてあるみたいです。むしろ、電話の方が声に表情が現われて分りやすいですね。

自分の表情を抑え、疲れをかくすのは、保身の術か、サクセスへの道か。

今、少しずつ景気回復の芽が感じられたりするのですが、そうなると、またもや、男の人は働きます。働くから仕事が仕事を生みま

す。忙しくしている男の人のところには、外部からも仕事が集まってきます。一種の吸引力なのですね。

そういう出来る男の労働条件こそ改善しなければ、と私はハラハラしながら思っています。出来る男の奥さんほど、家にいてハウスキーピング一切と、夫の明日の労働力再生産に力を尽しているでしょう。一方が働きすぎれば、片方はますます外で働きずらくなる。でも、ガンバッてアルバイトやパートに出る課長夫人、部長婦人が増えてきましたが。

男女雇用平等法は、男にとって働きすぎを是正するチャンスだと私は受けとめています。男の労働条件こそ改善して、ちょっとは男女平等に近付けたら、と思うのです。

しかし、経済が生き物のように働いて、たとえ、数パーセントにしろ成長が必要とされている、この社会、果して、男の人はウンと言いますかねえ。経営者はとんでもないことだと反対するでしょう。

ひとつ、可能性があるように思います。

コンピュータ時代が進むにつれ、社員をやたらと拘束するのはどうだろうかと、疑問に思っている経営者がどこかにいるかもしれません。シコシコ働く仕事はコンピュータに任せて、社員をぶらぶら遊ばせてユニークな発想をさせたり、むやみやたらと動き回るより考える時間を与えたりする、フリーな労働時間をつくっている会社が、時折、話題になっていますから。

男の人と話し込んでみる

話は変わりますが、夕暮の街で中年のカップルをよく見かけます。(どういう関係かはセンサクしないことにして)。中年の夫婦の仲の良い姿も休日によく見かけます。男の人の働きすぎを減らすには、男と女が仲良くするのは有効手段ですよ。単純な話ですが、デートするためには残業や休日出勤を減らさないといけませんからね。

男の人は、男だからといって特別製の人間ではなく、淋しがり屋で人を求めたり、傷つきやすいプライドを守ろうとしたり、きわめて感情的な存在であって、結構、女の人にオアシスを求めているようです。このあたりで、彼らとよく話し込んで、理解を求める時かもしれません。

(コピーライター)

「れ・ふぁむ」の妹「それいゆ」

尼川洋子

神戸で産れた「れ・ふぁむ」の妹も、今年で3歳。子育てで言えば、言葉を獲得し、自分の足で歩きまわれる行動の自由を獲得し、自分以外の人間とのつながりを広げていく時期、親の方は〝ちょっと、楽になったわー〟という実感をもつ時期でもある。

さて、「それいゆ」は……、「結婚」「女と仕事」と年ごとのテーマで女性の問題を語りあっていくうちに、〝こんなこと、女ばかりで話しあってたって、ぐちみたいじゃない。男の人はどう思ってるのよ〟ということになり、今年のテーマは「男が語る婦人問題」ということになった。1月例会は、成瀬正博さんに「子育て」について語ってもらい、4月吉田清彦さんに「家事・料理」、7月は溝口重俊さんに「働き生きる女性たちへ――女性論」というぐあいに男性に報告者になってもらった。今日の参加者は、明日の報告者である。10月は、「男と女のフリートーキング」とした。最初、気になる存在だった男性参加者が、いつのまにか我が女性問題こん話会「それいゆ」の中に、すっかりなじんでしまったのは、今年の成果かもしれない。現在は、平均20名の参加者のうち5名は男性。

今まで、私たちは男性をサカナに婦人問題を論じてきたけれど、男性の卒直な指摘の中に、まだ、女の自立の未成熟をも認めざるをえない。しかし、男と女、役割分担意識を捨てれば、この世は自由に生きられるなー。

去年のバイオリンコンサートに味をしめて、今年は5月13日、「宮沢賢治の詩を語りとアイリッシュハープで表現する。クラムボン公演」をやった。子供たちもいれて、170名あまり、公演を味わう間もなかったけど、「それいゆ」は、ひとまわりたくましくなった。1984年のテーマは、現在、思案中である。

＊連絡先＝神戸市灘区鶴甲4の3の19の301
(電)078／811／2361　尼川洋子

Ⅱ 日本を離れてみると

スウェーデン・レポート

米家佐奈恵

一九八三年八月末から九月のはじめにかけて、私は、ドイツ民主共和国、スウェーデン、デンマークを駆け足でめぐってきた。同行者は全部で二十六人。三年がかりの準備が実った十二日間の旅だった。

ドイツ民主共和国では、工場、保育所、ナチ強制収容所跡などを訪ね、スウェーデンでは、ニュータウン、学校、老人のためのサービスハウス（老人ホームとは言わない）、デイセンター、病院、男女平等委員会などを訪れた。

各国の女性の生き方と、福祉の実情を知りたいという目的で、ハードスケジュールをこなしたくさんのものを見たが、それらは、ほとんど、行く前から私が抱いていた期待を裏切らなかった。

その中でも、とりわけ印象に残ったのは、スウェーデンで生きる日本の人たちとの出会いだった。ここに三人の人たちを登場させようと思う。

高橋たか子さん

――とことんラジカルに

ストックホルムの空港についた時、てきぱきした口調の小柄な女性が目についた。それが高橋たか子さんだった。

ややのびかけたカーリーヘア、大きめのメガネ、キュロットスカートに横縞のTシャツ。素足にサンダル、小さなショルダーバックには、折りたたまれた新聞が入っていた。

空港からホテルまでのバスの中で、彼女は話しはじめた。「皆さん、何でも質問をどうぞ」気候やら、お金やら言葉やら月並みの質疑応答が終わった後、彼女は、スウェーデンについて、観光案内の最初のページにあるような話をはじめた。それもややシニカルな口調で。

あとでわかったことだが、彼女は意識的に無難に、かつ皮肉をこめて語っていたのだった。この季節、スウェーデンのような国には、日本からおエライさんや議員さんが大挙して視察に訪れる。会議中に居眠りをしたり、トンチンカンな質問をしておいて、夜の観光にはハッスルする。そういう男性「視察団」も多いそうだ。

「ご機嫌をそこねてはいけないし、政党ご

との考え方の違いにもあたりさわりなく言わないと怒る人もいるし、私自身としては、どうしても疑問や欲求不満のたまる仕事なのよ。せいぜい皮肉を言って発散したくなる。こんな仕事してたら、性格がゆがみそう」とは、後で聞いた彼女の本音。

私たちは、彼女には、余計な配慮なしに思う存分やって欲しい、疑問があれば互いに論争しようと申し入れた。彼女も大いにやる気を出したようだ。

全員のミーティングでの彼女の自己紹介。

「おまえは、はっきりものを言うから日本には住みずらいよ、とよく母に言われました。日本では法律を勉強していましたが、途中でやめ、スウェーデンに来て北欧文学を学びました。私の青春時代は、七〇年代のスウェーデンでもっともラジカルな改革が行われた時代です。その真っ只中で、既成の価値観をいつも疑いながら生きてきました。だから、皆さんと考えの異なることがあると思います。大いに論争して、疑問や質問を投げかけてください。私も言いたいことを言います。

通訳の仕事は八年間。その他に老人の施設のヘルパーもしたことがあります。家では子供が二人いて二歳と七カ月です。生後六カ月で育児休暇を終え、仕事を再開したところです。十年間同棲している男性がいます。もっともこちらでは、同棲のことをストックホルム式結婚といいます。私が仕事をはじめてからは、彼の方がパパ育児休暇を取っています。こうやって私が夜も仕事ができるのはそのためです。」

（ストックホルム式結婚またはスウェーデン式結婚ということばは、今回の旅でよく聞いた。意気投合した男女が、まず一緒に同棲してみて、結婚をすべきかどうかを判断するのである。うまくいかなければ別れて他の相手を探せばよい。二人の生活が安定したり、子どもができたりしてから法律婚に入る。一九七〇年代に婚姻法が改正され、法律的に結婚しているかしていないか（つまり同棲）による差別は全くなくなった。そのため、法律婚をする人が減ってしまったという。）

思わず拍手がわいた。早口である。そのくせ、なめらかに回転する口調。彼女の迫力も手伝ってか、スウェーデン初日のミーティングは十時までの予定が三十分も延びた。

彼女について語る前に、私たちが訪問した先で聞いた話をもとに、スウェーデンの女性について語っておこう。

スウェーデンの女性が、今日のように大量に職場に進出して経済的自立の条件を手にしたのは、日本同様一九六〇～七〇年代の高度成長期以降である。それ以前は家父長制の名残りもあって、女性は家庭にという考えが主流をしめていた。もっとも、本来、平等や民主主義の伝統の強い国柄だったのであろう。一八三〇年には女性も男性同様に社会参加をすべきだと主張したアルムクヴィストという男性作家がストックホルム式結婚ということばをはじめて言ったという。

また、ヨーロッパではじめて女性の大学入学を許可したのは、一八七〇年のストックホルム大学であった。一九三〇年代には、社会民主党が政権を取り、労働者の生活や家族を守る社会改革の中心には、昨年、ノーベル平和賞を受けた、アルバ・ミュルダールのような女性がいた。さらには、第二次大戦中、中立政策を守りぬき、戦争による破壊と浪費をまぬがれたことが、戦後の福祉社会を築く基盤になった。

そんな背景を持ちつつも、多くの女性が職場に進出したことが（十八歳～六十歳までの女性の75～80％が働いており、既婚女性の75％が共働き）、保育所をはじめ女性が働きやすい条件づくりをすすめ、男女平等の社会をつくる推進力になったのである。労働省内に男女平等委員会が作られたのが一九七四年。論議を尽くした上で、よりベターだと考えられれば、新しいものをどんどんとり入れ、失敗をおそれず実験してみるという前進的で真摯な国民性を持つ国だ。改革の歴史はまだまだ新しい。ラディカルな改革の時代を語る高橋さんの若いエネルギーが理解できる気がした。

この国では、現在、男女の「平等」という表現は誤解を招きやすいからと、次のように明解な定義をしている。

「人間の生活を、家庭、仕事、社会参加、レジャーと四つに分け、パパ、ママにかかわ

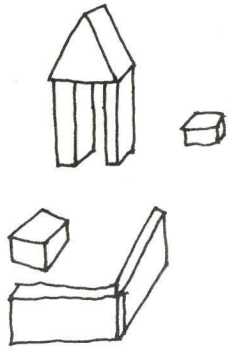
りなく、この四つの分野にかかわる同じ可能性を持つことが、すなわち平等である。」

男性大臣の一部は、この見解を国連に出すことに反対したとはいうものの、全政党は、基本的には、この考えに賛成しているという。

この考えに基づいて、父親も育児休暇をとれる制度が一九七四年に作られた。スウェーデンでは、これをパパ、ママ育児休暇と呼ぶ。産前産後休暇四カ月に加え、九カ月間の育児休暇は、給料の九〇％が両親保険（もちろん財源は税金）から支払われる。その後三カ月は一日につき三十七クローネ（約千百円）が支給され、これはまとめてとってもよいし、子供が八歳になるまで分割してとってもよい。したがって、保育所は、一歳以上の子どもが行くわけで、いわゆるゼロ歳児保育はほとんどないことになる。パパ育児休暇を取る父親は十％程度である。制度ができた当時より、少しずつ取る人が増えている。

高橋さんの夫は、ジャーナリストで、自身育児休暇を取った経験を本にしたそうだ。「パパ育児休暇」という題で、彼女はそれを翻訳したいと考えていると言っている。

男性も取れる育児休暇は、日本でも有名なので、スウェーデンは男女の平等がほぼかちとられているという印象を持つ人が多い。私自身もはじめはそう思っていた。正確には、平等をめざして真面目に努力しようとしている国といった方がよいように思う。改革の歴史の新しさからもわかるように、まだまだ労働の分野での平等は実現していない。働く女性の職種が限られていること、働く女性の半分はパートタイマーで、昇進、昇格、年金額などに差が出ること。（といっても日本とちがい、賃金、社会保険、休暇などの権利はフルタイムと同じ）せっかく保父になった男性が、女性職種故の賃金、昇進等の条件の悪さから、もっとよい仕事を求めてやめる例もあることなどについて男女平等委員会の人は話していた。



それに加えて、不況の時代になって、この改革に逆行する動きも出てきたらしい。女性は家に居る方がよいとか、男性の育休は子どもに悪い影響を与えるとか、母と子はもっと密接にすべきといった心理学者やマスコミの論調もでてきたという。いろいろ難しい課題をかかえているのはスウェーデンとても同じだ。

私たちが話をきいた女性ジャーナリスト、マリアンヌ・シェーレさんの「保守化」の時代に対する評価は、落胆や失望もなく冷静であった。

「60年代のはじめには、パパ育休なんて理解できない男女がほとんどでした。けれども今では、育休はパパにとって必要だという人が出てきた。これは大きな変化です。歴史は波のようにやってきます。どんな時代でも、よりよい人間性を形成するために、男女ともに努力し、弱い立場にある人のためにつくす生き方を貫くことです。スウェーデンの女性は、アメリカの女性のように男性と対決してたたかうのではなく、一歩下がったように見せてねばり強くがんばることが必要だと考えています。」

このことばは、私たちの間で評価が分かれた。「やっぱり、福祉と平等の国といっても、資本主義体制の中では限界があるのね。不況になったら、女は家庭に帰れと言われるのは同じやね」とNさん。「一歩下ったように見せるというのは、したたかにやることやろか。後退することになるのでは」とSさん。「私の生き方も間違ってなかったのね」と専業主婦三十五年のYさん。

国際理解ってひと口に言うけど、難しいものだと思う。その国の人々の歴史や考え方を十分ふまえなければ、ひとつの言葉が一人歩きをしてしまう。

私は、このことばを、スウェーデンの女性たちの社会を動かしてきた歩みに十分な信頼を置いた自信ありげな発言と受け取った。そして、私たちの課題は、日本の女性たちの歩みを、どれだけ確かな、信頼できるものにできるかということにつきる。

ラジカル世代の高橋さんは、このことばを通訳しながら、どう受け取ったのだろうか、残念ながら聞けなかった。ただいえるのは、通訳としての彼女は、話し手の論旨に疑問があると思えば自分の意見を述べ、納得のいくまで話しあってしまう。その間、私たちは、意味不明のスウェーデン語の論争を黙って聞くハメになる。その点、一歩もひかない人であることは間違いない。

彼女自身は、通訳の仕事は最小限にして、もの書きになりたいという。

「でもそれでは食べてゆけないのよ。どこの国でも同じでしょ。」

彼女の税率は約30％。平均税率約50％のこの国では低い方である。スウェーデンでは、収入の比較をするのに金額では言わない。収入の多い人は税率が高く、少ない人は低くなっており、実質的に手元に残る金はそれほど変わらない。彼女の話によると、男性の平均実収は十七～八万円、数年前までは、一クローネ70円であったが、最近、大幅な切り下げが行われ、私が行った時は一クローネ30円になっていた。そのため日本円に換算するとずいぶん安くなる。そのうち住居費は六～七万かかる（※私が本で調べた限りでは、収入の20％をこえる住居費は手当でカバーされることになっている。）ので、どうしても共働きが必要だという。共働きした妻の収入分が、生活費のプラスアルファ――レジャーやセカンドハウスなどの費用にあてられる。

テニスのボルグが税金が高いからとスウェーデンを出てしまったことが有名になって、「高福祉、高負担」ということばは日本ではいつもセットで使われるようになった。それについて高橋さんは次のように説明する。

「それはもちろん、不満はあります。やっぱり金持ちや資本家には確定申告の時にせっせと控除をとったり、裏金預金をしたりして税金のがれをする抜け道があるのよ。だからボルグは逃げ出しても、資本家は逃げ出さないの。

福祉政策は、一定の富の再分配によって国民の不満をそらせ、文句を言わせないようにする攻妙な支配のやり方だという見方もあります。けれど、教育費も医療費も無料だし、老後の心配がないということはとても大切なの。わざわざ貯金をする必要がない。そのかわりに税金をおさめてもよいと私は思っています。」

私が彼女を見て感じたのは、とてもラジカルで、つっぱって生きているのに、何が何でも○○であるべきといった一面的な見方をしないことだった。一見過激なことを言いながら、その実、行動と一致しなくなり、すぐ底が知れてしまうような似而非ラジカルなど足元にも及ばない。

常に百点満点はあり得ない。問題点は確かにある。共に論議しあって、少しでもよりよいものを求めていこう。そういう態度は、ラジカルな彼女だけではなく、保守的な人まで、スウェーデンの人々に共通する「大人」のやり方だ。異文化の中で練られるうちに、彼女自身もそんな生き方を体得していったのだろうか。

しかし、そのことは、自分の考えを言わずに押さえこむことではない。黙っていることは、相手の言い分を認めたことになる。「気働き」なんて、甘いことは通用しないのだ。

教会が運営する、アル中患者のリハビリ施設を訪れた時のこと。牧師さんは、神を信じることこそが、アルコールの呪縛から自由になる唯一の道だと説き、施設にいる一人の男性に起こった奇跡について延々と説明して話はとまりそうになかった。

もちろん無神論者である彼女は、できるだけ忠実に通訳しようと努力していたが、ついに耐えかねて、牧師さんに何かひと言伝えた。牧師さんは急に黙りこみ、間もなく、私たちにあいさつをして座ってしまった。次に、患者の男性が、自分の話をした。彼女は「このアルコール中毒患者は」と言うべきところを「このキリスト病患者は」と誤ってしまった。すばらしい誤訳だと私たちは大笑い。牧師さんには何と言ったのかと後で尋ねたら、「あ

なたばっかり話さずに、患者にも話させなさいと言ったの。そうしたら怒ってしまった」と彼女は言っていた。

おかげで私たちは、後でゆっくりと、お茶と質問の時間をとることができた。

ストックホルム郊外の小学校は、内部にふんだんに木を使い、すばらしく美しいものだった。はじめは、きれい、かわいらしいと写真を取っていた私も、見ているうちに何だかしんどくなってきた。日本の学校のつめこみ教室、さらには、学校どころか食べ物も満足に食べられない子供たちが世界にはたくさんいるのにと思うと、うらやましさを通りこして、やり切れない気持ちになっていたのだった。その時、「私の子供の行っている幼稚園は、コンクリート作りで、こんなにきれいではないわ。こんなすばらしいものを見たら、疑うことも必要よ」と高橋さん。スウェーデンは、こんな考え方をさせる国なのね。

ストックホルムの駅で別れる時、彼女は言った。「楽しかったし勉強になったわ。あなたたちと一緒に、日本で何かやってみたくなった」

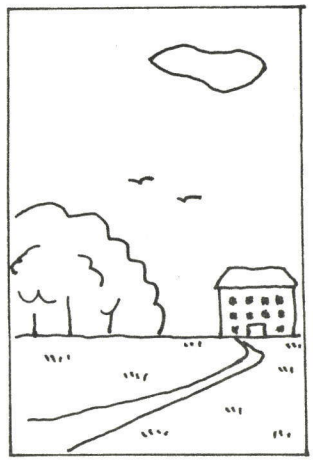
私も同じように思った。彼女の眼は、ともすれば曇りがちな、私の社会を見る眼を、鮮かによみがえらせてくれる鏡のように思えたから。

塚口淑子さん
――自己実現を求めて――

私の手元に、塚口さんと一緒に写した写真がある。彼女の家の居間。一番右端に彼女がすわり、涼しげな笑みをうかべている。真っすぐな髪をレザーカットにし、前髪が少し、額にかかっている。

そのとなりに、私と一緒にこの旅の準備をしてきた温井さん。彼女は四十代の主婦。パートで働いている。そして私。私の左に、堺で図書館運動なんかをしている田中さん。

温井さんの夫と、塚口さんは高校時代の同級生だった由。私もある本で塚口さんのことを知り手紙を出していたし、他の人からも塚口さんの紹介を受けていた。いわば、二重三重の知りあい関係で、会わずには帰れない人だったのである。



ストックホルムには二泊しかしない計画だったので、彼女に会うには一日の日程を終えた夜に訪ねていくしかなかった。

しかし、その日、ニュータウンの見学を終えて帰って夕食は八時すぎから。私たちが、タクシーをつかまえたのは九時近くになっていた。

町の中心からタクシーで二十分ほどとばした所に彼女の家はあった。あたりは、石ころひとつけっても響きわたるような静けさだ。あとから聞くと、彼女の家はストックホルムの市街がとぎれ、森がはじまる境にあるのだそうだ。夏は、近くの森を散歩し、秋にはキノコ取り。冬は家を出たらすぐスキーをはいてすべることができる。日本の信州の別荘地みたいだと思ったが、残念ながら暗くてよくわからなかった。

四階建アパートの三階に上る。重い扉を開いて入った家は、日本でいえば、少しゆったり目の3LDK分譲マンションというところ。日本風に靴をぬいで上がって、寝室、台所、居間、物置の中まで見せてくれる。寝室を見せるというのは、日本の感覚から言うとおかしいのだけれど、これは、家の中に招き入れた人に対して、あなたに敵意はありませんという意味だと聞いて納得。私が訪ねて見た限りでは整然としてチリひとつ落ちていないスウェーデン人の住まいとは少し違っていて、何やら、私の部屋に近しい感じ。玄関横の本箱には、日本語の本がギッシリつまっていた。

彼女の夫はカールさん。社会学を研究しているという。高い背丈の上の方から、こんばんわと声が聞こえた。英語のあいさつをしようと単語を思いうかべていたのに、上を見上げた私は、すぐこんばんわと言ってしまった。

一九七九年頃から二年半ほど神戸に居たそうだ。

台所のテーブルでごちそうになったフルーツサラダはおいしかった。夏の間は果物が豊富なのだそうだ。私たちは皆、顔を合わせるのは初めてだったので、それぞれ自己紹介を、と言いながら、塚口さんの話が間にはさまって延々と続いた。彼女も、高橋さん同様早口だ。日本に居た時は、そんなに喋る人ではなかったらしいが、長い間スウェーデン語ばかり喋っていると、日本語がたまってくるのだろうか。私たちめがけて、一気にはき出す口調は、一向に淀むことがない。話は、彼女がスウェーデンに住むようになったきっかけからはじまった。

指折り計算すると、彼女がこの国にはじめて来たのは一九六六年。高校卒業後、大阪外大の二部でフランス語をやりながら、商社のOL生活。大学を卒業してしばらくたち、二十五歳ころにもなると、まわりの雰囲気が変わっていったという。職場でも、親も親戚も結婚しろしろとうるさいし、仕事にも大して生きがいを見出せず、つまらない毎日。思いきって仕事をやめ、あとのことは知らんと三カ月の予定で世界旅行へ。

どうせ結婚したら旅行もできなくなるのだから、今のうちに行ってもいいでしょと親を説きふせて、めざすはパリ。あこがれのフランス文学をやってみたかったそうだ。シベリア鉄道でヨーロッパに入り、フィンランドに一週間、スウェーデンにも一週間の予定だったのだが……。

「私っておっちょこちょいやからね。ユースホステルで、隣のベッドにいたフィンランド人の女の子に、今から仕事を探しに行くから一緒に行こうと誘われてついていってベビーシッターで働くようになったの。そしたら、何となく居ついてしまって……。大阪の河内の、ゴミゴミした所で育ったでしょ。きれいな湖や公園の噴水の傍らでひなたぼっこするおじいさんやおばあさんを見ていたら、こんな夢のような世界にいたいとあこがれたわけよ。

それで、スウェーデン語を習いはじめたら、なんせ、教育費はタダだからね、約束の三カ月が来ても帰れない。あと一カ月、あと三カ月したら帰るからお金を送ってください、なんて、家にウソの手紙を出して、大学で社会人類学という学問に出会ってから、勉強がおもしろくなって、帰る気がぜんぜんしなくなったんよ」

帰る気がしなくなったのは、カールさんのせいもあるだろうに、これは聞きもらした。というより、質問を入れる間隙がなかった。

それから十七年たった。もう四十二歳になるという彼女だが若い。三十代半ばにしか見えない。おととし、やっと念願のフランスに行った。「フランスまで行くのに十五年もかかったねと友だちはひやかすのよ。」

そう語る彼女は、Tシャツにズボン、ノーブラだ。北欧の女の人にはノーブラが多い。かって、リブの時代、アメリカでは、女たちがブラジャーを焼き捨てたことがあったっけ。今ではそんなエピソードは、大昔の奴隷時代の逸話ででもあるかのように、町で見かける女の人たちは、ユッサユッサとのびやかに歩いていたものだ。

こうなったら、私たちの自己紹介はもういい。彼女の話を聞くことにしよう。彼女は、今も大学に通っているそうだ。(この国の大学入学者の平均年令は男三十歳、女三十三歳。)もう十何年も籍がある。教育費は全て無償で二十五歳以上で四年の労働経験があると大学入学資格が認められる。自分の生活費をまかなえることを示す何がしかの書類を提出して審査を受ければ入学許可証をもらうことができ、その日が大学の入学日。そして、卒業に必要な百四十四単位を取った日が卒業日。途中は、自分で好きなペースでやればよい。ゆっくり、何年かかってもいいから、大学院でマスター論文を書くのが人生の目標のひとつなのよと彼女は言う。

ゆっくりのはずだ。彼女は、フルタイム(九時——四時)で働いているのだから。税率は三十五%。言い忘れたが、男の子が二人。

その息子たちが手伝って作ったというパンをオーブンで暖め、日本茶をすすめてくれた。居間に場所を移して話を続ける。その時の会話を再現しよう。

「前は通訳してたけど、あんまり好きじゃ

なくて。おととし日本からこっちに戻ってから、職探しの努力をずいぶんして、今はストックホルム市の福祉局のポストに臨時雇いで入ったの。来年の春からは、正式雇用のメドが立ちそうよ。」

「つまり、四十歳をすぎてから、公務員になったわけ。毎年一斉の採用試験はないの。」

「そんなのはないのよ。公務員という職務上の身分を得るのではなく、あくまで、一つのポストに採用されただけ」

「どうやって職を探したの」

「何かポストがあくと、新聞の求人広告や職安に公募しなければならないようになっていてね、いろんな人がそれに応募して書類や面接で決まるの」

彼女は、公務員の人事機構の説明を延々としてくれた。人事考課や昇進の決定も、人脈や学閥やらでいつのまにか決まるのではなく、非常にフェアに、オープンに判定されるらしい。

「だから、とても厳しいのよ。仕事の時間中は、日本みたいにお茶でも飲んで雑談してなんてことできないわ。私が勤めていた頃の日本の会社では、部下に働かせてノンビリしている管理職っていうのが多かったけど」

「もっとも、このごろは、日本でも厳しいのよ」

「ただ、日本みたいに、長く勤めたら自然に給料があがるなんてことはないわけ。努力してより上のポストにつかなければ、昇給も昇進もないの」

「日本は年功序列だからね。そのかわり、よそにかわるのはむつかしい。適当にやってこの仕事にしがみついとこうという感じになるものね」

「ここではそんなことは許されないわけ。だから、努力しない人には厳しいのよ。福祉社会のことばかり宣伝されて、いかにもスウェーデン人は年金をもらってのんびりレジャーばかりしているように言われるけど、そんなことないのよ」

「その厳しさがあるから、福祉社会も維持されているわけでしょ」

「そういうこと。でもね、福祉関係の窓口にいると、いろんな問題も見えてくるわ」

「どんな？」

「ごく一部の人たちなんだけど、その福祉制度を逆手に取って、甘い汁を吸おうという人間がいるわけ」

「日本でいう、生活保護の不正取得みたいな」

「そういうものね。スウェーデンは、もともと、ワイロや汚職なんてこととは無縁の国だったのよ。税金の申告なんかでも、皆とても正直だし、でも、今は、全然ないとは言えない」

「やっぱり不況のせい」

「それもあるかもしれない」

「貧しい国ほど、ワイロや不正が起こるっていうからね」

「理由はよくはわからないけれど、ともかく、この国の福祉システムは、そんな不正やインチキをする人がたくさん出てきたら、成りたたなくなるのよ。私は、それが一番心配」

「不正やインチキといったって、日本の比ではないでしょう」

「それはもちろんよ。この国の大部分の人たちは、依然として、とてもまじめに生きてるわ。たとえ、どんなにスウェーデンに問題があったとしても、私はもう日本に帰る気はないわ。働けばちゃんと見返りがあって、こんなに安定した生活は、日本ではできないもの」

こんな話をしていると、彼女はすっかりスウェーデン人になっているな、と思う。彼女にしてみれば、スウェーデンでの生き方が、全く当り前になっていて、日本に帰って、日本の女の人たちの状況のひどさに心底驚いたというのだから。

このあと、話は離婚論になった。

温井さんと私は、この点ではいつも意見がくい違っていた。温井さんは、離婚が増えるという現象に、どちらかといえば心を痛めている。子どもたちの受ける傷は大きいし、悪い影響を与えるのではないかというのだ。私は、いちがいにそう決めつけることはできない。両親が揃っていても問題のある子はたくさんいる、とかねてから言っていた。議論は、私と塚口さんとで進めてしまったようだ。

「こっちの人はエゴイズムで生きてるからね」と塚口さん。

「エゴイズムって、個人主義と訳したらいいんでしょ」と私。

「そうだけど」

「その用語からして、誤解を招きそう。日本では、エゴイズムというと、周りのことを全然配慮せずに、自分勝手なことをするというニュアンスで言うもの。離婚は、子どもを無視した親のエゴだなんてね」

「それは、とんだ間違いね。スウェーデンの人は、まず自分を大切にする。でも、それは、他人を大切にしないこととは違うもの。むしろ、自分を大切にしなかったら、他人も大切にできないことだってあるわよ」

「ふーむ」

「私の母がそうだった。父とは仲の悪い夫婦でね。子どもの私が見ても、どうして別れないのかと不思議だったくらい。ある時、そんなに嫌いなのに、なぜ父と別れないのかと尋ねたの。そうしたら、私は、あんたたちがかわいそうだからがまんすると言うわけよ。結局、子どもを口実にして、離婚することができなかったんだと思う。自分の力で生きる自信がなかったのね。もう父は死んだけど。結局、母は、父が悪いとか、子どもがめんどうを見てくれないからとか、言い訳してしか生きれなくなってしまった。かわいそうな人だったの」

「よく聞く話だなあ」

「スウェーデンでもあるわよ。そういう話。家の支払いがあるから別れられないとか。私の友だちでも、離婚する時は、とても悩んでそんな簡単ではなかったよ」

「スウェーデン式結婚で、同棲してみて、慎重に相手を選んだとしても」

「長い年月、人間は変化するものね」

「離婚そのものが、そんなにいけないことなの」

「安易な離婚は、安易な結婚と同様に、あまりよくない。でも、どうしても必要な離婚もあると思う」

「いったい、どうして結婚という制度があるんでしょうね」

話は、いよいよ根源に迫ってきた。塚口さんは、ビールでも飲む、泊まっていってよと勧めてくれたのだが、ホテルの同室の人に何も言って来てないし、明日の予定もある。もっと話したい、と思いながら彼女の家を出たのは、十二時半をまわっていた。

帰る時、彼女から宿題をもらった。「私がどうやったら、日本の人たちに役立つか、その方法を考えておいてね。それと、今度来る時は、もっと時間を取って来るのよ」と。

帰りのタクシーで、私たちはほとんど何も話さなかった。静かなる興奮とは、こんなことを言うのだろうか。

向江康之さん ――のびやかにリラックス

三人目は男性である。ストックホルムに二泊の後、私たちはスウェーデン第二の都市、ヨッテボリに三泊した。そのヨッテボリでの通訳が向江さんである。

通訳が男性だと聞いていたので、私は少し不安だった。話の通じない、エリートの、ツンとすました人だったらどうしよう。こういう旅では訪問する側と受ける側の仲だちをする通訳の人に理解がなかったら、うまく通じあえないものなのだ。

夜の九時すぎ、ヨッテボリ駅に着いた私たちの荷物をトランクルームに積み終えて、ゆっくりバスに乗りこんで来た人が向江さんだった。バスは二階建で、一階はテーブルに向かい合わせに座席がついている。彼はちょうど私の前に座った。

がっしりした体にチェックのシャツを着、にこやかな話しぶりだ。なによりヒゲが目につく。私が学生時代働いていた信州のロッジで、馬の手入れをしていた雄三さんを思い出した。本職はと聞いてみると、農業で、モヤ

シ栽培もしているという。「年に2、3回、こんなことをするんです」

私は、私の第一印象を信頼することにした。

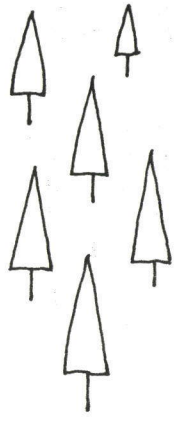
ヨッテボリの町は人口五十万。北欧有数の港町であり、ボルボの自動車工場や、SKFのボールベアリング工場など、スウェーデンを代表する企業の町でもある。かつては造船業がさかんだったが、このごろはほとんど作られないという。この町に住む日本人は、約百二十人。女の人が圧倒的に多く、その大半はスウェーデン人の船員と結婚して、この町に住みついたのだそうだ。

という話は、翌朝のバスの中で、向江さんから聞いた説明である。ずいぶん詳しいと思ったら、彼はヨッテボリの名誉総領事もしている。ヨッテボリに住む日本人から相談を持ちかけられることもしばしばあるそうだ。

特に難しいのは、スウェーデン人の船員と結婚して、ヨッテボリに暮らしてきた日本人の女の人たちのこと。彼女らは、今、ほとんどが四十歳を越えて、中には、夫との関係がうまくいかなかったり、望郷の念がつのって、スウェーデン社会にとけこめなかったりしてノイローゼになってしまう人もいるという。日本に居る時も水商売などをしていた人が多くて、経済的自立もままならないらしい。スウェーデン国籍を取っている場合には、日本へ戻るにも難しい事情がある。この社会で生きるのは厳しいのよ、と言った塚口さんの言葉が思い出された。

ヨッテボリでは、学校、老齢者のためのサービスハウス、障害者のための病院、デイセンター、カルチュアハウス（地域の文化会館）個人の家庭などを訪問した。

向江さんの言葉は、うって変わってとてもゆっくりとしていて、ひとつづきのセリフが聞こえてくるように耳に入ってくる。というのは、旅にも慣れて、必死でメモをとりまくらなくなったせいもある。時々アハハハと笑い声が入ったり、「です」と語尾を強調するのが特徴だ。出身地の鹿児島のアクセントが時折混じる。三十代後半くらいかと思っていたが、スウェーデンでの生活は十四年間、四十三歳だそうだ。



訪問先では、どこでも、ようこそいらっしゃいましたと、コーヒーとお菓子、またはパンのサービスがある。これは、とてもうれしい習慣だ。とりわけ、子どもたちと一緒に給食を食べ、授業中の教室を見学させてもらった学校訪問は心に残った。技術、木工、タイプ。スウェーデン語、家庭科（もちろん全て男女共学！）などの教室に入り、自由に机に坐り、生徒に話しかけたり、先生に質問してよろしいという学校の雰囲気は、日本では考えられない。ヨッテボリでは、かつてはあまり評価のよくない地域で、いろいろ問題のあった学校らしいが、職員が一致協力して、ここまでよくしてきました、と校長先生は胸をはって言われる。生徒たちも、のびのびしたようすで、さっき、これもらったよ、と私たちのグループの誰かにもらったお年玉を見せに来たりする。

男女による進路選択の差をできるだけ作らないように、職業実習の時には男子は女子向けの、女子は男子向けの職業の実習を意識的にさせるよう工夫をしているという。移民や障害児には、職員を増やして母国語教育をしたり、アシスタントをつけている。生徒の半分以上が外国人（といっても、フィンランド人とスウェーデン人の区別など私にはわからなかった）で、二十三カ国語の母国語教育をしているというから驚きだ。かつては日本人の生徒もいたが、今はいないということだった。

移民の子どもも障害を持つ子どもも、ふつうの子どもたちと共に学び合う統合教育が本校の目的であり、しかも統合された色あいが生きた色になることをめざしますと先生は説明する。子どもを真ん中に据えた教育理念だ。

私は、廊下で会った男の先生らしい人に、

トイレはどこかと尋ねたら、しかるべき扉を示した後、「あなたは何の教科を教えているのか」と聞かれた。スウェーデンに来てまで、教師に間違えられるとは思ってもみなかった。統合教育は、大した成果を果たしているものだ。

スウェーデンでは、一九六八年以後、教育の自由主義的な改革が行われ、教科教育に重点のあったそれまでの教育から、子どもたちが自立し、さまざまな人々と手をつなぎあって生きていけるような教育が目ざされるようになった。日本の教育は能率と競争のため、スウェーデンの教育は自立と連帯のためと、一番ケ瀬康子さんの本にあった言葉がよみがえってくる。

生徒数六百人、職員数百七十五人、というこの学校で見たものは、その自立と連帯を育むさまざまな手だてだった。一クラス三十人と聞いていたが、実際に私たちが見た選択授業では、どのクラスも生徒は十人前後だった。

技術のクラスには女の子もいた。壁には、ヤスリ、ペンチ、糸ノコ、カナヅチなどの道具がたくさんぶら下げてある。後ろには、電気の機械類、旋盤、工具類がいっぱいあり、ともかくにぎやかな教室だ。生徒には、物を大切にすることを教えてあるから、備品類はなくならないという。この先生は、この学校の教育のやり方に疑問を感じていると言っていた。できない子ばかりに気を配るのはいいが、できる子をのばす教育をしない。これは問題だ。できない子も、あまりに手をかけてもらえるので、甘えてしまって努力しない子がいると。

一クラスに四十七人も詰めこんで、できる子しか伸ばさない日本の学校を見せたら、この先生は何というだろう。壁にかけられたカナヅチが、即座に校内暴力の凶器になるのを見たら、腰をぬかすかもしれない。

「あんな風に言ってるけど、日本の子どもとスウェーデンの子どもとどっちが幸せか。町を歩いている子どもの顔を見てごらん。のびのびとリラックスしてて、絶対スウェーデンの子の方が幸せだよ」と向江さん。

そんなことぐらい、私もひと目でわかる。これでも教育関係者の端くれだ。しかし、なるほど、向江さん自身も、のびのびとリラックスして、実に幸せそのものに見える。向江さんと同年代の日本の男性で、こんなのびやかな雰囲気の人はちょっといないだろう。山小屋で馬の番でもしない限り。

その夜、私と竹田さんは、向江さんにディスコへ案内してもらった。めざす店は、町の中心部にあった。向江さんの仕事用トラックで送ってもらった。車の床には野菜くずが落ちていた。竹田さんは、団の最年少、ディスコへ行きたいという彼女の願いがやっと叶ったのだ。

「もとの会社にずっと勤めていたら、どうなってたのかなあ、向江さん」と竹田さんが聞く。向江さんは、もと三菱商事に勤めていたのだ。

「そうしたら、あんな大きな家に住めてないよ。スポーツもできないし」

向江さんの家は、町のはずれ、農場もある大きな家だそうだ。税率が何％かは聞き忘れた。

「どうして、仕事をやめてスウェーデンに住んだの」

「僕の奥さんがスウェーデン人だったから」

夜の十一時近くになると、急に人が増えてきて、店はにぎやかだ。私たちは、ワインを飲みながら、大声で話しあった。

「奥さんと日本に住むことだってできたのに」

「どうして仕事をやめたの」

おそらく向江さんにとっては、何十回となく繰り返されてきた質問を、私たちもしていた。どんな答えが返ってきたか、私はよく覚えていない。まわりがやかましかったせいだろうか。

「一流」の会社に勤めていて、将来の「見込み」もあるのに、なぜそれを投げうって、異国に住むのか、という先入観で、私たちは質問していたのではないかしら。エリート商社マンで生きるのもひとつの価値ではある。しかし、それとは違うものに価値を見出したなら、生き方を変えることは、それほど大それたものでなかったのかもしれない。

あれこれ私が推測してもはじまらない。ともかく、向江さんは、リラックスして、日本

で生きるよりはずっといい生き方で、スウェーデンに暮らしている。

しかし高橋さんや塚口さんがスウェーデン人になりきっているのに比べると彼は、精神的には、日本人であり続けているようだ。仕事柄、日本の情報にくわしい。短波放送で日本のニュースを聞き、八月に来た台風のことが話題になる。週刊誌や新聞も取っているという。四歳の一人息子の名まえもたろうくんというそうだから。もっとも時に、スウェーデン風の味つけが加わるけれども。

「日本にはお見合いがあるでしょう。あれは便利だね。スウェーデンでは、まわりはそこまで面倒見てくれない。パートナーを自分で探さなければならないから大変なんだよ」

「よけいなおせっかいがなくて、いいんじゃないですか」と私。

「なくていい人もいるけど、ないと困る人もいる。男も女も、できるだけたくさんの人とつきあって、生活を共にして、経験をつまないといい相手を選べないからね」

「ストックホルム式結婚というやつですね」

「そう、あれはとてもいい方法だよ。慎重に相手を選んで、この人と決めた人とは一生連れ添う。離婚は絶対にしない方がいい」

「絶対に」

「そう、離婚すると、不幸になるのはやっぱり女の人の方だから」

「日本では離婚して解放される女の人もいるわ」

「でも、家庭は、女の人の力ですばらしくも、ダメにもなるんだよ。女の人が家庭のことや子どものことをみごとにこなしていくのは、男にはマネができない。実に素敵なんだなあ」と彼は目を細める。かと思うと、この辺はいかにも日本人男性の発言だ。

「だから、いろんな人と知りあって、いろんな経験をすることだと思う。その値うちが出てくるのは、男も女も三十歳になった時だよ。三十になって、その人間がすばらしいかどうかがはじめてわかる」と三十は売れ残りなどという「日本的常識」とは少し違う意見だ。

その点、日本の男性は、ロリコンとか、セーラ服がいいとか実に幼ないみたい。男も女も、あまり深く考えず、目ざめないうちに結婚してしまう。そのうち、男性は仕事に追われるまま、女性だけが、自己に目ざめ、離婚にふみ切ることで、自立を果たす場合もある。向江さんのすすめるストックホルム式結婚は、相手をよく知るための、きわめて慎重で互いに自立した大人のやり方なんだろう。

「日本では、スウェーデンのことをフリーセックスの国だって言うでしょう。とんでもない話だよ。お金さえ出せばすむんだから、日本の方がずっとフリーセックスの国だと思うよ」と彼の話は続く。

「男女の関係は、全て一対一の人間同士の関係で成り立っているってことでしょう」と私。

「そう、だからこの町には女の人が男の人の横に座って、お酒をついでサービスするようなバーやキャバレーはないんだよ。お金ですむような簡単なことじゃなくって、もっとむつかしい。いやそれより、もっと本当の意味で楽しい、すばらしいことなんだ」

と向江さんは、スペインやイタリアや、ラテン系の女性とつきあうとどんなに楽しいか話しはじめた。あれ、おかしいなあ、奥さんはスウェーデン人じゃなかったのかしら。

日本の女の人について尋ねると、日本の女性も、ともかくスウェーデン式結婚をすべきだと言う。そういえば、私の友人にはそれに近いのが2、3人いるなあと思った。私たちのまわりで踊ったり、お酒を飲んでいる男女も、いたって健康的な雰囲気だ。

日本に帰ってから、何人もの人に、フリーセックスの国スウェーデンはいかがでしたかと尋ねられた。「日本の方がフリーセックスの国です」と答えると皆一様にけげんな表情

になった。週刊誌には、「一流」と覚しき某作家がフリーセックスの国スウェーデンでは、一番いいくらしをしているのは、男と遊んで勝手に子どもを作り、税金の割引を受ける未婚の母だなどとまことしやかに述べている。我々の団の唯一の男性今田さんは、ある会合で「フリーセックスの国スウェーデンの〝武勇談〟を聞かせていただきます」と紹介されて返す言葉もなかったという。

なぜ、こんなおかしな情報が流布されるのだろう。性を人間の自由なコミュニケーション手段と考えることのできない人たちが、その価値をお金にしか換算することができず、我と我が身を縛っているとしか思えない。そういう人たちには、スウェーデンという国は理解のしにくい国に違いない。

私たちは、ディスコ音楽と、キラキラするライトの下で大いに踊った。背の高いスウェーデンの人たちの腕が、頭や肩にあたることを除けば、最高に楽しいダンスだった。

翌日、短い自由時間に、私は、向江さんの仕事場を見せてもらった。町へ出るのに、車で送ってもらう途中に立ち寄ったのだ。

領事館のオフィスには、日経新聞が積んであり、本棚の半分は、お茶の本が占領していた。ちょっと意外な気がしたけれど、向江さんは「好きなんでね」と言ったきり、電話をしたり、コピーを取ったり忙しそうにしていた。

短時間で用を済ますと、今度の仕事場はもやし工場だった。農業といっても、もやしは農場で作るのではなく、港のそばの倉庫のような建物の一角で作られるとは知らなかった。建物の中は、コンクリート打ちのがらんとした所だ。向江さんはさっさと作業着に着かえ長靴にはきかえて、大きな扉をあけ、もやし栽培室に入る。私も見学者だからついていった。

倉庫の一室という感じの部屋には、ヨコ一メートル、タテ二メートルくらいの大きな箱がいくつもあり、水につけたモヤシの種子が芽の出ていないのから、出ているものまで、発芽日数によって並べてあった。向江さんはもやしの水を抜いたり、種子をまぜたり、忙しそうだ。

「一週間前から仕事をはじめたんだ。夏の間は休んでたけど、これから冬にかけては野菜がなくなるから、もやしは貴重な野菜なんでね。こうやって毎日面倒を見るので、毎朝五時起きなんだよ」

私が尋ねる前から、彼は一人でそう説明しながら、箱の中のもやしをかきまぜている。発芽しはじめた種子の若い香りが漂ってきた。

「こうやって、体を動かす仕事はいいね。昔の会社の連中がたまに訪ねてくると、お前の生活がうらやましいと言うけどね」

私は、ポカンと見ているばかりだった。足元を排水が洗っていくのも忘れていた。これがさっきまで、流暢に通訳をしていた同じ人なのだろうか。

「この仕事をはじめるのには随分研究してね。冬がシーズンだから、その時にはここの空箱も全部フル回転させて、袋づめや発送には人を雇うんだ。今は一人でやってるけど。こっちのは何か知ってる」

彼が指さした箱にはアルファルファが入っていた。こちらは冷蔵室で、あっちは包装作業をする所と、向江さんの説明はまだ続いていた。

今思えば、私の旅は「お祭り」のようなものだったのかもしれない。日常の仕事や、人との関わりや、責任から解放されて、飛行機や列車の窓から外の景色をながめたり、その土地のおいしいものを食べたり、立派なバスに乗って町をめぐり、見学し、話をきく。全く楽しいお祭りだった。

旅は、この時期にしてはめったにないというほどよい天気に恵まれていた。サービスハウスの自室に招き入れてくれたおばあさんの部屋の窓からは、緑の草地のかなたに森がながめられ、さわやかな風と光が届けられていた。ニュータウンの芝生の上でねころがって体操していたら、太陽を背にあびて歩いてきた少年たちが手を振ってくれた。デイセンターで織り物をするおばあさんにも、車椅子のおじいさんにも、夏の光は等しくふりそそぎ、鉢植えの緑は、日光にすかすとますます鮮かだった。

私が見たのは、そんなさわやかで明るい夏

のスウェーデンだった。しかし、そのさわやかな明るい印象は、単に季節や天候のせいではなく、そのための地道で、厳しい努力があってはじめてかちとられたものだという気がしてならない。あたかも長い冬の間、勤勉に働いた人たちが、夏になってようやくゆっくりと休暇を取り、日光浴をするかのように。

向江さんののびのびとリラックスした態度も、いわゆる呑気でふんわりとしたそれではない。凍てつく朝の五時に起きてもやしをかきまぜたり、袋づめして発送したりする労働と緊張があって、その労働に見合うだけの生活が保障されているが故のゆとりなのだ。

ここに登場した三人の人たちに共通して感じたのは、皆、それぞれに「魂の緊張」を持って生きているということだった。何かによりかかったり、もたれあったり、おもねたりすることなく、自分自身そのままの大きさで生きている小気味良さに、私は惹かれた。

この国は厳しい社会だ。自立して地道に働く人たちの国だ。働けばちゃんと見返りがある。しかし、何かに頼らねば生きられなかったり、甘えたり怠けたりする者には厳しい。最近では、夫に養ってもらおうと考える女性は、なかなか結婚相手を見つけにくい、とは、スウェーデン人の留学生、ウラさんから聞いた話だ。はじめは笑い話のように感じたが、この社会を見ているとそのことが真実味をおびてくる。それに関連して気になるのは、スウェーデン人と結婚してこの地に住む日本人女性のことだ。夫について、異郷に住むようになった彼女らの生き方は、高橋さんや塚口さんとは違うのだろう。私は彼女らについてもっと知りたいと思った。

この国では、人間はひとりだというところから出発する。ひとりひとり自立しているのだから。孤独な人間同士、連帯が必要だということを皆よく知っている。

自立と連帯の国、落ちついていて、それでいて力強い国。私たちは、こんな国に住んでみたい、せめてもう少し長くいたいと語りあった。

「でも、やっぱり、我々日本人にはシンドイね。なんとなくわかりあえて、お茶漬サラサラ食べて、たとえどんなことが起きても、八百万の神よ祓いたまえでみそぎをしたらきれいさっぱり水に流せる。そんな生き方は捨てられないわ」とはMさんの弁。

確かに、五億円もらって懲役刑になってもみそぎをして出直そうという大物もいる。ゆるんだ魂も、甘えた魂も丸抱えで、日本という国は生きやすいのかもしれない。まわりのやり方や、時代の大勢や、世間の価値観に従って生きている限りは、何事も、お金と物でかたづけてしまえる限りは。

しかし、自立して、自分の色に合わせた生き方をしようとする人間には、まだまだ日本は住みずらい。みんなで渡れば恐くないと、赤信号を渡り続けていて、気がついたら戦争だったという恐しい経験が日本にはある。

そんな大きな間違いを犯さないためにも、ひとりから出発して、ひとりひとりが地道な積み重ねをすること。ひとりひとりが連帯を築くことをもっと考えてゆかねばならない。それが今回の旅で私の感じた福祉の原点といえるものかもしれない。

スウェーデンは、日本と違って人間が少ないからできるのだという議論もある。けれどそういう人は、人口の多い国の方が人間の値うちが低いなんて、自分も含めて言いきれるのだろうか。

暗く長い冬に倦むことなく仕事や暮らしを営んでいく着実さは、一人一人の幸せを実現するための努力のプロセスが福祉社会を築くという考えに通じるようだ。次の機会があれば、是非冬に訪ねてみたいと思う。

九月二日、スウェーデンをたつ日。天気は一転して朝から曇り空だった。早朝の空港へ向かう道で見える風景は、どこまでも低く続く森と、時折点在する家、大きな岩、農場。鈍色の空の下に展開するそれは、単調な繰り返しだった。

その日は午後から雨になった。長い冬のはじまりを告げる雨だった。

「福祉ー問われる原点」、一番ケ瀬康子著
創元新書、七八〇円、正路さんが創元社で企画し、松野さんがスウェーデン滞在中の著者を訪ね、米家さんが本をもとに旅行を企てた。人間の自立と連帯を問うよい本。

女同士の結婚

‖東独の短編小説から‖

森 良子

イーネスとマーチンは友達になった。それは、いままでひとりっ子だった二人にとって、とても幸せなことだ。

家のなかの調和は最高だ。私はありのままの自分自身で居れるのがうれしい。ローザはやすらぎを与えてくれる。彼女は私からたくさんの仕事をひき受けてくれた。しかも、自分から進んで。

私はと言えば、家族の平和を豊かな経験でつつみ込む。

いまや、私は朗らかになり、化学方程式が鉛筆からほとばしり出て、意欲まんまん。煙草も吸わなくなったし、マーチンにガミガミ言うことも少なくなった。

子どもたちは居間で遊んでいる。ローザは台所で調理をしている。素敵な焼玉忽の臭いがする。私は鞄を下に置き子どもたちと一緒に食卓の用意をし、ローザが味見をしている間、針箱のなかのズタズタの子どものズボンのつぎ当てに夢中になる。食事までに、私は手早く千鳥掛けで二つの膝当ての補修をする。

ローザには私のことがわかる。部屋に入ってくると、一日がどんなであったか、計画が成功したかどうか、すぐに察してくれる。

当時、私は気難かしい人間だった。彼女は大きな目で静かに笑いながら私を見つめ、うなづいてくれた。

彼女のそのようなやさしさはどこからきたのか。販売所の指導員としての彼女の仕事は正直いってなまやさしいものではない。お店にくるたくさんのお客がより深い静けさと陽気さを彼女に与えたのだろうか。

ローザがイーネスと一緒に私たちのところに来たとき、二〜三の困難があった。この母と子はたくさんのがらくた――ほこりだらけのチョコレートキャンデーの花束や瓶の舟、二つのオランダ時計、いろとりどりのローマのガラス板、イルカやベッドとレンジのついた人形などを持ってきた。それらは、私の静かな均整のとれた住居にはふさわしくなかった。

しかし二〜三週間もたつと、これらのがらくたは私たちの生活の一部分になった。それまで廊下の壁に架けていた抽象画の鳥の絵のかわりに、舟のついたガラスをかけたものだ。

私たちの関係は法的に認められたものではない。しかし、私たちの関係は必然的なもの良いものだったので、どんな小さな強制も不要なのだ。

一緒になってからは、二人そろってよく外出した。子どもたちは仲良く二人でお留守番だ。

でも、パーティに招かれたとき、人々がどんなに私たちをジロジロ見ることか。

バーがつくられ、それぞれのペアがすでにそこに腰掛けている。

私はいまやっと気がついたのだが、ローザは何と魅力的なんだろう。私より小さく、ふとっていて大きなお尻をしている。めずらしい濃い色――バイオレットやトルコ玉やオレンジ色の服が好きだ。

私はといえば、一日中ずっと着ていたジーンズや白い仕事着を急いで脱ぎ捨て、大き目の長い服を着る。それは細い腰や豊かな胸をきわだたせる。私たちが部屋に入ると、一瞬好奇の眼がとびかう。まさに女盛りの二人が若いがゆえに輝くのではなく、聡明であり、価値ある職業につき、力の限り社会に貢献しているという誇りと自覚で輝いている。

ついでにいうと、T（前夫）は私が思い切った服を着てパーティに行き楽しさいっぱいで、キョロキョロとまわりを見るのを嫌った。彼は、女っぽくふるまうのをいやがった。Tは、男の眼が私を裸にしていると言っておこったものだ。

いま、ローザと私はお互い寄り添って立っていた。私たちは風のような存在であった。

これは一九七六年に女性によって書かれた

小説の一節である。政府刊行物や外国向宣伝物と違い、小説にはあからさまに当地の女性の生きざまやなまの思いが綴られている。

この小説の題は「再婚」となっており、当然男と女のことだと思っていた私は、この本を読み進むにつれ様子が変ってくるのに驚きさっそく東ドイツ人の留学生に〝これは現実の反映？〟と聞いたところ〝ふんそうだよ〟とともなげに答えた。

別の小説「私の独身の女友達」でも女性が自由に淡々と男友達と交際する姿が描かれている。

男と関係を持つときは別れの取り決めをやり、別れるときは短かく自分の感想を述べる。他の男とのことなど弁解する必要もない。

二つの小説に共通するものは、女たちは職業を生きがいとしそれによって自分を表現しようとする。女だからという甘えもなく仕事に対する賞讃や叫責はすすんで受ける。男と全く対等に歩んでいるということだろう。

この背景には女の自立だけでなく、母子家庭に対する手厚い援助やピルの無償配付など母と子に向けたさまざまの社会保障がある。母性機能のために女性が不利にならないよう国が面倒をみている。

男と同じグランドに立つことが出来る女たちは、恋愛も結婚もそのフォームを自分の思うように自由に選択している。

ふと、動物の世界の雌社会や原始共同体の母系制家族を思い出す。

私が描いていた社会主義の家族のイメージとは随分離れたところにきている。

一〇〇年前にエンゲルスが予言したほんとうの意味での一夫一婦制、何の強制もいらない愛情に裏打ちされた単婚家族は夢だったのだろうか。

ある人は、西欧の自由奔放さと東欧の女性の経済的自立があいまっていまの東ドイツの状況をつくっていると言う。

もはや、社会主義のモラルとか規範などは無用の長物らしい。

何か割り切れないものを感じながらも、ちょっとわくわくする好奇心がちらつく昨今である。

性差とは何だろう

婦人民主新聞に「結婚」を連載している佐藤文明氏によるとこうだ。

「アメリカのゲイ公然化路線はすごい。一九七二年にテキサス州ヒューストンで男同士の結婚が法的にも認められ、七二年にはカリフォルニアで男同士のカップルが養子をとり、八二年にはオークランドに独身女性のための精子銀行が開設されたし、子供向けの月経解説書『ピリオド』を書いたレスビアンのカップルも人工受精で子供をもうけた」と。

ジャパン・ゲイ・センターの新聞『チェンジ』も「ゲイは結婚しない男たち。親をだましても、女をだましても、レズと偽装結婚しても、一番辛いのは僕たちゲイなのです」と。

ときこさんの岩田帯

久世裕子

ときこさんの名前は、トーキ・シュレイダー。

戦争花嫁である。

正確な年齢は不明。

二十数年前横須賀の米軍基地で働いていた彼女は、兵役で来ていたデニス・シュレイダーと出逢い数年後デニスの故郷であるアメリカ中西部の保守的でのどかな州ウィスコンシンに移ってきた。

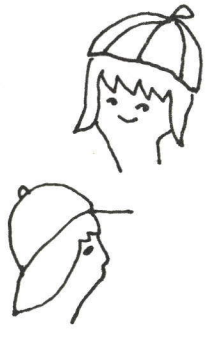
毎夏子供を連れて彼女を訪ねると当然のごとくに私達を待っていてくれ、シカゴの近くまで行って買って来たと言ってあれこれ日本料理を作って出してくれる。

ロス・アンジェルスでもシカゴでも日本料理店は花盛りだがシカゴから車で三時間のこんな田舎町では中華料理も日本料理もまるで区別のつかない人ばかりでまして日本の食料品を扱う店等皆無である。

散らし寿司やきゅうりのおつけものや天婦羅を並べて「食べて、食べて」と、まるで隣

のおばさんといった雰囲気の彼女は大らかでやさしくよく働く。
子供のころ経済的に恵まれなかったとき子さん、父親は九州やあちこちの炭抗で働いていたと言う。
姉二人もアメリカ人と結婚したそうである。「貧乏だから外人と結婚したのよ。でも母さんは、洋裁も和裁もならったしお前は日本人とだって結婚できるとよく言っていたのよ」彼女の言葉の端に当時の彼女の家庭生活がうかがわれ厳しい思いがしてなまじの反論はできぬ思いがした。
とき子さんはデニスと結婚する事になって領事館へ渡米の手続きにいった時の事を語ってくれた。
母親の名前の「まつ」という字を横文字で書類に書き入れられなかった彼女に日本人の係官は「明日にもアメリカへ渡ろうという人が親の名前一つ書けなくてどういうつもりなのか」とひややかに笑ったそうである。
恥かしさに涙ぐんでいた彼女にかわってその時デニスが「あなたは同国人になんてひどいことを言うのか、あやまれ、アメリカ領事館は我々アメリカ国民の税金でまかなっているのだ。領事と話が直接したい」と言ったそうである。
彼女は未だ見ぬ国への不安さも、日本を離れる心細さも全部ふっとんだと言う。デニスがいるから、助けてくれるから、どこへでも行けると思ったそうである。

私はこの話を思い出すたびに他人事ながらうれしくなってくる。
とき子さんは女の子三人男の子二人の子供に恵まれた。
「どの子もお腹にいる時は日本のさらしの岩田帯をまいたのよ、あれが一番いいわ。こちらの人は全然しないのよ、気持悪くないのかしら。そして生まれたら今度はあのさらし帯でおんぶして台所をしたわ。デニスの妹達がみんなインディアンみたいだからやめなさいって言ったけどあんな便利なものないのよ。生み終った時は切って床ふきにしたし。」
私の頭の中に赤いショートパンツにさらしのおぶいひもの小柄なとき子さんがアメリカ人をからかいながらせっせと働く姿が浮かんで思わず笑ってしまった。
酪農とビール工場で有名な、ウィスコンシン州のドイツ系移民の多いこの田舎町の人々の素朴で人なつっこい性格は　何の偏見もなく彼女を受け入れていた。



今では彼女はもう「とき子さん」ではなく「トーキ・シュレイダー」である。
彼女が日本人である事等思い出す人が少ないくらいである。
「初めてここへ来た時は雪が降っていたの。私はカスリの着物に下駄をはいて、デニスのお母さんが最初に連れていってくれたのは、教会だったわ。この辺はみんなカトリックよ、あの頃は教会の神父さんの言う事は絶対だったのよ、なんであんなに神父がいばっていたのかわからなかったわ。今の若い子達は教会なんてもう誰も行かないわ。
私はデニスと一緒になる時洗礼を受けたのよ、デニスがそうして欲しいと言ったから。
教会のミサで神父の言っている事なんかちっとも解らなかったわ。いつも夕飯のおかずを考えていたの。笑うわね。」
私の夫はカトリックだが、宗教を持たぬ私はがんこに自分自身を通しているつもりだが彼女の気持はよく解る。それはそれでやさしく自然な感情とこの頃は年のせいか思えてきた。
とき子さんは時々「日本が懐しいわ」「帰りたいわ」と大きな声で言って、レコードで昔の曲をかけたり、古い週刊誌のスターのうわさ話を持ちだしてきたり。
「まったく、こちらの人ときたら、子供が大人になるのも速いし、男・女の現役を止めるのは又、おそいし、食べ物のせいかしら」たまりにたまったアメリカ人への異和感をぶ

ちまけてみたり。
「でも、私はもうアメリカ人よ、ここしか居る所はないわ。子供達もいるし。今さら帰ったって浦島太郎よ。」
「こちらの生活の方がそろそろ長くなるんだから」
毎年彼女なりの哲学や望郷の念を聞かされている。
戦争をきっかけにアメリカへ渡った日本女性達の不幸を描いたTVドラマも多々あったがここには幸せな戦争花嫁がいる。
五人の子供とやさしいデニスと二匹の犬に囲まれて、持って生まれた豊かでやさしい性格がここではいきている。日本の現在に移したら変型してしまったであろう素朴な人柄がここで光っている。
いつもそう思いながらお別れをしてくる。
「またね。元気でね」
夏の青空の下、とうもろこし畑の向こうでとき子さんが小さくなる迄手を振っている。
「さようなら」
広大なこの国に彼女のような日本人がいる。ここではもう日本人でもアメリカ人でもない幸せなよき女である。

＊劇の申込みは(202)五九二五大阪労演
リリアン・ヘルマンの名作「**わたしは生きたいーラインの監視**」1月18日～20日、ファシズムの嵐の中で人間らしく生きるとは？

スペイン・旅と大風呂敷
―54才の近況報告

若松千代子

バロセロナには青い花があった。
枯葉が風に吹き散らされている東京を発ちスペインのバロセロナに着いたのは十一月二三日。出かけることをあれほど迷った初めての土地の一人旅、その最初の夜は、空港インフォーメーションで紹介されたホテルの天井の高さや、がらんと広い浴室に、落ちつかない気分のままいつの間にかぐっすりと眠ってしまった。
街の中心なので朝から車の騒音がかなりのもの、早々とこのホテルを出てコーヒーをするカフェのテラスから遠くの建物の上部に日本のメーカーの名前がくっきり見える。ランブラス大通りは小屋掛けの本屋や小鳥屋、花屋が適当な間隔を置いて並んでいるが、色とりどりの花がどっさりと無雑作に容器に溢れている。その中でひときわ目立つ青い花。
七、八年前に訪れたボルドーの、風にはためくテント、カフェテラスのあの青とも異なる暖かさがある。パリや日本でもとり立てて気がつくといった事はなかったが、花屋に行けばありふれた顔で青い花は棚に並んでいるかもわからない。けれども石畳みの上を行き交うスペインの人々の表情のせいだろうか、親しみやすく人間くささの漂うラングラス通りにしっくりと似合っていた。
翌日、人の好さそうな中年の店主にたずねてみたらあの青い花はやっぱり人工的にあとから着色されたものであった。でもがっかりはしない、同じ星の上でのこと、異った夢の世界でありようがない。チルチルの青い小鳥ならぬ青い花、そのおかげで、遥々と訪れた旅人はひとときこの世のそとに出た。
せっかく朝早く出かけて来たのに目当てのマドリッド行きの汽車は此の駅からは出ない。重い荷物を引きずって二つ先の駅にかけつけても間に合わないし、と、思案の一寸の間に先客が。鞄を抱えた青年の後ろで順番を待つ間の長いこと――彼一人にもう廿分もかかっている。窓口の内側では眼鏡の顔をかがませ何やら部厚い書類をめくりながら慎重に書きこむ駅員は、まるで老学者のようだ。東京の街のせわしいテンポに馴れた者には拍子抜けのする風景である。
人や時間にしばられることのない気楽な一人旅、のどかではあるけれどいつもながらしんどいことよ。団体旅行などなら、目の前にある汽車やバスに乗りこみさえすれば、ぼんやりしていても目的地に連れて行ってくれる。けれどへとへとに疲れても又出かける折には

やっぱり自分でプランを練って、どんな明日が展開するのかとわくわくして出かけて行く。出来るだけ効率よく交通機関を利用しお金より言葉を使って未知の土地をめざす楽しさ。旅は出かける何ケ月前、いや時には何年も前から、行先の地図をひろげた瞬間から始まっている。

お金より役に立つのは行先の言葉である。スペイン語の勉強は四年前に先づ商工会議所主催の三ケ月講座に通うことから始まった。夜六時半から始まる講座には勤め帰りのサラリーマンやＯＬがほとんど。私のような年配者は、男女合せてもほんの二、三人というところである。仏語は学生時代の第二外国語以来途切れ途切れに続けているけれど、スペイン語を習うのは始めてで、周りのよく出来そうな顔つきに圧倒されてちぢこまってしまう。帰りのバスを、人影もまばらなビルの谷間で待ちながら、何て私は物好きなのだろう、いい年をして、いつ行けるかわからない国の言葉を今ごろ――、と何度も思ったがどうにか皆勤した。

以後は区の施設での同好会に週に一度参加し、毎日が勉強である。本棚、カーテンと目の届くあらゆる所に単語や動詞の変化を大きく書いた紙片を張りめぐらせ、十年来続けている朝の散歩の30分間は、少しまとまった語句を暗誦するのに丁度よい―夏は汗をたらしながら陸橋をかけ上り、冬には冷気にかじかむ手を袖口に押しこみながら。学生時代の私を知っている人には信じられないだろう。

学生時代と言えば、卒業間近にアンケート用紙を手にした。専門の語学以外に何語が出来るか――授業が終っての廊下のあたり気楽な気配で。「仏語、スペイン語、中国語」と記したら、のぞきこんだ友人たちがどっと笑った。あいさつの言葉位しか知らなかったのに。こんなのを大風呂敷をひろげる――というのだろう。

さて、マドリッドの駅ではあちこちで出迎えの人々との抱擁が見受けられる。出迎えの人もなく今宵の宿もこれから探そうという私は急な傾斜の大エスカレーターに荷物を引きずりつつ、心細さを押しかくす。プエルタ、デルソルは小雨模様の午後八時過ぎ、若者や恋人たち、それに二、三人の子供の手を引いた親子連れが目につき、新宿や六本木と違う風景である。宵のうちに落ち着きたいと心せいて中心からややそれたホテルの階段を上る。寝る段になってベットをめくると、シーツやカバーの薄汚れが目に入った。ヨーロッパのたいていのホテルは建物がどんなに古いものでも寝具は清潔なのが普通なのに。仕方がない。ひと晩の辛棒と、旅仕度にいつも入れて置く木綿の大風呂敷を引き出してシーツの上に拡げた。

いつの頃からか大きなこの風呂敷は、ものを包むという本来の役目以外に旅の間に実に様々の役目を果してくれる。出発を前に心せわしい着換えはこの上で、脱いだものは手早く包みこむ。時々消える栓抜きもボストンバッグをこの上にぶちまければＯＫ。フランスの田舎でのこと、電燈をつけ入浴しようとする浴室の中はすだれごしに外部から丸見え、大あわてでこれを窓一杯に天井からたらしたものだ。西陽のさしこむパリのアパートでも取り外し自在のカーテンとなった。

旅は日々の生活の中で堅固に組み立てられてゆく常識や固定観念を、頭の中から取り除くいい機会である。頭の中にぽっかりと窓を開け時々新鮮な空気を取り入れることが出来る。それにモノを創ること、生きることへの情熱を倍加させてもくれる。

旅をするにはお金が必要だが、働くこと以外にも日常を切り詰めて無駄を省くことばかり考えている。テレビを見る間も手を動かすことが出来るから、自分の洋服は自分で縫うようにしているし、食物は割安な店に出かけて端目を気にせずお徳用品や見切品を手に入れる。目的があるからそうすることがとても

たのしい。五十歳を過ぎてから確かに老化の兆しは目に見えて早い。けれども心は老いたくない。旅に出ると様々の人との出会いがあり、それが固くなった心をひとときほぐしてくれる。

方角音痴の私はよく道を間違える。トレドでは街と反対の方向にどんどん歩いていて途中で女学生の一団に問いかけた。十五歳という彼女たちは爪を赤く染めたりはしているが赤い頬っぺの健康な可愛子ちゃんたち。照れたりはずかしがったりしてお互いにぶつかり合いながらバス停まで来た。そしてまぶしそうにバスを見上げながら手を振って見送ってくれた。

石ころのごろごろする海岸に下り、硝子張りのレストランに入る。鳥籠の下った片側でおばさんたちがワインで真赤に頬を染め手は編棒を動かしつつワイワイやっている。陽ざしの暖い外のテーブルに腰を下すと、大きな犬が寄ってきて傍らに寝そべった。夕暮れて沖の燈台のきらりきらりが鮮明になる頃、海風が冷たくなり私は中に入る。犬は海に向って一つだけ開けてある扉の外で、人々と同じ方向の燈台に向って前足を揃える。犬もやっぱりこの夕暮を美しいと感じているらしい。店主は電燈をつけないで奥に入ったまま。ふっと入って来たのは幼児を連れた若夫婦、気配に奥から出て来たおばあさんは、注文をきいての去りぎわに私の肩にそっと手を置いた。言葉の通じない旅人への言葉にまさるいたわりであった。

やがて燈台の辺りのオレンヂ色は徐々にバラ色に変って行く。太陽が完全に水平線に消えるまで、世界のすべてがこの光り輝くローズ色に凝縮されたような数分であった。

また、街外れの美術館から丘の上のホテルに戻るのに、細い坂道が入り組んでなかなか戻れない。学校帰りの少年が（きっと小学二年生位かな！）連れの友だちと別れて案内してくれるという。道すがら数学や地理や絵を学校で習っているんだと得意に話してくれる。やっと道を上りつめ、やあ教授！と別れの手を彼の前に差し出すと、はにかみながら握り返してくれた小さな手。スペインの人たちは子供から老人まで実に親切だったなあ。

いよいよ帰国する日のせまったある日、飛行機の飛び立つバロセロナの少し手前のタラゴナで、マドリッドからの汽車を降りた。十二月と言うのにオレンジが実り椰子の木々の茂る道は、まるで春のような陽ざしに溢れている。石垣の上の広場から見下すと地中海がおだやかに広がって見える。沖に四角い燈台が――。マドリッドに向かう汽車の、左手の窓に海とそしてこの燈台のオレンヂの光りに目を見張り、帰路には必ず此處で下車してと決めたのだった。

東南アジアにて

田丸青美

このたび大阪府の婦人問題セミナーの参加者として、東南アジアのアセアン加盟国のうち4カ国を訪問した。アセアンとは、インドネシア、フィリピン、タイ、マレーシア、それにシンガポールの5カ国のことで、私も含め日本人の皆が知っているわけではない。しかし、タイへ行くと言うと、大方の女性は目の色を輝かせた。シリキット王妃の名と共にタイシルクはあまりにも有名だったし、それだけの魅力もあり、おみやげはタイで、ということに必然的に決まったわけです。

さて、婦人問題、なかでも東南アジアの婦人問題などというと全く本もなく、雲をつかむような、全く予備知識なしでありました。

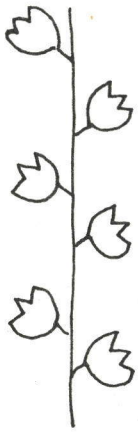
しかし、行ってみるとどこの国も婦人対策には日本より力を入れており、今さらながら日本の儒教的思想、男尊女卑の根深さに驚きいったことでした。

大臣が女性であるからといって驚くことはないにしても、日本なら一つのポストたりと

も女に渡すというようなことは考えられないのではないか。それがたとえ婦人の地位向上大臣のポストであろうとも。しかし、インドネシアで逢ったのは女性2名、男性2名の補査官をつれた婦人の国務大臣でありました。

折しも南国のスコールが雷鳴をともなって激しく、美しいステンドグラスの窓をたたくとき、大臣は「六四万人の婦人が参加しなければ、インドネシアの開発は失敗するであろう。インドネシアでは、婦人の特殊教育が不足している。なぜなら、婦人の家庭内の役割は大きい。社会の最小単位は家庭で、家庭から社会へ反映してゆくことを大きくみている。子どもの教育でも家庭の母親の位置が大切である。人間の能力開発を進めるのは人間であり、人的資源は大切である。そしてその人的資源の開発育成を女性が握っているのだから、女性のこの特殊性を教育することに力をつくしたい。

インドネシアは世界の婦人の経験の上に、婦人の向上に計画をもっている」と語った。私たちはもっとくわしく知りたかったが、あとはお手紙でもといわれ、お別れの握手の際思わずアドレスを、と叫んでしまい、問題のアドレスが手に入ってしまったことでした。



さて、大臣だけかと思うと、局長クラスには数えきれないくらいの女性がいるとのことでした。国会議員の8％、地方議員の10％が婦人とか。

あとで訪問したインドネシア全国婦人協議会（KOWANI）では、婦人部役員との交流会があり、このコワニの現会長は国会議員兼アセアン諸国婦人会会長でもあるというほど、このKOWANIは婦人大臣の宝庫でもありました。一九七八年にスタント夫人はKOWANIから副大臣に入閣し、いまの社会大臣は過去にはKOWANIの事務局長だったとのこと。上流階級の婦人たちではあるが、名実共に力をもった婦人たちの歓迎会で、グアバジュースやマンゴジュースを飲み、ジャンブーやトルトーリア、マンコといわれるおまんじゅうを食べ、大いに語りあかしたと言いたい所だが、何せ英語がすらすらと出てこず、ほんとうにくやしい思いをしたことでした。

しかし、隣りの席になった外国担当のラピアン夫人は、24歳をかしらに7歳まで6人の子もちだと知ったときには、心の底からジェラシーを感じるくらい、うらやましくなった。あまり上流婦人とはつきあいがないので、比較することはできないが、匂うような幸福感がひしひしと伝わってきて、すばらしい一瞬でありました。すべての婦人がこのように幸せそうにいてほしい、それには経済力と何か、この二つが相そなわってこそ、得られるものではないかと思いを新たにしたことでした。

さて、翌日は市内観光。ムルデカ宮殿やスカルノ大統領デザインの記念塔は悪趣味だと評判が悪かった。スカルノも婦人というものをトータルに受けとめることの出来ない過去の男性であった。なぜなら、デザインは男性器と女性器を象徴してあったからである。

しかし一歩街へ出ると、わっと子供の物売りが観光バスにむらがって来る。はじめは可哀いそうだと思って買っていたが、ふと見ると、子供たちの背後には大人の眼や手があることが感じられ、日本語で「何べんも来るな」とどなってしまったのは、ジャカルタから空路ジョクジャカルタにとんで、ボロブドールという仏教遺跡へいった時のことだった。

フィリピンでは政状不安定で、戒厳令が敷かれており、言論の自由はない。そんな中で婦人だけのデモがテレビで報道されているのを見た。アキノ氏の葬式に2万の人が出たことをニュースとしてのせなかった新聞は民衆のボイコットによって、それまで3紙あったのがつぶれて、一つ新聞ができたというくらい国民の力はあるらしい。しかし経済状況は悪く、ペソが下って生活は苦しいという。そんな中でも、一九八〇年の二月には大統領法典で男女差別禁止法が成立したとのこと。大統領法とは憲法の範囲内で国会議員から国民議会を通じて大統領に提案される法律のことである。

しかし法律とはうらはらに、五万～一〇万のホスピタリティ・ガール（外人向売春婦）

がいるということだった。クラーク、オロガという米軍基地のある町では何十万人いるかわからないということだった。ミンダナオ島、ビサヤの島々から、貧しい家庭の子女が工場で働かせてやるという甘言につられて、マニラに出てくるのだ。五人家族で一五〇〇ペソ必要だというのに、女中の平均賃金は三〇〇ペソ。大学教授ですら二〇〇〇ペソと低いので、ホスピタリティ・ガールのふところにどれだけ残るのか想像に絶する額だと思う。

タイでは、エマージェンシイ・ハウス（駆けこみ寺）にも行ったが、この駆けこみ寺は民間の弁護士さんがつくった施設であるにもかかわらず、警察から、病院から、政府からと、保護されるべき女性が送り込まれてくるそうである。創立以来保護された婦人の年齢の内分けは一四歳まで一九九、四四歳迄六九一、六〇歳まで七二、六〇歳以上二六名だという。教育程度で分類すると、文盲二四六、小学校1～2年程度四九九、小学校以上二四三と、義務教育（小学6年まで）を受けられなかった層が多い。政府の補助金もなく二〇〇万バーツの寄付金を基金にして、女性法律家委員会と女性の地位向上委員会が協力してやっているこの施設は、出来て二五カ月で五三二万バーツもかかったという。

このように、教育ということが女をふり分けるキイ・ポイントになっていることは、いまや全世界共通のテーマであることが解っていただけたと思う。とはいえ、高い教育とひきかえに、子供の数をおさえてきた日本では一人子、二人子の子育てにひそむ矛盾がそろそろ出てきているのだけれど。

シンガポールでは、狭い領土で皆が幸せに暮すため、二〇三〇年には出生者数と死亡者数が同じになるよう指導しているときいた。

人間の幸せとは何か、ガムラン音楽のオーケストラがいまだに耳に残っている私にとって、この旅は日本人としてのルーツ探しでもあり、大いに考えさせられた。

アジアの女子労働者たちと　正路怜子

この春、塩沢美代子さんを所長にして、アジア女子労働者交流センターができ、そこの最大のとりくみとして10人の女子労働者たちをまねいて交流集会を持った。東京、飯田、名古屋と旅してきた彼女たちに会ったのは11月の大阪。

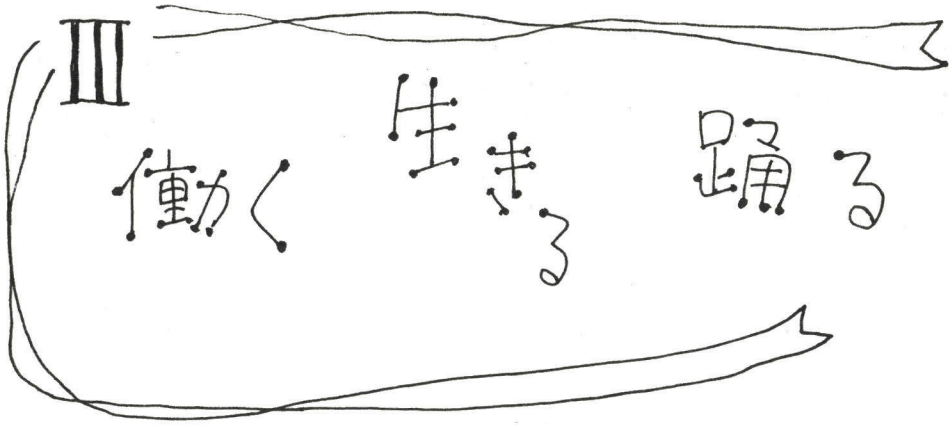
香港やフィリピンの女子労働者たちは「女工哀史」そのままに、女だから学校にやってもらえず12歳にして口べらしのため、繊維工場や電子工場へ働きにやられたという。ひと口に東南アジアといっても国情も歴史もちがうから真実のほどはよくわからないが、日本人はまぎれもなくアジア人なのに、アメリカのことほどにも韓国のこともフィリピンのことも知らない。何か事件がおきるたびに報道されるバラバラの事実をくみあわせても何のイメージも浮かんでこない。

でも現実には日本企業があちこちに進出し現地労働者を安く、真夜中まで、安全性も無視して（香港のタブチモーターでおこった毒性ガスによる女子労働者の死亡や妊産婦の流産、フィリピンのIC工場での発ガン事件など、日本では一度も報道されていない）働かせ、景気が悪くなったらすぐに解雇する。労働者が団結して何か要求でもすると、日本的労務管理とやらで、自宅へ首謀者をよんで懐柔し、分断するという。

日本の繁栄は、まさに彼女たちの苦しみの上になりたっているのだ。いま手元にある雑誌「世界から」によると中部ジャワでは、女性を深夜に働かせるには特別の許可が必要だが働く人たちの関心事は給料と手当だという。①深夜労働をすることを認める親のいること②送迎車の用意（バスも用意せず、痴漢にいたずらされたり強姦のおそれがたえずある）③労働現場での十分な照明④労働者への十分な休息時間と米飯の無料供給⑤企業による安全性・衛生への注意が、深夜労働をさせる場合の条件だというが、ほとんど守られてなく、夜食にでる菓子パンを翌日屋台に売るという。

まずしいのだ。「いつも頭が痛い、でも仕事しなきゃ給料がへるから休めない」と。

＊アジア女子労働者交流センター＝新宿区西早稲田2の3の18の34電＝202／4993



フラメンコ その魔性の魅力

荒井由美子

私がフラメンコなるものを知るきっかけとなったのは14年も前のことだった。

ある救急病院でアルバイトをしていた時に知り合った友だちがフラメンコギターを聞かせてくれた時、ラスゲアードといって弦を爪ではげしくかき鳴らす奏法に私は驚きの目を瞠った。

暗い哀愁を帯びたふしぎな旋律や、こぼれるように美しいトレモロも私の心に深くしみとおり、強く訴える何かがあった。

私にとってそのころはちょうど苦しい恋愛のさなかであり、その友だちもまた失恋の傷手を忘れかねている時だったから、フラメンコに心酔する素地が十分にあったのだろう。

舞踊を最初に観たのもそのころで、スペイン人のサラ・レサーナの美貌と伴奏のギターのリズムや美しい音色に深い感銘を受け、それがのちに私がギターや踊りを習うきっかけとなった。

※

独特のリズムとラスゲアード、トレモロの奏でる哀愁を帯びたメロディー。カラカラと鳴りひびくカスタネット。華麗な衣裳をまとった踊り手のそり返った胸。目にもとまらぬ速さで動く足さばきと靴音。渋いカンテ(歌)

ギターと踊りと歌の三位一体で構成されるフラメンコは、芸術の一つの領域として単独にとり出され、「フラメンコギター」「カンテフラメンコ」としてレコードに収録されたり舞台になったりすることはあっても、もともとは三つが入り混じって雰囲気を盛り上げるのが伝統的な「フラメンコの世界」だとされている。

最初はどの曲を聴いても同じようにきこえて区別すらつかなかったが、ギターを習ってみると、リズムの強弱のつけ方や曲調がそれぞれ異なっていることが解ってきて、より深くフラメンコの醍醐味を味わうことができた。

曲にはシギリージャス、ブレリアス、アレグリアス、タンギージョなどのほかにもさまざまな曲があるが、「ソレアレス」はソレダード(孤独、寂しさ)という言葉に語源をもち、フラメンコの最も基本的な曲調で、哀愁、情熱、孤独感といったフラメンコ情緒のかたまりである。このリズムは12拍(3拍子で4

小節）をI単位とし、3、6、8、10拍目にアクセントがおかれる独特の律動である。

フラメンコの歴史は、インドの一地方を故郷とする放浪の民族（ジプシー）が、南スペインのアンダルシア地方に定住し、ここに古くから伝わっていた音楽舞踊をしだいに彼ら独自の色彩に作りかえていったものがその源になった。最初は靴もはかず、カスタネットも用いずにギター伴奏で振りだけのような踊りを、自分なりの解釈とイメージで踊っていたともいわれている。

フラメンコ舞踊のサパテアード（足踏み）の音はタップダンスと違って、音が軽く宙に浮かずに地の下へ下へと重く響くものでなければならない。

足踏みがどんなに激しくても下半身の姿勢を崩してはならず、腰が定まらずクネクネ動くようではだめなのである。また、ほんの半拍足をふみ出すのが遅れても、あとのステップが全部乱れてギターと合わなくなってしまう。

背中の反り具合、首のねじまげる角度、視線の一つにも踊りの美しさやメリハリにひびいてくる。サパテアードに気をとられすぎると、振りがおろそかになり、手の動きや姿勢が崩れてくる。

わずか3年ばかりしか習っていないが、フラメンコ舞踊はむずかしく、生半可なことでは身につかないことがわかった。苦心して覚えた振りやサパテアードもけいこを怠ると忘れるのは早い。

舞うということは性的魅力を強調することであり、自己顕示欲を満足させることでもあるようだ。詰め物をしてぐっと胸の高さを強調し、思い切り背中をあけたピッチリと体にはりついた衣裳を身にまとい、大きなイヤリングや髪飾りをつけて濃厚な化粧をほどこす時、踊りの下手なことなど忘れてしまって自己陶酔とエキゾチズムの世界にひきこまれる。

「血が騒ぐ」という言葉があるが、フラメンコギターを思い出しただけで踊りたくて矢も楯もたまらずに、遠いけいこ場まで無理をしてレッスンに通ったことが一時期あった。私を長い間惹きつけずにおかなかったフラメンコの魅力はどこにその秘密があるのだろうか。

※

フラメンコに取り憑かれている人は世間体や常識の枠からはみ出た個性的な人が多いようだ。私自身を顧みても心理的な放浪をしているころや激しい葛藤に心がかき乱されているころは、フラメンコにのめりこむことが心の拠り所となり、なぐさめであったことが多かった。

暗く謎めいた憂愁を帯びたギターの音色も、臓腑をえぐるような歌い手の渋いうなり声も私の胸を切なくしめつける。

フラメンコに深く心酔するものがあるとすれば、それはフラメンコのもつ悲嘆、孤独などの部分がその人の心に浸透し、響き合うからではないだろうか。なぜならフラメンコの明るく陽気な部分は重要ではなく、もともと悲嘆、孤独などの重くて暗い面が基本的な要素となっているからである。

精神が安定し、噴き上げるような心の葛藤にのたうちまわることもなくなった今の私に、あれほどのめりこんでいたフラメンコが不思議にも遠ざかりつつあるのが、その何よりの証左であろう。

※

初めて長嶺ヤス子の女の情念がほとばしっているような強烈な踊りを観た時の衝撃を、私は忘れることが出来ない。

彼女の魔性の魅力のとりこになって以来、いわゆる一流といわれている他の誰の踊りを観ても私は飽き足りなくなり、感動を覚えなくなってしまった。

誰それは手の動きや振りはきれいだが、サパテアードは迫力がなくて軽すぎる……誰それはサパテアードは迫力があるが、踊りに品がなくて泥くさい……動きがあつぼったくてメリハリがない……衣裳の趣味が野暮ったい……云々と、見る目が肥えてくると、批判も手きびしくなってくるのであるが、ヤス子の舞台は非の打ちどころがないくらいに素晴らしい。

近年の彼女はフラメンコから脱却して創作舞踊に意欲をもやし、昨年は「カルメン」を一昨年は「娘道成寺」を発表している。そしてそれらは彼女のもち味を生かしたスケール

の大きい格調の高い舞台ではあったが、私としてはフラメンコ舞踊家としてのヤス子の印象があまりにも鮮烈だったためにやや物足りなく、今一度昔のフラメンコを踊ってほしいと願うばかりである。

ヤス子がホセ・ミゲルと組んで踊ったフラメンコを基調とした創作舞踊「サロメ」は、七つの衣裳、振り付け、サパテアード、音楽構成のいずれをとっても完璧な出来栄えで、ため息なしには見られない素晴らしさだった。

それは女の業苦を背負ったようなヤス子の性格や心の葛藤が「サロメ」の舞台に投影されている鮮烈なエロチシズムの世界であった。

官能のむせ返る美しくも激しいヤス子の踊りを観終ったあとの3日間は、興奮醒めやらぬといったありさまで、あの時の感動はいまなお深く心に残っている。

ヤス子のパートナーである黒い髪と褐色の肌をもったスペイン人ホセ・ミゲルは、女心をときめかす魅惑的な舞踊手である。

彫りの深い顔の眉間に深く刻まれたしわと苦渋に満ちた表情、はがねのようにたくましい胸とひきしまった胴――バネのように強靭なサパテアードでダイナミックに踊るミゲルは、アンダルシアの灼熱の太陽と血の匂いを感じさせる。

ヤス子と組んで踊った「サロメ」の終幕の中での〝愛の燃焼〟場面では、雄(おす)としての性的愉悦が全身によって余すところなく表現されており、目もくらむような官能の世界をくりひろげていた。

ヤス子のパートナーとしてミゲルほどふさわしい男は他にいないのではないだろうか。

※

舞台の端からうねり出たヤス子は、虚空の一点をにらみすえ、幾重にもかさなり合った長いすそをひるがえしながら指や手を花びらのようにヒラヒラとまつわりつかせる。床に叩きつける激しい靴音がギターの音と同時にピタッと止む。

反りかえった背中と腰の微妙な動きが扇情的で、すえたような退廃のムードをかもし出す。

あるシーンは悲しみのあまり身もだえするごとくに床にしゃがみこみ、大地を叩いて慟哭する。胸をかきむしるかのようにかき鳴らされるカスタネット。

ギターは踊り手の足元を見つめながらはげしくかき鳴らされ、よろこび、苦悩、嫉妬、怒りなどの移り変る感情を表現する。

激しく複雑なサパテアードが舞台の端から端まで長く続き、顔や首からしたたりおちる汗がとびちるのを見ると、踊り手の苦しい息遣いが伝わってきてこちらの呼吸まで止まってしまうかのようである。

満員の会場はしわぶき一つきこえず水をうったようにシーンと静まりかえっている。

一曲おわると、会場のあちこちからホーッと深いため息がもれ、割れんばかりの拍手が鳴りやまない。ヤス子はくずれおちるように

おじぎをし、晴れやかな笑顔であいさつをして幕が閉じられる。

※

22歳で単身スペインへ渡り、ドン底生活の中で爪がはがれて血が出たというほどの厳しい修業を重ねて、今や世界にはばたく芸術家になったヤス子は、また、常識の枠からはみ出して生きている風変りな自由人でもある。

ホセ・ミゲルのほかにもジプシーたちとの幾多の奔放な恋を遍歴し、「あたしは全部を投げうって男の人を好きになったことがないみたいね。だからいくら捨てられても傷つかないのよ」と言った彼女は「舞台に立っている時の私は世界で一番美しい」と信じているナルシストでもあり、驕慢な女王のように誇り高い。

日常生活の安定も何もかも投げうって、ただ踊るために生きてきたとしか思えない彼女が、命がけの執念をもやして才能を磨いてきたからこそ、これほど多くの人びとの胸を打つ芸術となって結晶し、賞讃の的となったのであろう。

※

フラメンコのいくつもの踊りの奥義を極めるためには、〝払っただけの犠牲が報われるかどうか〟という功利的な計算を度外視して全力投球する気迫がなければ、その奥儀をきわめることはできないように思う。

踊りも恋もうつろいゆくものであり、永遠の命をもち得ない。踊りの瞬間瞬間に生命の燃焼はあるが、おわってしまえば形をなして残るものは何もない。残らないことが空しいと言ってしまえば生きていること自体もしょせんは空虚だといえるのではないだろうか。

人間の奥深い感情を表現するフラメンコには、気性の激しい私の個性にピッタリ呼応するものがあり、私の内なる暗くて重い感性のすべてを表現するものとして深い一体感をもたらしてくれた。しかし、ある感情のけりがついて執着が薄れた今は、呻き声と共にかかわるものではなくなり、その官能的、頽廃的な部分をいとおしむものに変化しつつある。

すべてを振り捨ててフラメンコ舞踊に執念をもやしてみたいという欲望が時にわきおこることがあるが、現実認識は私をして危険な賭へ駆り立てることもなく、それは夢でおわる公算がつよいようだ。

ジプシーの棲むサクロモンテの丘、アルハンブラ宮殿、灼熱の太陽が照りつけるアンダルシア地方――まだ見ぬ地スペインへの、そしてフラメンコへの、郷愁にも似たかぎりない憧憬は、見果てぬ夢として私の中に生き続けていくことであろう。

（35歳・養護教諭）

みずみずしい女の生き方をもとめる女の雑誌『**グリンピース**』は、すべて手がきのしゃれた雑誌（53頁参照）で二百円。申し込みは大阪母親大会実行委員会まで。
（電）06／768／5315

踊る意志――片岡美智子

太古の時代、人々は神々に踊らされた。神々を恐れ敬い讃えた。そして今、見失ってしまった神々を求めて踊らされる。

人の皮膚は固くなってしまった。意識はバリアをはりめぐらして、強烈な光を閉ざしてしまう。まるでスモッグが大空を覆うように。しかし、個の城を築くことは、長い歴史の中で、人類が求めてきた快楽であり、エゴなのだ。まず、人間が大切で、まず自分が大切であることは、必要悪。自由への願望と表裏一体である。

この地上様々な民族があり、様々な人間―生まれた瞬間の人、死ぬ瞬間の人が在る。その小さなサイクルは異なるであろうが、個体化の傾向が確立するにつれ、失なわれた郷愁を予感する。だが手にしたものが大きいだけに先祖返りはできない。捨ててきた同じものはもはや手に入らない。

手に入れたもの―対象を意識化し、環境も自己をも変革していく他に類のないこのエネルギーを、より透明に明るくしていく中で、この力を支えてきた大いなる力を、見えるように意識化し、その力への親和力を強めていく。このことにこそ、人類の共通の目的と光があるのでないかと思われる。

このような立場にたって始めて、踊り踊らされるという関係を超えた神々と共に踊っていく意志に満たされるのである。

私の読んだ本

「女としごと」野中文江編

川口祥子

中学校の教師という職業上、生徒が進路を考える上で参考になりそうな本はないだろうか、ということも本を探す時の私の関心のひとつになっている。最近は中学・高校生を対象とした良質の本がかなり出てきているので将来を考える参考になる本もようやくふえてきたように思う。この二冊も、骨のある女性が編集した読みごたえのある本である。

中学生時代という時期は、小学生の頃のように無邪気に将来の仕事について言えなくなると同時に、大部分が高校へ進学するので職業というのは先のこととして考えようとしないようである。それでも男子は高校、大学の卒業時にはほとんどの人が本気で職業について考えるが、女子は「結婚」の方がより重要な問題と考える人達も多い。だからこそ、特に女子には勉強する目的は何か、将来何をやりたいかなど、意識的に考えさせたいと思っている。

1では陶芸家、オートバイ・ライダー、同時通訳、まんが家、棋士、ギタリスト、弁護士、テキスタイル・デザイナー、建築家、女優、翻訳家、舞台美術家、公認会計士、税理士、作家というどちらかというと独力で行なう性質の仕事をとりあげ、2では組織の中で働く仕事としてテレビプロデューサー、市議会議員、ソーシャルワーカー、映画監督、科学者、幼稚園教諭、スチュワーデス、中学校音楽教師、外交官、図書館司書、看護婦、システムエンジニア、家庭裁判所調査官、編集者をとりあげている。あわせて二十八人の女性が、なぜその仕事につきたいと思ったか、その仕事にはどんな勉強が、資質が必要か、どんなよろこびとむずかしさがあるかなどを、自分の経験をふまえて、わかりやすく、暖かく励ますように語っている。結婚や出産についてふれている人も多くあり、当然のことながら『仕事か結婚か』『仕事か育児か』などという発想は微塵もなく、その経験を仕事の中にどう生かしていくかという視点で語られる。

1の中で弁護士の中島通子さんは大学時代に丸山真男先生のゼミで「女の人はしっかりした仕事を持っておく方がよい」とアドバイスされている。男だったら社会からも家庭からも何かをするのが当然とされ、家事にしばりつけられることもないのである程度の意志があれば何かできる。ところが女は〝主婦業〟というのも世に認められているのでよほどの能力と意志がないと主婦業に埋没してしまう。というような意味である。中島さんに対してはいつまでも大学に籍を居いたり、研究者という形でいるよりも……という意味で丸山先生が言われた言葉であろうが、欠元は違うが今私もつくづくそう思う。計画性がなく不精でグウタラな私がもし仕事を持っていなかったらどうなっていたであろうか。最近は特に仕事の上で悩むことが多くやめたくなる時もあるが、仕事があるから休日に子供と過ごすことが楽しいし、たまには家事も楽しみのひとつとなる。又、仕事がうまくいった時のよろこび、感動は家庭内のものとは異質のものであり、私が生きる上でのはげましとなっている。

多分私は仕事を選び直すことはないと思うが、この二冊を読んで、いろいろな仕事とそこで生きる女性の姿を知り世の中が広くなったような豊かな気持ちになるとともに、自分が働き続けることを励まされるような気持ちになった。とくに2は、私が名前を知らない人ばかりであるが、その人達が何と誠実に、真剣に仕事をし、多くの業績をあげていることか。ちょっとまじめすぎるのが気になるけれど。

ところで、この「ちくま少年図書館」には腹を立てた思い出がある。一九七六年に少年図書館33・34として『しごとと人生』12という本が出たので早速学校の図書館で手にし

てみた。編者は松田道雄氏である。アナウンサー、パイロット、運転士、教師、速記者、学者、農業、俳優、プロ野球選手、作家、カメラマンなど二十の職業の人が語っているのだがすべて男性なのである。それぞれのエキスパートが語る内容は含蓄に富んでいたである。しかし読み終わった私の頭の中は「なんで男ばっかしやの？」ということでいっぱいであった。二十人のうち二、三人でも女の人が含まれていれば私は何も思わずにすごしたであろう。半分は女性を入れるべきだなどとは気付かなかったにちがいない。しかし一人もいないとは！　斎藤喜博が偉い教師なのはよく知っているが「人を教える喜び」を語れる女の教師はいないか。「土とともに生きる」は佐藤藤三郎しか書けないか。俳優は有島一郎しかいないか。アナウンサーは、医者は、カメラマンは男だけの仕事なのか。たしかに今、冷静に考えるとそれぞれの分野で名前をあげれば男性の方がすぐにたくさん出てくるであろう。意識的に女性を入れようと思わなければすぐ女性の名前は出てこないかもしれない。そして松田道雄氏がこと数年書いているものを見れば（例えば『女と自由と愛』岩波新書）編者が仕事イコール男性のものと考えているのでこのような人選になったのもわかる。しかしあの頃の私は育児に手をとられる中で、仕事を続けることに必死の状態であった。本の内容よりも「なんで男ばっかしやの？」と腹を立てたことばかり今もよく覚えている。

少し道がそれるが『仕事と人生』を読んだ頃、私にとって松田道雄という人は、働き続けることを励ましてくれる人であった。あの『育児の百科』（岩波書店）という本によって。産休あけから共同保育所に子供を預けざるを得ない私にとって、保育所というのは最初不安であった。しかし、集団保育がすぐれていると説き、働く母親だけでなくすべての幼児に集団保育の場を与えるべきだという考え方に立ち、月令、年令ごとに「集団保育」という項目をおこしてくわしく述べられているこの本は私の育児のバイブルであった。時間をかけてすり餌のような離乳食を作るよりかんづめを使ってもよいからその時間を子供と楽しく遊ぶことにあてる方が子供にとって幸せだ、というような言葉も時間の足りない母親にはほっとする内容であった。しかし以前毎日新聞の「ハーフタイム」に書かれていた内容や『女と自由と愛』などを読むとこの人の考え方が変わってきたのがわかり、がっかりさせられることが多い。例えば『女と自由と愛』には共働きがいかにむずかしいかという説明の中で「保育所があっても、強制収容所みたいに、食堂も午睡室もありません」と書かれている。たしかにまだまだ不十分な設備ではあるが、そこへあずけざるを得ない親、そこで献身的に保育にたずさわる人々と同じ側に立つ人ならば、例えとはいえこのような言葉を使うであろうか。

物わかりのいい男性と結婚して働き続け、男尊女卑の社会に挑戦するか、専業主婦として新しい道を切りひらくかのどちらかが女性にとってよいことだ（ハイミスはよくない！）と若い女性に説きながら「家庭こそ管理社会の中の解放区」であり『専業主婦をえらびとって、市民運動などに参加する人達によって、新しいページがひらかれていくのを感じる』とのべている。以後この人のものは読む気がしなくなった。

この『女としごと』という本ができて『しごとと人生』の欠落を補ってくれたことによって以前腹を立てた気持ちは少しはおさまってきたが、八年目にしてやっと女の編者の手で『おんなと仕事』という題で（『しごとと人生』ではなく）本ができあがったということが、日本の女のおかれている状況をよくあらわしているのではないだろうか。

（一九八三年九月十五日）

女子高校生四〇〇人に『婦人問題ハンドブック』を読んでもらい、パネルディスカッションに参加。ほとんどの生徒が、結婚したらやめて自分の手で子どもを育てたい、男と女は体力的にもちがうから差があるのは当然というのでガックリ。ほとんどの中年女がパートであれ何であり、働きたいと思い、女子マラソンはせっせと記録を伸ばしてるのに。（S）

ボランティアについて

由里洋子

ここ数年、私はボランティア活動の限界というか、長年にわたってひとつの活動にたづさわってきたことからくる〝壁〟現象に直面してきた。

このような悩みを抱くのは私だけなのだろうか。そういえば、いままでに、こんな苦しみがあるのと打明けられたこともなければ、仲間うちで話題になったこともない。いや、絶対にあるはずだ。ただ、みんな胸におさめて黙っているだけなのだ、と思う。この手の問題は、表現化しにくいし、誤解もされやすいから、避けて通ってきているのではないだろうか。

金輪際〝主婦やから〟を理由にせんとこ

私は昨年まで、ある地域婦人団体の事務局長を十二年間、実質的な期間を入れると十五年近く続けてきた。

家庭婦人が社会的に目覚めて、いわゆる「活動家」になっていくお定まりのコースを、順序よくふんできたといえよう。ただ特異であったのは、助走もなくストレートに事務局長の役割を背負ったことである。

団体の性格が、婦人団体、労働団体による連絡会組織で、結婚前に二年ばかり銀行勤めをしただけの新米事務局長は、「ダンコウ？どんな字を書くんですか」「一時金斗争？それ、何ですか。あ、ボーナスのこと」といった調子で、まったく手のかかる存在だった（と今にして思う）。

分裂攻撃を受けるというきびしい状況のなかで、ヨチヨチ歩きではあったが、この組織に責任を持たなくてはならないという思いだけは強かった。そんな私にいちばんこたえた言葉は、「やっぱり主婦は……」「だから主婦は……」といわれることだった。遅刻すると、「やっぱり主婦やなぁ。規律性が訓練されてない。労働者は一分遅れてもタイムカードに記録されるねんで」。「夜の会議は主人が……（モゾモゾ）」というと、「だから主婦はあかんなぁ。自分の任務に責任をもたへん」

そのころの思いは、労働者ってすごいなぁ。鍛えられてる。いわれるように主婦（私）は甘い。よし、金輪際〝主婦やから〟を理由にせんとこということだった。主婦ボランティアのもつ弱さを、かけ出しのころに批判されつづけたことは、幸いであったと思う。

が、主婦という甘えを捨てようと努力して、ふと気がつくと、同じ主婦の人たちが遠のいていくのが感じられた。脱主婦をめざしながら、主婦同志のあいだでは、主婦的な言動をしなければ浮き上ってしまうという矛盾。この二面性を最近まで持ち続けてきた。

ボランティアでないボランティア、専従でない専従

私たちの団体には事務所がなかった。会議や作業のたびに部屋を貸りる煩雑さ。書類や文具品をダンボール箱に入れて移動する面倒くささ。そして日常的には手さげ袋に必需品をつめての〝歩く事務所〟を数年間やっていた。

どうしても事務所がほしい――加盟団体や個人の人たちの援助で、その願いは実現した。財政的な持続を危ぶんでの慎重論もあったが、運動を発展させるためにはなんとしても必要だと、押し切ったかたちとなった。百万円の借金をかかえこんだから、事務局長の私としては背水の陣である。

問題は専従体制である。構成員がいない団体だから、専従員を雇うゆとりなど全然ない。そこで考え合った案が、全日制市民（主婦）による当番制である。週一回の当番日をきめて事務所を機能させようということになった。

そのとき、私は秘かに決意をした。自分自身にきびしい条件を課さなければいられないほど、不安だったといえよう。「無給の専従になろう」と自分に誓ったのである。以来、この状態を九年間続けてきた。

歳月の流れのなかで、私が専従として給料をもらっていると思いこむ人や、無給なのが何の不思議でもない空気が定着していった。

賃金をもらっていなくても、もらっている人に負けないくらい責任をもった仕事をやろう――それが「主婦だから……」といわれつづけてきた私の意地であり、誇りであり、また支えでもあった。

ボランティアのやりすぎ？

が、活動十年目あたりから、壁、を感じはじめてきた。事務局長を交代すべき時期がきているのではないかと、直感的なところで判断していたが、なぜその時期がきているのかを理論的にいえるとこまでいっていなかった。

そのころから、表現はさまざまだが、「普通のお母さんはついていかれへん」ということで、やりすぎるという批判を受けるようになった。また、何でもひっかぶりすぎだという指摘もうけた。要は、「過ぎる」ということである。しかし、活動にやりすぎるということがあるのだろうか。私の欠点は、「過ぎる」ことなのだろうか。

八〇年代に入り、情勢はきびしく展開していた。坂道を転げ落ちる雪だるまのように軍事費が拡大していくなかで、やらなければならないことが後から後から押し寄せてくる。

一方、私のまわりでは、「負んぶに抱っこ」の状態が日常化していた。やればやるほど周囲をスポイルしていく。このやりきれなさ。

アマチュアリズムの限界がきてんねんで

「活動の壁にぶち当ってる」「ボランティアの限界がきた」と　だれかれなく訴えてみたが、大勢は「それだけやってて、何いうてるねん」と、なかなか真意を受止めてもらえない。限界とは、もうやれない状態をいうのであって、それだけやっているのは限界でないという理解のしかたである。「またまた、理屈っぽいこといって、それは、ぜいたくな悩みというものですよ」といったところだ。

が、ある日　「なんか　まわりとかけはなれてしまった感じがするねん」という私に、「それは、アマチュアリズムの限界とちがうか。お金をとるプロをめざす時期がきてんねんで」といってくれた人がいた。

脳天を打たれた思いだった。

ボランティア活動の質的変化をズバリ一言で指摘したのである。活動を外的な量の問題で判断すれば、「それだけやっていて、なにがボランティア活動の限界だ」というようになるのはあたりまえである。

「やっぱり主婦やから……」「お金をもらってないから無責任や」といわれまいと意地を張ってきたし、だから主婦たちの弱点も自分が克服すべき努力目標として見すえてきた。そのことが私のなかで質的な限界を生みだしてきたのである。

ボランティアとしての三段階

そういう視点で自分のボランティア活動をふり返ってみると、三つの節があったと思う。

最初は、家庭から一歩社会的なところへ踏み出したものの、自分にまったく自信がない時期、この時期は、新しい世界や自分自身の発見などで、新鮮なおどろきの連続である。「はあ―、こんな世界もあったのか」「へえ―、私にもこんなことができる」と、無我夢中で、ほんとうに純な善意に満ちあふれている。無償だからこそ値打ちがあるのだと、人間としての善意の美しさに自己陶酔できる時期でもある。

次にくるのが、一定の経験も積んで、活動も手の掌にのり、自分の力で運動が創造していける力量がついてくる時期、面白くなってくる時期である。ボランティアとしては、いちばん美しく輝いているときであろう。が、下手をすれば、ぎらぎらと自信が脂ぎり、鼻もちならない存在になりかねない。ここで成長が鈍くなって、空洞の張りボテのままボス化していくか。いま思い上ったらいけないと、自分を厳しく律して、さらに成長していくかの、分れ目の時期でもある。

ただ、無償の美しさ、などというセンチメンタルな気分は消えている。「それだけ分、パートにでも行かはったら、お金になるのに」と、ようやりはるという気持と　アホやなあというあきれの部分を重ねていう人もでてくる。当の本人も、ときにはふと立ち止まり、睡眠時間を削ってまでもやっているこのエネ

ルギーを労働賃金に換算したらどれくらいかなどと考えてみたりもする。

そして、質的変化による限界の時期である。

私はもうひとつ活動の場をもっていた。社会教育の分野である。こちらのほうは婦人運動より長く、かれこれ二十年になる。

壁を感じはじめていたころに、学者や行政職員の人たちから、「講師活動をどんどんやったほうがいい」とアドバイスされていた。しかし、まだその時期には、「私のようなただの主婦がとてもとても」と尻ごみをしていた。たまに講師や助言者として行き、謝礼をもらうと後めたいような気はずかしさが残った。

いまになるとよく見えてきたのだが、要するに自信のなさを、主婦の御旗を掲げて安全圏に逃げ込むという、甘えと卑怯さを偽善の謙虚さにすりかえていたのである。

あれだけ「だから主婦は……」といわれまいと努力してきたつもりであったのに、この様である。愕然とする。主婦とは何と深い業を背負っている存在なのであろうか。

ほんならプロってなんやねん

私はいま「グリンピース」という婦人雑誌（大阪母親大会連絡会の機関誌）の編集の仕事をしている。いまのところボランティアの性格が強いが、若干のお金をもらっている。が金額にかかわりなく、私自身プロ化をめざしている点が、これまでのボランティア活動と基本的にちがう。

私はけっしてボランティア活動を否定するものではない。政府や自治体がやるべきことを、ボランティアに肩代りさせるやり方には批判的だが、善意のボランティア活動は大切にしなければならないと思う。また、専門家のボランティアも貴重だし、プロがボランティア活動のなかで学ぶことも多いと思う。だが、私のように長年ボランティア活動にたづさわってきて、壁に突き当っている人が増えているのではないだろうか。

私はアマチュアリズムの限界を脱するために、主婦の感性は大切にしながらも、主婦の甘さを捨て、プロ化をめざす決意をした。それに見合う報酬は積極的に獲得していこうと思う。

取材をする対象は、その道のプロの人が多い。プロフェッショナル精神とは何か。体当り取材をしながら、そのエッセンスを盗もうと虎視眈眈のきょうこのごろである。

道は遠い。

一年に百本の映画を

浅野祐子

朝の十時半から夜の九時過ぎまで、ぶっとおし見ました。合計六本。見終った後は、ちょっとばかり頭がポワーンとしました。

見た日は、十一月三日文化の日。場所はSABホール（フェスティバルホール地下）。一日がかりなのでおにぎりを買い求め、館内で上映前に食事。

上映作品は、テルレスの青春・67番地の子供たち・北海は死海・最後の少年時代の四本でした。

現代の西ドイツの青少年非行やそれにかかわる家庭崩壊現象、父の失業、母親は生活に疲れ子供には盲目的な愛情と一方では、あきらめが……。なにやら、とても日本的な現象でその類似にびっくりしました。

見たあと、なんともいえないやるせなさを感じたのが、最後の少年時代。

その後、ついでということもあって、東映ホールへ足を向け、「鬼龍院花子の生涯」と「陽暉楼」を観て今日一日映画デーを終えました。普段は仕事に追われて、映画の最終上映時間めがけてすっ飛んでいく状態です。

今年の誓いとして、年間百本目標としたので、前もって、映画計画（見る）を立て、時によっては、映画館のはしごをする事もあります。

映画を観ると、本当にスカッとします。あの上映前館内が暗くなって、フィルムが回り出したとたん、心が浮き浮きします。テレビでも、映画の再放送やっていますが、スケールの大きさでは問題外ですし、それにコマーシャルつきなんて、いやいやそこで思考も感情もストップしてしまって、しらけてしまいます。

ただいま九〇本、十二月末までに百本達成できそうです。今度から、題名、監督名、国名、主演、簡単なあらすじと感想を書いていこうと思って、映画ノートを作成しつつあります。

62歳のお見合

田畑鞠子

午前七時、電話のベルで目がさめた。

「まりさん結婚せんか……」と言う声。

「えっ、私が結婚？」

「ウン、そうだ　先がみぢかいんだからこの辺で、ひとつ自分の家庭をもってみたらどうだ？」

「私の家庭？」

「そうだ。一人で自活しているのも、それなりにまりさんらしいと思うんだが、やっぱり女だから、家庭生活というものをさせてあげたいんだ」

「寝耳に水」とは全くこのことで、まだ一部分は眠さの残っている頭の中で、話している相手が誰なのか必死で考えていた。名前も告げずしゃべりつづけている相手も相当あわて者だが、はっきり目覚めていない私も「結婚!!、ヘエーッ私の家庭ね？……」と頭の中で相当とまどっていた。

九分通り目覚めた私は声の主が戦時中、私の家に泊っていたスマートな飛行機乗りで、今は広島に住む「K」氏であることに気がついた。

「僕の部下でいゝ奴なんだ。奥さんを乳ガンで亡くして以来一人で自炊してるんだが、見ちゃおれんのだ。どうだネ」

「お年は？」

「幾つになったかな、多分、六十五歳だと思う。ちょうどいいんじゃないか……」

「家族の方は……」

「そんなくわしくは知らん。ともかく、会ってみちゃどうだ。家は東京だけど」

我にかえった私は、「ヘエ、私が見合。フフ……六十二歳の見合か。ヘヘ……悪くないネ」と不謹慎にも一人でニヤニヤしたり「アホヤなー結婚なんかいたしません」て、ハッキリ云ったらよかったのに、と口をとがらせてみたり。

そして、幾つになっても私も女だなァと少々びっくりしたのは、「見合」という具体的な事実に少々ウロタエたことだ。そこで自分自身に対して一つの口実をみつけることで納得させ正当化することにした。見合に行くのではなく、四十年前のスマートな青年将校が今どんなお年寄りになっているか見に行くのだと。場所は浜松、寒山寺温泉。日時は十一月二日。隼戦斗隊戦友会の時。ということになった。

電話の主「K」氏は元部隊長とかで、私は妹ということで出席することになった。

十一月三日は母の命日でもあるので、湯河原にある母の墓参りを考えていた私は、これも口実の一つにして、妹たちには四十年ぶりの「K」氏に逢うことを強調して、見合いのことは二分位に言って出発した。「六十二歳でお見合い」ということに、テレ臭さがあったことはたしかだ。

K氏と私は「兄妹」と言うので一部屋を割当てられた。意識するなするなと自分に言い聞かせながら坐っている私に、入れ替り、立ち替り元部下の人たちが挨拶に来るので、妹の演技をするのにクタクタになっていた。目的の人はと言えば、当日の幹事長とかで大忙しでなかなか現われなかった。「もう面倒臭いからどうでも良いや」と心の中で思っていた時、ご当人が現われた。仮に「Y」氏としておこう。中肉中背まあまあ普通の人という所か。型通りの紹介をしてもらった。会食前のこととて幹事長さんはお忙しく、そそくさと立ち去った。

「第一印象はどうかネ……」と言われても答えようがないほど短い時間だった。

亀の年より年の功、だてに六十二歳まで生きて来たわけではない。しっかりしなくてはと、少々慌て気味の私と、出発の時のテレはどこへやら、実に冷静に、そして少しばかり残酷にY氏をみていた私がいたのである。何とおそろしいことか。

七十名ほど集った人々がこの日の幹事長であるY氏によせる信頼はたいしたものだと感服してみている私に「ヤメロ、今さら苦労す

ることもあるまい。老後は自由に気ままに呑気にやれ」ともう一人の私の声が聞こえて来る。

テキパキと歯切れよく物事を運ぶY氏をみて、

「さすがァー、仕事は出来そうだし、生活力は有りそうだし……」と感心していると、

「アホヤナァー、今さらなによ、ダマされたらあかんで、ええとこみせてるんよ、おさんどんに行くなんて止めとき止めとき、第一タイプがちがうやないの……」とまた一人が囁く。

たまたま手が空いて席に坐ったY氏に、せめてビールでもと差し出すと、

「イヤー、ジュースの方が……」という。意地悪虫がむくむくと頭をもたげた私は、右どなりの人からさされたビールを、コップに一杯、グイグイ飲みほして、「ハイ、御返し」と右どなりの人に差し出した。

「ヘェー、お酒類一切ダメ？　フーンお固いのかな……」と思い始めた頃から観察の目が少々意地悪になり始めた。

少々アルコールのまわった頭の中で、「真面目で、バイタリティーがあって、御面相もマアマアで、いいんじゃないの」と考えている私に、

「何言ってんの、第一フィーリングがあわないよ、ヤメナヤメナお固いばかりがいいんじゃないよ」ともう一人がささやく。

ああでもない、こうでもないと二時間ほどY氏には気の毒だったが、一挙手一投足、みさせて頂いた。

結局、何もわからないのだが、紹介者のK氏の言葉を借りると、「二十歳やそこらの若いものでもあるまいし、お互い六十すぎの者同士、恥ずかしいこともあるまい、何でもしゃべれ」ということなのだが、一応見合いは見合いナントも妙な具合のものだった。

後で思ったことは、女も六十二歳になると「救い難き代物」だと自分に呆れている始末ファストインスピレーション等と感じるより「あゝ　あのしゃべり方気になるナァ」とか「あの御飯のたべ方かなわんナァー」とか、いろいろつまらぬ事をみつけて、「ヤーメタ」と最後に結論を出していることだ。Y氏の人格そのものよりも、本人の気付かぬもので、その人の判断をしている自分自身、やり切れなさを味わった。

それにしても、三十代には三十代の、四十代には四十代のとそれぞれの結婚適合期というのがあるといわれるが、六十二歳まで、なんとか一人で生きて来れば、良いにつけ、悪いにつけ、経験していて、妙に開き直っているのか、カーッとのぼせることも無く、又見合と聞いても「めくるめく思い」というトキメキも稀薄になっているのかと　少しばかり淋しさも覚えた。

東京から電話しなかった私に帰阪後、Y氏から電話があった。当日は忙しくて何もしゃべれなかったのでと、家族構成、仕事、趣味奥様の死のことetc……を改めて、自己紹介があり、お互いの現在にいたるまでの履歴を話し合って、考え方の相違点も判り、何となく気が軽くなった。

心配して電話をかけてきた広島のK氏には「大阪へ行ったら電話します。東京へ来たら電話して下さい、同年輩同士お茶でも一諸に」というY氏の言葉を伝えたところ、

K氏曰く

「ということは、今流にいえば、ボーイフレンドとガールフレンドか」という言葉で六十二歳の見合は一応　チョンということにあいなったのであります。

子どもと私

山崎万里

先日、十一歳の娘に晩ご飯の仕度をたのみました。「これは生わかめだからサッといれるだけで食べられるよ」といってみそ汁の具のワカメをまな板の上にのせておいたら、切らずにそのままサッといれたのだそうです。

次の日、私がワカメを切っていると、「そんなにこまかく切るんだったの」と娘。「毎日のようにワカメのみそ汁食べてても、自分がやってみないと大きさまではわからないもんなのね」と私が言うと、七歳の息子が「だれでも最初は失敗するもんや、何回か失敗しているうちにできるようになるもんやで」

（一九八三・一一・一九）

平等法について

正路 怜子

＊日本中で〝平等法〟論争を

春には〝男女雇用平等法案〟ができるという。いますでに労使の対立点ははっきりしているのだから、あちこちでワイワイガヤガヤ大いに語りあって「男女平等」についての世論を高めなくてはならない。男女平等問題や働く婦人の問題について、何らの言うべき意見も持たない人は現代人ではないというくらいに嵐をまきおこそう。

私たちのせいなのか、日本の男女役割分担意識があまりにも強すぎるからなのか、婦人問題というと男には関係ないという人がまだまだ多い。よくドストエフスキーの小説などよむと、19世紀ロシアでのサロンの話題に婦人問題がよく出てくる。はたして日本の、特に男性の話題に「平等法」など出てくるだろうか？先日の日経新聞（58・12・3）の対談でも、差別撤廃条約を一九八五年までに批准しなければならないという国際的なとりきめにしたがって、つまり〝外圧〟によって仕方なくつくると経営者は思っている。

＊発想の転換を

全く日本の経営者の女性に対する見解のおそまつさは、日経連の意見書（女性団体の反対で実際には出さなかった）によく出ている。

いわく――終身雇用体制の下では、勤続年数が短く、いつやめるかわからない不安定な女子を男子と同じに扱うわけにはいかない。

では女子が長く働くことをのぞんでいるのだろうか。ノーである。26歳までは男女同一それ以後は2本立て賃金体系で差がどんどんひろがって、女はいつまでたっても低賃金だということはみんなよく知っている。また結婚・出産で女子の大半が突然退職するからと言っているが、やめざるを得ないように仕組んでいるのは企業側である。結婚しても社内報にはのせない、〝おばんはいらない〟、〝はやくやめろ〟、〝子どもがかわいそう〟など、いやがらせのあの手この手はいろいろだ。

裁判をやって昇格差別をなくした静岡銀行では、当時2年9カ月だった女子の平均勤続年数が2年後には5年1カ月になったという。つまり、働きつづけることに展望があれば、仕事がおもしろければ、誰もやめはしない。たとえ、保育所が少なかろうと、夫の協力が弱かろうと、そういう状況を変えていこうというエネルギーを持てるのだ。

さらに意見書は言う。平均的な女子を対象に考えるべきで、大部分の女子は家庭の役割分担を認めている。社会通念からかけはなれた例外的な女子など相手にしないと。国際婦人年以来、〝女は家庭・男は仕事〟という役割分担をみなおそうという声がたかまり、男の料理や男の子育てが話題となり、女子マラソンが興味の的だという変わりようなのに、この流れに真向から挑戦するつもりらしい。

さらにおどろくべきは、「男女平等をいうのなら、女子保護は妊娠・出産にかかわるもの以外は撤廃すべきだ。厚生年金の支給開始年齢も保険料率の格差も解消せよ。現状は過保護だし、残業や深夜業の規制によって女子を管理職に昇進させることができない」と。

これでは、男の子がだだをこねてるみたい。〝いいな、いいな、女の子は生理のときに休めて、夜中も働かなくていいし、厚生年金も5歳も早くからもらえて〟と。

月経は女にしかないし、しかもすべての人が休んでるわけでなく、著しくしんどい時にホンの10％弱の利用率である。そんなに言うほど資本家にとって経済損率はないはずだし月に一～二日休んだからといって男が損するだろうか。そんなにほしけりゃ、男性生理休暇を作って、家の整理でもやってほしいものだ。

深夜業だって、はたしてどれだけの仕事が真夜中まで働く必要があるのだろうか。人間は太陽とともにおき、夜は休養するのが体のリズムにあっている。男性も特別の事情のな

いかぎり、深夜労働はやめにして、昼間働いて十分食べれる賃金をかくとくすべきである。

厚生年金は、何で突然ここでででてくるのかわけがわからないが、すでに保険料等はあがっていってるし、はたして私たちの将来、年金がもらえるのかどうか、年金制度はガタガタだ。

管理職についてだが、はたして残業をどっさりやり、深夜業をしないとつとまらないものだろうか。もしそうなら、現在の管理職のあり方をみなおすべきではないだろうか。

ようするに、おとしめられていた"第二の性"である女性を男性と対等の立場におくことによって、世の中に新しい価値を生みだそうという非常に高邁な理想、人間としてあたりまえの基本的人権＝労働権の確立をめざすことなのだから、利益ばかり追ういままでの資本主義のあり方に対して、見なおしというか、反省する気がなければ決して"男女平等"は視野には入ってこない。

かしこい資本家なら、心ある男性なら、きっと"このいきづまった社会の変革は女性の活用で"と考えているはずだ。第3次産業やパートなどへの女性の進出をみるがいい。

＊だれのための"よき伝統"

たしかにこの平等法づくりによって、日本の"よき伝統"らしい終身雇用、年功序列―それは、女性を半人前とみなす悪しき家父長制の資本主義的利用――を、突きくずすかもしれない。会社にタテつかず、長くまじめに働いていればという"滅私奉公的"労働をつきくずすかもしれない。安定した同質の労働力を確保すればたしかに能率はいいかもしれないが、個性は殺され、いずれはいきづまる。自己を殺してしか生きのびられない管理社会への反乱は、病気や子どもの非行という形ですでにおこりつつある。

米家さんがスウェーデンレポートで"働けばちゃんと見返りがある。しかし、何かに頼らねば生きてゆけないとか、甘えたり怠けたりする者には厳しい。自立して地道に働く人たちの国"と書いているが、私たちの国は、全体の調和を重んじすぎて"よらしむべし、しらしむべからず"であり、あまりにも"個"が無視されすぎている。この平等法づくりを通して本当の権利と責任について、働き方についても考えてみたい。

もう一つ、労使の争点は、罰則つきにするのかどうかだ。法律を守る気があるのなら、罰があったってこわくないはず。採用から定年まで、ただスローガンだけで男女平等をうたっても効力はないだろうから、やはり違反したら罰則をつけるべきだ。さらに、機会の平等だけでなく結果的にも平等をめざすなら一定の特別措置や間接差別の禁止も必要だろう。国際婦人年北区の会がつくった"男女雇用平等法要綱試案"には次のようなことばがある。

置

"この法律施行後、10年間は新規採用については、特別の事情がないかぎり、すべての職種で40％以上は女子を正規に採用し、とくに世論形成に大きな影響力のある公務員や教師および新聞、放送、広告などのマスメディアの部門は50％以上をめざす"と。

"男女で生活状況、家庭状況、学歴、身体、容姿等で採用基準又は異なる結果になる基準（間接差別）を設けることを禁止する。たとえば、女子は自宅通勤にかぎる、女子は容姿端麗であること、転勤や残業を自由にできる人に限るなどは間接差別とみなす"

＊トラブル・メーカー志願

なんと楽しいことではないか。すべての分野に女性が進出することで、今までとはちがった世界が出現するだろう。それは、平和を、生きることを、愛することを何よりも大切にする社会なのだ。

法律ができても、国際婦人年の世界大会がひらかれても、きっとすぐには何もかわらないだろう。しかし、実効力あらしめるのは、私たちの日常的な運動だ。少しでもよい法律を作り、こんどはそれに魂を入れるべく、どしどし活用することだ。トラブル・メーカーとあだなされるかもしれないが、あちこちの職場から男女差別の告発がおこり、苦情をうけつけ、裁判をし、世論をかえていけるよう、いまから、私はてぐすねひいてまっている。

年収二百万円でも暮せる

神崎房子

〝国際婦人年北区の会〟の例会のひとつに、「年収一千万円も夢ではない」というテーマの集会があった。「一千万円を儲ける方法」と聞き違えしてやって来た公務員もあわせ、50人近い女性が集った。女性で年収一千万円もあるという人は特殊中の特殊で、近親者から譲られた事業でも継承しない限り、独力で一千万円の収入を得るという人はまず無いと諦めきって参加したが、たった二人とはいえほぼそれに近い人がいた。一人は民放勤務25年で、もう一人はフリー・ライターであった。くだんの公務員女性は「やっぱり民間でなくてはダメね……」と深い溜め息を吐いていた。

民間労働者の賃金は年収一千万円もあるかと思えばその一割がやっとという人もいて、両者の差は著しく大きい。野球選手のように、毎年自分の収入を企業のボスと交渉して決めるという人がいたが、何のことはない。一方的にボスに低賃金を押しつけられ、気に入らなければお払い箱というわけだ。

もちろん、パートやアルバイト、非常勤、二カ月更新などという人も少なくなかった。もう三十？才になるある婦人は、こうした不安定きわまりない労働条件の中で、更に一カ月十万円をきる低賃金で生活しており、この厳しいインフレの続く世の中で将来の見通しもなくどう生きているのか、他人ごととはいえ気にならないわけにはいかなかった。よく聞いてみると、以前ある大手企業で正式な安定した雇用関係を結んでいたのだが、結婚のため退職してゆく女性労働者たちの中で、いつまでも退職しないでいる状態がいたたまれず、結婚もしないのに退職してしまったらしい。このあとはパートしかないのが日本の労働市場だ。賃金形態は変ったとはいえ、日本はまだまだ「年功序列型賃金」である。配偶者や親など、頼る人を持たぬ中高年独身婦人などは、甘えを許されないだけ、どんな中傷や差別にもひたすらじっと耐え、今日を生きている。

日本の労働市場は若年時しか解放されていない。中途採用が存在しない社会なら、それがよくても悪くても、そこにしがみついて生きるしかない。せっかくの食える職業をこうしてふいにしてしまった女性労働者が少くない現実をみると、やはり「女は甘い」といわれても仕方がないのだろうか……。

いくら一千万円の収入があろうと、遠隔地の大学へ通う子どもへの支送り、予備校や塾などの教育費用、持ち家にあるローン、老後の貯蓄、老親への支送りや看病費用などをあわせると一千万円でもさして余裕があるとは言いきれず、昇給への希望は薄れ、インフレに追われている暮しを説明されると、低賃金でもいいから安心して暮せる生活が切望される。

「年収二百万円でも安心した暮しはできる」のテーマでもう一度話しあってみたい。生きている限り、どんな人にも公平でかつ欠かせぬ「住宅」「年金」「医療」「教育」の四点が社会的に保証されていれば、人は必ずしも年収一千万円を望みはしない。いわんや、一千万円のために「時間」と「人間性」を奪い取られてしまうのなら、一千万円はかえって裏目に出てしまう。この地球上には「人間の自由と解放」のために、生命を張った輝やかしい歴史があるのだから。

＊**国際婦人年北区の会**

第9期講座は「こんなに変わる女の仕事―平等法ができたら」で採用から定年までの職場状況を、弁護士と協力して外国と比較しながら話しあってみました。まとめパンフは3月発売。84年はいよいよ10期目、もう一度婦人問題の原点にもどる予定です。1月7日、8日一泊交流会で、今後の方針をきめます。希望者は神谷伸子まで（夜、(768)二七二二）

ミニパンフ在庫あり、一冊100円＋〒70

⑤女性と子ども⑦ゆれ動く女性像―男女平等をどうすすめるか⑧あなたお元気ですか―女性と健康⑨働く婦人の結婚・妊娠・出産

あら？不思議シンプル

グループのメンバーが代わると、また面白い発想や経験が味わえる。国際婦人年の申し子として、同窓会に一グループが誕生し、女性の就業、結婚、育児、老人との関わり、本人の老後など何でも良いから少しずつ皆で話し合って行こうという趣旨である。約一年間、大阪支部会のそのまた一つのグループでしたが、問題が各人から提出されるにつれて、その解決には、荷が重すぎることが判り、本部に助けを請うた。考えてみると同窓会は、魅力ある知恵袋の集団であるにも拘わらず、今までこの種の問題に会員一同が生き生きとした参加をしていない。この集団は、年令、職業、生活環境、そのまた各人の関わる人の相違から大変豊富な情報源である。おばあちゃまからは、沢山の体験談を聞き、また、若い人たちからは活気のある生活奮闘談が出る。時には大笑いをし、ある時は歯ぎしりを共にする。こうして四季折々楽しく集いつつ、知恵を出し合っている。お城の石垣でいうなら「ごぼう積み」のような感じで、グループの人間関係は作用し合っている。つまり、いろんな人が寄り合うと、種々の結合の仕方が生れ、各人が自分に適した関与をしている。

これまでの、印象深かったことを思いつくままに記してみる。

(1)、三才の女児の心。新聞読みの好きな母親に向って「お母さん、新聞ばかりみていると、男になるからやめてェ」と。悲しそうな顔をして頼んだ由。世の男性よ！ 子供はよく見ています。反省しましょう。家事の手伝いもよくしましょう。

(2)、さる名門校の先生方。トイレの掃除は女教師だけに当番があり、男性はしない由。男性はトイレを使っていないのだろうか。常識としては、自分の使ったものや場所は自分できれいにすることを教えるのが、学校だと思っていたのに。

(3)、他の名門校。昔、教師だけで忘年会を開いた。皆、ご機嫌。お開きとなった。さっさと帰宅しようとする男の教師たちに「この後かたづけは誰がするのですか？」女教師たちに向って「私たちも帰りましょう。後かたづけは用務員の仕事だから」

(4)、男性の多い某企業の重役。「男にお茶汲みをさせて、あなたは彼等を可愛想とは思いませんか。」

(5)、八十三才の老紳士。酒ぐせの悪い夫に嫌気が積もり、夫に「離婚しましょう」といったら、「離婚は男から云うものだっ！ 女にそんなことをいう権利があるか！」 今でも欽定憲法の世の中と思いきや。

(6)、生理休暇を実際に使用している人は、企業では大変少いらしい。自由に取れる環境ではない。法律で認められている今でさえ、この実績だのに、保護規定がなくなれば、将来どうなるであろうか。女子は生理休暇を濫用していないと思うが実態調査はないものか。某企業では、ボーナス査定に出勤率が採用され理由は何であれ休んだら、それだけ減らせれる。まるで小学生の算数。法律なんて怖わくない由。これが旧帝大の卒業生の発言。日経連の会長様へ。「経営者の資質は、決して貴方様のような高潔な人物ばかりではございません。いや、むしろ、前述のような本音をもった経営者の方が多いのではないでしょうか。現に、今の労基法が生きていても、有給の使用さえ理由を明記して申し出なければなりません。有給休暇の使用環境が、実に厳しい状況にある実態を御存知ありませんか。その挙句、病人が増え、健康保険料が上り、手取り収入が減り、不平がつのり、また、病気――何と効率の悪い経営状態でしょう。」

女性よ！考えましょう。こんな社会に絞られて改めようともしない夫たちに、どこまで協力しておりますか。人生って一体何でしょう。一度しか与えられていない機会です。何故もっと、心身共に健康な日々を送ろうと努力しないのです。朝早く出て、真夜中に帰宅する夫の仕事に疑問を抱きませんか。

某大手商社の欧州支店勤務の夫が、いつも夜遅く帰宅した。近所の主婦が心配そうに妻に尋ねた。「あなたのハズバンドは、会社の月給が少いので、夜警のバイトをしているのですか」と。

この社会は、男性だけのものではありません。女性も半分いるのです。熟年離婚率が上って来ている実態に、私は、先輩たちの忍耐と勇気に拍手したい。日本男性の質向上の良薬といえよう。満員の通勤電車でも坐っているのは若い男性が多い。年寄りや女性が押されながら立っていても眠ったふりをして座席を譲らない。その座席も整列して待っていた女性の後から素早く割り込んで獲得したものである。立派な背広が泣きますよ。夫のこのような通勤姿を妻はどう考えているのだろう。そのうち吾が身にも及びませんか。不思議だなあ、変だなあと思ったら是非話し合いましょう。

＊**山本和子さんにつづこう**

鈴鹿市役所で女であるために不当な昇格差別をうけ、これは地公法13条違反だと裁判をおこして11年、83年4月の名古屋高裁は何と敗訴。昇格は任命権者のお気に入りにだけという不当さ。くわしくはパンフ「続差別ある限り」をお読み下さい。

目下年賀ハガキ作戦。あなたも参加して下さい。あて先＝千代田区隼町4の2最高裁判所第二小法廷御中、中味は鈴鹿市男女差別賃金訴訟への公正な判決を訴えるもの。

"組合つぶし"の波の中で

平海ルリ

私がN社に入社した昭和四十四年ごろ、労働組合は強く職場は明るい雰囲気だった。私の配属されたのが経理部という、商社の中でも非営業部門だったということもあるが、午後三時になると社内放送で体操の音楽が流れ、皆が和気合々と体を動かし、体と神経の疲れをとり気分転換ができた（そういう光景も現在はどこの職場でもなくなった）。初めて生理休暇という制度のあることも先輩から教えられ、休むようにと指導してくれた。

〔婦人部の力で産休を八週間に〕

私は直接労働組合のことは何も知らなかったが、なんとなく、うちの会社の労働組合は強いんだなと感じていた。私自身は、五年程働いたら結婚して会社をやめるつもりにしていたので、洋裁、和裁と毎日おけいこごとに忙しく過していた。しかし入社して四年くらいたったころ、ふとした偶然で労働組合の婦人部役員をやらないかと誘われ、同期に入社した女性もいっしょだということなので、それなら一年くらいやってみようかと軽い気持ちでひきうけた。（今から思えば、会社はそのころから労働組合をなんとかしなくてはと考え、御用化の計画を練っていたようである）組合の仕事は思っていたよりたいへんで、毎日毎日夜遅くまで会議があり、タクシーで帰宅することもよくあった。昼休みもほとんどいろんな行事で忙しく走り回っていた。特に婦人部は、全体の取組みとは別に女性独自の要求がいろいろあり、本当に忙しかった。（ひとつの行事をするのにも、計画準備、総括、情宣等職場の組合員でいたらわからなかった煩雑さに追われた。）高度成長の波の中で、半ドンだった土曜日が、土曜休暇になり、完全土曜休日となり、賃金もどんどん上がっていった。

私たちは、母性保護協約の改善のために、ビラ作りはもちろん、現協約での時差通勤の時間に合わせて、それぞれ私鉄、国鉄の駅のホームの混雑ぶりを写真に撮り、パネルを作って団交に臨んだり、七夕の短ざくに要求を書いて組合の掲示版にはったり、その他いろんなアイデアを出し合って、妊娠中の時差通勤を朝夕三十分から四十分に延長した。そして産休を六週間から八週間に延長し、大きな改善を勝ち取ってきた。

一年でやめるつもりでひきうけた組合活動も、やはりたいへんな忙しさなので、次にひき受ける人がなく二年目もひき受け、三年、

四年とがんばるうち、大阪支部の専従をやってほしいと依頼され、誰もなり手がないのならとひき受けた。元来気がよくておっちょこちょいで、好奇心が旺盛な私がひき受けるはめになったのも、振り返れば当然だったような気がする。

毎日忙しく、たいへんな組合活動であったが、家族の反対を押しきり、香里団地で独り暮らしを始めていたので、気楽だったし、なにより組合で知り合った人たちは、皆明るく親切で、和気合々とした信頼関係で結ばれている実感があり、楽しかった。

しかし、私たちの職場だけでいくらがんばっても労働条件の改善には限界があり、政治も変えていかなければ、労働組合もない職場や、あっても会社が介入していて何もできない労働組合が多い日本の現状では、なかなか本当の意味での人間らしく働ける職場は作れないと、小選挙区制の問題や、母親大会参加等の政治的な問題にも取組んだ。（これが後に、大きく会社から攻撃された）。

会社による〝労働組合つぶし〟

私が専従になったころから、組合の方針や取組みに反対をする人が役員やリーダーに増えてきた。当然、民主的にやっているのだから、反対の人がいてもいいのだが、あまり職場集会にも出席していなかったような人や、もともと組合のことなどに無関心だった人が、いろいろと意見を言うようになってきた。そして四十九年の夏、組合選挙で、今まで役員のなり手がなく必死でいろんな人に頼み込んでやってもらっていた組合役員選挙に、対立候補がたくさん出て激烈な選挙となった。四十九年入社の男子社員は、特に大量に会社が労働組合つぶしのためになりふりかまわず反対意見を言わせたり、今の組合は共産党に牛耳られているという旨のビラを、何枚も名前入りで昼休み等に職場の机の上に配布したりした。

労働組合へ無名の組合攻撃と臨時代議員総会開催要求の投書が連日舞い込んでくるようになったのも、このころからだったと思う。職場では、会社側からの誘いかけと組合側からの誘いかけで、組合員の争奪合戦やら意見の対立やらで、険悪なムードが漂っていた。そして私たちは〝E氏メモ〟と呼んだが、職場からE氏が会社宛にR（レッド＝赤）とW（ホワイト）の社員を区別してWの社員には特別の配慮をしてほしいという文章のメモ書きや、組合員の色分けの名簿、そして人事部の管理職者の組合対策の文章等が持ち込まれた。明らかに会社の不当労働行為であり、ビラにも発表して組合員にも訴えたが、やはり会社の大がかりな組合つぶしの波の中で、労働組合は五十一年夏の選挙で圧倒的に票数をとられつぶされたも同然になった。私たちもかなり激しく抵抗したので会社はかなり手こずったようだが、組合員の心の中にも大きなしこりが残ったと思う。

バラバラにされた私たち——力を貯えなくては……

いろんな人間模様を見、修羅場をくぐり抜けてきた気がするが、その後海外に配転されたもと組合役員も、国内にもどっては来たものの東京転勤になったりしてバラバラにされてしまった。

現在、低成長時代の中で、TES（節約運動）やA／T（目標達成運動）等がさかんに行なわれ、営業にいる者はもちろん、非営業部門の人たちにも、いろんな合理化、しめつけが行なわれているが、労働組合は何の批判もできず組合なんてないも同然となっている。

それに対して、白けてしまって、無気力に会社に来ている人と、会社の方針に応え、がんばっている人とさまざまではあるが、あまり本心やうっかりしたことを言ったりしなくなっているので、職場は暗いムードでいっぱいだ。男性にとっては賃金が上がらないとは言え、世間並よりは高い賃金のため、女性にとっては独立生計を営んでいる年代の高い人が多いこともあり、生活がかかっているため皆、簡単に会社をやめるわけにもいかず、生き残りたいとがんばっている。

労働組合の選挙は、部長や課長に頼まれた人たちが当選し、民主的な組合作りを訴える私たちは力不足もあり、約九十名の本部代議員中二～三名しか当選しない現状となっている。このままいけば、大合理化案が出される可能性もあり、また大きな斗いの機会がある

だろうが、その時になって悔やしがらずにすむよう力を貯えておかなければならない。それぞれの仕事の密度も濃くなっており、しんどいことではあるが、厳しい現実を、大らかに、たくましく乗り切り成長しなくてはと思う。

働く婦人の家で一年

人見和子

働く婦人の家（勤労婦人センター）――勤労婦人福祉法に基づく施設で、全国に一七〇もあるのだが、婦人問題に長くかかわっている人たちにすらあまり知られていない。私自身、思いがけずも昨年九月に勤労婦人センターへ転勤になり、見るもの聞くもの皆はじめて、といった状態で一年がすぎた。

働く婦人の家を一口で説明すると「主として中小企業に働く婦人等の福祉の増進を図るため、地域におけるこれら婦人の福祉に関する事業を行う施設」ということ。社会教育施設の公民館や婦人会館でもなく、又、職業訓練校でもない。労働福祉施設である。「では何をするところ？」と問われれば答に窮する。何となく分かったようで、分からない。あれこれとやりたいことは沢山あるし、日々の仕事も結構楽しくやっているのだが、施設の本来的な機能というものが十分につかめないでいる。

大ざっぱだが、ここに働く婦人の家の紹介をして、皆さんのお知恵を拝借することにしよう。

そもそも、集団就職などで都市へ来た若年女子労働者の一つのよりどころとして作られるようになった施設で、昭和二十八年に神奈川県（川崎）と福岡県（八幡）にできたのが最初。三十年代には、桐生、倉敷、福井、岸和田、岡谷など繊維産業地帯を中心に九施設が、四十年代には五五施設ができている。四十七年に勤労婦人福祉法が制定されてからは、急速に建設がすすめられるようになり、現在では全国に一七四施設（五十八年度建設予定を含めて）ある。

大阪には大正区に市立勤労婦人センター、池田と豊中に市立働く婦人の家、岸和田に府立勤労婦人ホームの計四施設。（働く婦人の家のうち、一〇〇〇㎡以上の施設については勤労婦人センターの名称を用いている）また指定都市であるのは川崎（県立）、名古屋、神戸、北九州、そして大阪の五市だけ。大部分は人口の少ない地方都市である。

ここ十年で急速に施設が増えているが、必ずしも婦人労働者のための福祉施設の必要性が認識されるようになった結果とはいいきれない。むしろ、建設補助金の魅力によるものではなかろうかと思われる。

働く婦人の家ではどのような事業をするのか。労働大臣の定めた「望ましい規準」によると――

(1) 職業生活及び家庭生活に必要な知識及び技能の習得のための講習、実習等を行うこと
(2) 休養及びレクリエーションについて場と機会を提供し、並びに必要な助言及び指導を行うこと
(3) 勤労婦人の各種の相談に応ずること
(4) 家事の合理的な処理のための援助を行うこと
(5) その他、勤労婦人の福祉を増進するために必要な事業を行うこと

勤労婦人の数が特に多い地域に設置された特別の働く婦人の家（勤労婦人センター）では、前にあげた(1)～(4)の他、次の事業も行うこととされている。

(1) 勤労婦人の学齢児童に対して下校後の遊び、学習等の場と機会を提供すること
(2) 軽易なスポーツについて場と機会を提供し、並びに必要な助言及び指導を行うこと
(3) その他勤労婦人の福祉を増進するために必要な事業を行うこと

これらの事業を利用できるのは誰か。「働く婦人の家を利用し得る勤労婦人は雇用されている婦人のほか、求職中である婦人をも含

むものである。また、家内労働者および勤労者家庭の主婦については、勤労婦人に準じて利用させて差支えない」という。主婦の二人に一人が働く時代になった今、主婦も潜在労働者であるとして利用できる。つまり、婦人なら誰でも利用できることになっている。

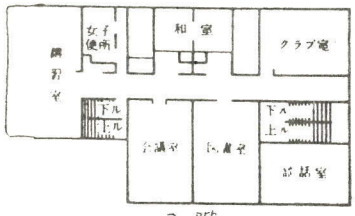
具体的に説明するために、私の勤めるセンターの状況を述べてみよう。全国一七〇施設それぞれに特徴があるが、平均的なところと思われる。

＜施設の概要＞

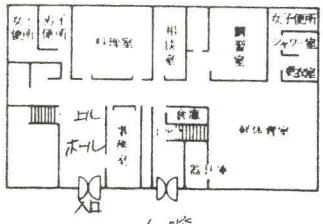
昭和五十一年五月に大正区老人福祉センター、大正勤労青少年ホームとの複合施設としてオープンし、今年で七年になる。

開館時間は午前十時から午後九時（但し日曜日は午後五時）まで、休館日は月曜日と祝日。運営は大阪市社会福祉協議会に委託されている。つまり、私の身分は社協職員ということ。

延床面積は一〇五三㎡で、建物の見取図は次のとおり。



2 階



1 階

＜主な事業＞

相談事業◆法律相談（第一・三火曜日）
生活相談（第二・四火曜日）
いずれも夜六時～八時。無料

職業講習◆前・後期に分け、簿記、調理師、珠算、販売士など資格取得のための講習。いずれも夜間。

文化教養講習◆フランス刺繍、茶道、華道、和裁、書道、婦人リズム体操は通年。手編み、家庭料理、ペン習字、洋裁、きもの着付け等を前・後期にわけて実施。一部昼に行う。

婦人生活講座◆婦人労働旬間にあわせ、五回の日程でジャーナリスト、弁護士、作家、医師、学者等の講演会。

レクリェーション活動等◆文化祭やバス・ツアー等のレクリェーション活動の他、ネクタイ、版画等の一日講習を適宜企画。

その他◆グループの育成、図書の貸出し等、行っている。

＜利用者の状況＞

昭和五十七年度の利用状況を見てみると、総数は一九、六八六人で、うち勤労婦人は六割強の一二、五四九人。利用時間帯では夜間（六～九時）が六八％を占めている。

年齢別では三十代が最も多く、あと二十代四十代、五十代と続いている。

地域的には大正区が六二％と圧倒的に多く、あとは各区とも少数ずつといったところ。

全国平均では勤労婦人が三五％、主婦五〇％だが、この点では大阪市は勤労婦人中心といえよう。

面白くもない文章を書き連ねて申し訳ないと思うが、「こんな施設もある。どうすれば活用できるの」と皆さんの心の一隅にでも残していただけたら有難い。

婦人問題に特別の関心を持っていなかった私だが、私なりに精一杯やった一年だ。悩みもまた多い。

働く婦人の家の目的にそった事業として、何を企画すればよいのか。利用者と共に作り上げていけるものは何か。はげしく動いている婦人労働問題の情報をどう提供していけるのか、逆にセンターの事業を広く市民に知らせるにはどうすればいいのか……等々。

館長を含めてわずか四人の職員で運営しており、思うことの半分も手をつけられないのが現実だが、利用者の雰囲気が変わってきているのは肌で感じる。「自分たちのことを話し合いたい」との声も出はじめており、私たちにとって大きな支えとなっている。「安くて安心できる文化教室」とのイメージだけは脱していきたいものだ。

皆さんも一度、センターにお立ち寄り下さい。ちょっと足場は悪いですけれど。

難波、野田阪神、大正橋から市バス「鶴町四」又は「西船町」行きに乗って下さい。大正からだと三つ目の「永楽橋筋」下車、すぐです。

Ⅳ 評論・エッセイ

安政生まれの新しい女 山下りん

尾形ゆき江

(一)

昭和五十六年六月のある日、私は茨城県笠間市の日動美術館の一隅で一枚の女性の写真に出逢った。ひきつめた髪、土の匂いのするふっくらとした頬、愛情深そうなひきしまった唇、その大ぶりの容貌には、強い意志と胆力とをそなえた男まさりの女性のイメージが現われていた。写真にすいよせられた私は、女性の略歴をむさぼるように読んだ。その女性とは、日本で初めての聖像(イコン)画家山下りん(一八五七～一九三九)であった。写真の側に山下りんの描いた「磔刑のキリスト」(81.5cm×41.5cm 模写 鉛筆と墨)、「拷問されるキリスト」(74.0cm×59.0cm 模写 鉛筆と墨)、「機密の晩餐」(27.0cm×48.5cm 油彩)、「聖母子とヨハネ」(45.0cm×31.5cm ラファエロの絵の模写 油彩)、「ヤコブ像」(70.0cm×50.0cm 模写 油彩)が展示されていた。傍らには山下りんが愛用した油絵の具箱、絵の具、パレット、筆が当時の面影を残したまま陳列されていた。

私は少女のころから西欧の宗教画にとても魅かれた。カトリック教会へ通ってカトリック要理を習い、西欧の宗教画のカードを集めた少女時代があった。四年前にドイツへ旅行した時もミュンヘンのアルテ・ピナコテークで宗教画を好んで観たが、中世の装麗な美しさをとどめている教会には特に魅かれた。東ベルリンでは、聖マリア教会、ライプチヒではバッハが合唱を指揮した聖トーマス教会、イエナの近くではナウムブルク大聖堂、エルフルトの教会、ドレスデンの大聖堂などを訪ね、そのステンドグラス、内陳、宗教画を念入りに観る機会を得た。

今まで私の触れた宗教画はすべて西欧の画家によるものであった。日本の女性がこのような西欧的な宗教画を描くなど、今まで聞いたことも観たこともなかった。山下りんの存在は少なからず私自身に驚きを与えずにはいられなかった。まして山下りんの描いた宗教画はイコンと呼ばれるものだったからである。イコンとは、見るための絵画ではない。ロシア正教の信者たちが心の目で観想し、黙想して神を体験する手段となる崇拝の対象となる聖像画をいうのである。画家を志した一人の少女が、いかなる人生の経路をたどってイコン画家として成長していったのか。展示場には山下りんの簡単な略歴が示されていた。

私はこの略歴を読み、まさに安政生まれの「新しい女」だ、と感動せざるを得なかった。

山下りんは、今から百年前にイコン画を学ぶためにペテルスブルグに留学したのである。ペテルスブルグといえば当時のロシアの帝都だから、水道は完備していただろうか。

私は十年ほど前にソ連のハバロフスクのホテルに投宿したことがある。その時でさえ、ホテルの劣悪な設備には辟易し、生水も飲めなかったのである。風土の違う異国で、当時の水道、食物、衣服の状態、修道院の冷たい石壁の僧房、イコン工房を想像すると、辛苦をなめたであろうりんの留学が思いやられてならなかった。

りんの生涯をもっと詳しく知りたいと思って小田秀夫氏著『山下りん』を求めた。それからは、日本洋画の揺監期に生涯イコンを描き続けた日本最初の女流聖像画家山下りんの伝記は私の愛読書の一冊となったのである。

昭和五十六年九月、茨城県立美術館で「初期洋画と茨城の作家展」が開催された。山下りんのイコンが展示されるというので水戸まで出掛けてみた。その会場で私は聖母とキリストを描いたりんの「至聖生神女」（138.0㎝×63.5㎝）を観た。赤茶色のマントに青い聖衣を着けたマリアが幼いイエズスを抱いている立像である。冠をいただいた細いりりしい崇高な顔ばせのマリアから東洋的な香りがただよっていた。りんはニコライが、「日本人には日本人画家の聖像画を」と望んだその師の希望と理想をみごとに絵筆に託し、東洋的なマリアを創造していた。またりんの師フォンタネージの「水遊び」を模写したデッサン、笠間日動美術館で観た「聖母子とヨハネ」、「機密の晩餐」を再び観たのである。

その年の十月下旬、私は笠間焼で有名な笠間に行ってみた。笠間稲荷神社への道を通って小田秀夫氏宅に寄せていただいた。そこでりんの遺品、硯、墨、水滴、青い石でできた十字架のついた金の鎖の衿飾り、工部美術学校時代のデッサン、スケッチ、浮世絵の模写、フレスコ画の模写、小さな滞露日記帖、小田氏が子供のころ、りんがお年玉などを入れてくれたという手製ののし袋などを見せていただいた。晩年は目が不自由であったにもかかわらず、のし袋には、わら半紙で編まれた赤い水引がついていて、「寸志　ヒイチャンへ」と書かれ、その下には、「山下のばばあより」とあった。

衿飾りについている青い石の十字架にはゴルゴダの丘を描いたような絵がモザイク張りにはめこまれていた。十字架の青さはそのまま孤高な人生をおくったりんの魂の静謐さを私に告げてくれた。また、洋半紙を細長く切って重ねただけの小さな滞露日記帖は、りんの必死な生き様を告げていてとても印象的であった。鉛筆の跡にはりんの涙がにじんでいるようであった。日本を発ってからりんは日記を欠かさなかった。手帖に日付、曜日、天気、簡単な記録を鉛筆で記した。ロシア語の綴りも見られる。工部美術学校時代のデッサンを見て、私はりんの素描力の強さに感服した。りんが生涯、イコン画を描き続けることができたのは、このみごとなすぐれた素描力によるものだと確信したのである。

翌十一月下旬、私はまた紅葉の佐白山を見に行った。りんが多感な夢をもって出奔した笠間盆地は佐白山、仏頂山、吾国山などに囲まれていた。今度は、小田氏宅の広い敷地内の離れにある晩年のりんの住んだ家を見せていただいた。広い庭には、春に椿、桜、しょうぶ、あやめ、しゃくやく、おだまき草が咲き、秋には、小菊が咲き、かえでが紅葉し、柿が色づき、冬にはさざんかの花が咲くという。「いつもこの縁側で東の方を向いてお祈りをしていらしたのだそうですよ」と小田氏の奥さまが教えてくださった。りんが水を汲んだ井戸があった。この縁側に座ってりんは、四季折々の草花をめでながら明治生まれの女性にしては、他の女性の何倍もの振幅の広い人生を生きぬいてきた己の人生を想っていたのだろうか。私も縁側に腰掛けながらりんの晩年をしのんでみた。帰り、暮れなずむ佐白山を見ながら私は、「りんは百年前にこの山を背にして歩き続けたのだなあ」と思わずにいられなかったのである。

（二）

山下りんは安政四年五月、常陸（ひたちのくに）国笠間藩の下級武士、山下重常の長女として生まれた。母は多免（ため）といって、近在の小田家から嫁いでいた。長男重房、長女りんに続いて生まれた

峯次郎は母の実家の小田家を継ぎ、後年その娘良はりんの晩年の世話をした。笠間稲荷神社近くの二軒長屋に住んでいた山下家は、文久三年に父、重常が死亡、時に重房十歳、りん七歳、峯次郎は三歳であった。りんの母は三児をかかえて生活の辛苦をなめたであろう。幼いころから母の苦労を見て育ったりんは、女性も自立する力を持たねばならないと身にしみたことであろう。明治四年の廃藩置県を迎えた貧乏士族の家庭がどんなにたいへんであったかは、おおよそ想像できるであろう。

「山下林りれき思出るままに」と題した和紙六枚の表、裏に筆書きしたりん自筆の履歴がりんの弟、峯次郎の孫小田秀夫氏宅に保管されている。

「余生来画を好む　然共郷里に良師なくむなしく過る　漸にして明治六年　妾の十七歳の折出京」

履歴の冒頭である。

当時鉄道などなく、山越えをするなどということは十五、六歳の少女にとって並大抵のことではない。年ごろを迎えたりんに縁談が起こった。山の中の農家へ嫁ぐ話であった。勝気なりんが、当時の農家の主婦として安住できるわけがない。朝早くから夜遅くまで陽にやけて働かねばならない農家の嫁になるには、りんは精神的世界を志向する人間でありすぎたし、また、農家の嫁になることはりんの自尊心が許さなかったのである。

行動的なりんは希望に燃えるあまり、明治五年家出を決行する。十五歳のりんは画業をめざし、笠間から東京まで百キロ余の道を、ほとんど身一つで歩き続けた。四、五日かかりようやく山下家の親戚、生沼家にたどり着いた。だがこの時は一旦連れ戻される。翌六年八月、りんは再びどうしても絵業で自立したい旨を話し、母を説得し上京するのである。

生沼家にいること五日、積極的にってを求めて浮世絵師国延方に一寸通ったが五日間位で中止する。またってを求めて、最後の浮世絵師といわれる歌川国周の学婢として住み込む。内弟子とは名ばかりで、住み込み女中のようなものであった。国周のところにいたのは四カ月ほどであった。入門早々のころより師の身の廻りの世話、家事労働に追われ、筆をとって絵を学ぶ余裕などほとんどないのが実際であった。

だが小田秀夫氏宅には相当の量の浮世絵が残っていた。薄美濃紙に毛筆で書かれた歌川様式の浮世絵の習画である。私もそれらを見せていただいたが、和紙に墨で描いた線は実にみごとなものであった。

履歴には「種々の難儀あり　誠に面白からぬ事草々に付　翌年の明治七年二月二日に日間とり生沼迄帰る」とあり、明治七年の五月には、円山流の月岡某の許に弟子入りしている。

「此時節ハ日本画大にすたれ日本画に而ハ中々今日生活に困苦し　先生ハ日々にうちわの画をかきて今日を過す程ニ而中々に頼みなき事となり」とりんの履歴の行間には、当時の画家の生活苦がのぞかれる。当時日本は西洋文化をとり入れるのに忙しく、伝統的日本芸術は捨ててかえりみられない時代であった。りんの絵の修業の目は一転して西洋絵画に向けられたのである。

「其外国苦を重ね望無ニ付　又翌年即ち八年二月に出て　此度は生沼帰県中故に中川（山下の親戚）に行　赤松玄陽氏の世話ニ而中丸に行　是は西洋画師也　乍併未タ此頃始しのみ八年三月上旬学婢に入　又々用事多忙にてひまなく　翌年二三月頃より中川方より通学す」

履歴に出てくるこの西洋画師中丸とは、中丸精一郎である。中丸精一郎は甲府出身、りんより七歳年上、川上冬崖の洋画塾、聴香読画館に入り洋画を学んでいた。りんは中丸の紹介で、小山正太郎、松岡寿らを知る。当時の西洋画家にとって、西洋画は全くの草創期で本格的な技術は暗中模索の時代であった。

新しい芸術の道に燃えていた若き画家松岡寿らは、りんに「オサンドン」という渾名をつけていた。彼らの情熱に触れて男性と対等に学べるりんは一層燃えていたことだろう。

殖産興業政策を推進しようとする工部省は、明治九年の暮、工部美術学校を設立した。当

時明治政府の雇用していた外国人五百人のうちの大半は工部省の雇用であった。工部美術学校の設立に当たり、イタリアからは洋画科教授のフォンタネージ、彫刻科教授のラグーザがやってきた。フォンタネージはすでに高名であり、イタリアでルカノ王立美術学校長まで勤めた人であった。日本の草創期の西洋画学生が人間的にも技術的にも優れた洋画家に教えられることは恵まれたことであった。

工部美術学校は明治九年一月男子生徒だけで発足し、翌十年一月女子の入学を認めた。履歴には次のように記されている。

「明治十年より工部省内へ美術学校開け女子部を十年一月につのる　此事を聞や爪立程に行度共　妾は元より学費の出なく、無念此上なく　たとへ試験の様子なり共見度と　無理に頼みて沼生（生沼の誤り）へ入学願書を出してもらう」

この「入学願書」が小田秀夫氏宅に残っている。

入学願書

私儀画学修業仕度候ニ付入学之儀奉願候也

茨城県士族常陸国茨城郡上市毛村
山下重房妹
本所北割下水二十九番地中川方
山下　里ん　㊞
拾九年九ケ月

明治十年二月二十三日

工作局長　大鳥圭介殿

印割　願之通聞届候事
十年二月五日　工作局

入学したくてたまらないりんの口惜しさと苦悩が伝わってくる履歴と入学願書である。

幸いにもりんは、旧藩主牧野貞寧から月謝として金二円をもらえるようになり、実技を含む試験にみごとにパスして晴れて画学生になれたのである。この時りんの他に入学を許された女子は五名であった。一足先に入学した師中丸精一郎、知友の小山正太郎、松岡寿らと一緒に勉学できるりんは、意気揚々として嬉しかったに違いない。

来朝当時五十八歳であったフォンタネージは、「洋画ノ要法ハ一ニ輪画ヲ正シク、二ニ設色ノ釣合、三ニ其画ヲ窓ノ中ヨリ天然ノ佳趣ヲ望観スルガ如ク常ニ思想シテ描ク可シ」（「牖フォンタネージ講義筆記」）と講義した。

当時の教材は、紙、絵具を初めすべてイタリアから取り寄せ官給された。人物、技術ともに優れていたフォンタネージは、画材、画具の使用方法からていねいに教えた。日本洋画の黎明期を築いた小山正太郎、浅井忠らはこうしたフォンタネージの許に育っていったのである。

教程の順序は石膏デッサン、風景写生、油絵による人物、風景写生と進められた。人体写生には裸体男子、着衣の女子モデルを使ったことは当時として初めての試みであった。

フォンタネージは、実技と並行して、遠近画法、風景画法、人物画法並びに技法の細部に関する講義を行った。

りんが工部美術学校時代に習得した技術は、後のイコン描写に大いに役立ったことであろう。

りんは、当時虎ノ門の工部美術学校まで、毎日六キロの道程を、本所北割下水の親戚中川家から通学していた。和服姿で絵の具箱を持っての通学はたいへんであった。

このころ兄重房は、上京して警視庁の巡査をしながらりんを援助していた。

明治十一年九月、フォンタネージが脚気にかかり帰国することとなった。私はフォンタネージ送別記念会写真のコピーを笠間日動美術館で見た。女子画学生の中には、ふっくらとした色気も出てきたりんと一緒に秋保その、神中糸子、山室政子、大鳥雛子、川路はな子らが写っていた。

フォンタネージの後任者は無名の放浪画家フェレッティであったが、人格、技術とも劣っていた。新しい師に失望した浅井、小山、松岡ら生徒十一名はまもなく退会した。りんの失望と怒りが見えるようである。山室政子、神中糸子も退学したが、りんはしばらくとどまっている。

このころりんは兄から生活費二円五十銭を仕送りしてもらっているが、なお生活は苦しくうちわの内職をしている。

明治十三年一月、フェレッティの任期が満了した。そのころ、兄重房は巡査を退め、事業に手を出したが山師にひっかかり失敗し、りんへの仕送りは途絶えた。りんはこのころ、昼はデッサンに励み、夜はうちわ画を描いた。

学校はりんの窮状を察して、月謝を免除し助手という肩書を与えたが、明治十三年十月りんは退学届を提出した。

涙ながらに退学したりんは、これからどうして生きていこうかと日々案じていたことだろう。だが、この年にロシア正教に入信していたりんには、絶望的な失敗感とか孤独感はなかったのではないだろうか。りんはこの時こそ神に救いを求めて祈ったことだろう。りんの洗礼名はイリナといったのである。

(三)

次にりんの運命を決定した信仰上の師ニコライについて触れたい。

ニコライ(一八三五～一九一二)は、俗名をイオアン・ディミトリウィチ・カサーツキンといった。

ニコライの父も村の教会の貧しい輔祭であった。ニコライは父に似て精神も身体も強靱で、敬虔なロシア正教の信者であり、勉強家であった。地元の神学校を首席で卒業した後一八五七年ペテルブルグ神学大学に国費給費生として入学を許された。

語学に秀れたイオアンは講義が終ると図書館で読書にふけるのが好きだった。

ある日イオアンは一人の人間の運命を決定する書物にめぐり逢った。十九世紀の初期、日本に二年三カ月の虜囚生活を余儀なくされたゴロヴニン中佐の著書『日本幽囚記』である。

この著書を通して、イオアンは日本人の勤勉さ、清潔好き、読書好き、勉学心の旺盛さ、清廉潔白な人種であることを知り、「ぜひ、日本への伝道に情熱をかけたい」という思いがわき上ってきた。

東方正教会は、初代キリスト教の伝統を厳格に守り聖堂内にはイコンのみ許され、偶像崇拝につながる彫像を厳しく排してきた。正教会はまた、それほど海外伝道には積極的ではなかった。だが青年イオアンは、シベリアの遠くの日本への伝道こそ、己の一生を捧げるにふさわしい仕事ではないかと思った。ある日、イオアンは友人の留守の部屋で一枚の書類を見た。日本の箱館に置かれたロシア領事館付主任司祭を募る聖務会院の布告書であった。今まで夢と思っていた、日本への伝道が、今、具体的な現実となってイオアンの胸を打った。

一八六〇年七月、イオアンはニコライという修道名を受け、その一週間後には修道司祭の職を授けられたのである。

その年の八月、イオアンはニコライ司祭としてペテルブルグから日本に向かった。唯一の足は馬車である。長い長いシベリア横断の旅が待っていた。ニコライは一台の四輪荷馬車でシベリアの広野を横断した。荷台に積んだトランクの中には父の渡してくれたハリストス(キリスト)を描いたただ一枚のイコンが入っていたのである。

ニコライは超人的な精神力と体力でアムール河を小舟で下った。そしてニコラエフスク港から日本に向かうロシア軍艦に便乗した。一八六一年(文久元年)六月十四日、ニコライは領事館の司祭として箱館(明治二年に函館と改正)へ到着したのである。当時弱冠二十五歳の伝道師であった。日本ではその四年前の安政五年に、日本とロシアの修好通商条約が調印されていた。

ニコライが来日したころはまだキリスト教は禁じられていた。だがニコライは必ずハリストス正教を広められる時期が来ると信じて疑わず、じっとその機会を待った。そのためには、まず日本語を知り、日本人を理解し、日本人の生活を知り、日本人を愛さねばならない、とニコライは思った。ニコライの日本研究は進められた。宿舎の書棚には、日本書記、大日本史、漢書、仏典、十返舎一九の戯作まで並べられていた。函館のニコライは着着と日本伝道の準備をすすめていたのである。

明治五年九月ニコライは、神田駿河台に移

り伝道の本拠を構え、集まってきた人々に神学とロシア語を教えた。

明治六年、ついにキリスト教の禁制が解かれたのである。明治十二年、ニコライの熱心な伝道活動は認められて、ハリストス正教会主教に昇叙されたのである。

ニコライはこれを機会に東京に一大聖堂を建立する念願を立て、寄付金集めのために本国へいったん帰り、明治十三年十月、再び来日した。ニコライは、日本各地に新しく建立する教会には、「日本人には、日本人に親しめる、日本人画家の絵筆によるイコン」がいいと考えていた。そのためには、唯か信者の中から絵画に優れた女性をイコン画家として育てねばならないと考えた。ニコライは最初、工部美術学校を退学した芯の強い山室政子を、ペテルスブルグに留学させる予定でいた。だが急に山室は幼なじみとの結婚に走った。安政五年生まれの山室政子は、明治七年十七歳の折に上京し、駿河台のニコライ神学校寄宿舎に入り、翌八年一月受洗した。山室が工部美術学校に入学したのは、彼女の画才を認めたニコライの勧めと期待があったからである。政子はりんの数少い友だちの一人であった。二人は貧苦にあえぎながら美術学校へ通った。そのうちにりんは信徒であった政子につれられてニコライ神父の許を訪れるようになった。りんが受洗したのは政子のすすめもあったからであろう。

後に政子は夫と一緒に石版印刷工房信陽堂を創設し、明治十三年九月には岡村政子に変った。

ニコライ神父の教えてくれるハリストスの教えは、孤独で生きてきたりんの心に染みた。今までりんがなじんできた神仏の信仰と違って、ハリストスの教えは、人間が神に善なるものとして創造されたことを強調し、この世を創造された唯一の神の僕として愛といつくしみを持って生きることを、ニコライは教えてくれた。

ニコライの雄弁なる説教、敬虔なる信仰心、ハリストスの信仰の世界には、りんがこれから習得しようとしている西洋画と同じように新しい世界が未来に向かって広がっていくような気がした。

西洋画の世界にもハリストスの教えにも、「りんが今まで生きてきた因襲的世界からの自立と新しさ」があるような気がするのであった。ニコライの温かい人間性と雄弁なる説教にいつのまにか魅きこまれているりんであった。りんはフォンタネージに次ぐ尊敬者をみいだし、これからの自己の人生に安堵した。

明治十三年秋、りんはニコライの伝道館の一室に呼ばれていた。ニコライは、ロシアの帝都ペテルスブルグで聖像画を学んできてほしいと話された。ニコライは、りんが工部美術学校で女生徒では一位の成績であったことを知っていた。

りんは履歴の中で政子の代りに渡航することになったいきさつを次のように記している。

「兼てより政子氏の美術学校にて妾同様の有□故に　露国に遣して　一勉強させんとの思召にて頼み来る所　政子はよからぬ方に行し事とて（略）俄に妾に洋行の諾有之し故よく聞く処　女子修道院なれとも其内に画学校は有との事故　又他より良教師の来り教るとの言に□てはうれしき事といさみ立」

「よからぬ方に行し事」は、結婚の形をとったとはいえ、政子が好きな男の許に走ったことを言うのだろうか。それともニコライの期待を裏切ったということだろうか。このころ、男まさりのりんにとって、自己の人生の情熱はすべて画家として独立していくための精進の道に向けられていたのである。政子の結婚は、りんにとっては、画家としての挫折であるように思われたことであろう。

当時りんはフォンタネージ、ニコライに次いで浅井忠を尊敬していた。結婚という形で平凡な夫の人生に付随した人生など、当時のりんには考えられないことであった。だがりんは尊敬できる男性を心の中で仰ぎ思慕し、それを心の支えにして己の道を切り拓いて生きたいと思った。浅井忠とりんとの間にどのような感情の交流があったのか解らないが、

浅井忠の名は渡航する際に持参した手帖に記されていたのである。

出発は十月に決まっていた。留学は五年の予定であった。留学は貧乏士族の娘にとっては嬉しかったが、それにともなう不安、恐れもあった。できたらロシア語も半年くらい習って行きたかった。あわただしく渡航準備はなされた。

旅券願

私妹リン儀

今般画学為修業向五ケ年間留学之見込ヲ以テ當明治十三年十二月十一日ヨリ聖彼得堡女修道院ユウストリヤ氏方江罷越度候ニ付旅券御渡方奉願候也

茨城県下西茨城郡笠間町二百四番地
士族小田峯次郎方同居本籍
茨城県士族　山下　重房
同　妹　山下　リン
東京府下本所区亀沢町壱丁目二十壱番地寄留

明治十三年十二月三日

外務省
御中

兄の重房は、遠い異国へ留学していく妹の「旅券願」をどんな思いで書いたことだろう。十五歳で故郷を出奔したりんが今度は、二十三歳で留学していく、止めても、反対しても きかない妹の留学を許す以外ないと諦めて筆を持ったことだろう。

りんはフォンタネージから習った西洋画の技術をさらに深められるものと信じ、己の人生の未来に洋画家としての独立を夢見てペテルスブルグに出発しようとしていた。

ニコライの「帝都ペテルスブルグで聖像画を学んできてほしい」という言葉を信じていたが、それがイコン画家になることであり、それゆえに自分の創造的画家としての道を断念することになるなど少しも予感することなく、りんは出発したのである。

ニコライの威厳と温かい人間性にうたれ、ただ尊敬の念を持ち、ニコライのいう、「ノボデーヴィチ女子修道院ですべてあなたのお世話をしてくれることになっています。安心してイコン制作の技術を学んできてほしいのです」という言葉をりんは信じたのである。りんの留学したノボデーヴィチ女子修道院は現存していない。（りんの留学先は、『われら生涯の決意―大主教ニコライと山下りん』の著者川又一英氏の調査による。）

（四）

りんをペテルスブルグの女子修道院までつれていったのはアナトリー神父である。アナトリーはニコライ主教の片腕と言われるほどの人である。その弟の聖歌教師ヤコフ・チハイも同行していた。ヤコフは日本人妻をつれていた。また夫妻には二人の子供がおり、四歳の長男は障害児で子守りを必要とした。りんはこの子の子守りとして長い航海に耐えねばならなかったのである。

明治十三年十二月十二日横浜を出航。二十日ホンコン着、ヴェトナム、サイゴンを経て二十八日シンガポールに到着。明治十四年の元旦を東インド洋で迎えた。コロンボ、アデン、アレクサンドリアを経てオデッサに到着。オデッサから列車でキシゲーフ、エリザベトグラードを経てモスクワへ。モスクワからペテルスブルグまで夜行列車に十五時間揺られる。

この船旅はりんにとって留学に際しての一番目の試錬であった。試錬は第二、第三、第四と待っていたのである。長い航海だというのにりんの部屋はなかった。船艙が休む部屋であった。見も知らぬ異国の下級船客の間で不安におびえているりんが見えるようである。

りんは昼間は子守りで疲れ、夜はエンジンの音で眠れず、船酔で呕吐は益々ひどくなった。食堂では船客たちが灯の下でおいしい料理にナイフとフォークを楽しげに入れているというのに、りんの席はなかったのである。食事を催促すると、神父は黒人たちの集まっている船の厨房の入口へつれていき、船客の食べ残しを食べるように言うのだった。口惜しさと憤怒のあまり、その時のことをりんは日記に次のように記した。

上中の人々のあまり物　嗚乎妾はこじき
嗚乎…如何に身ハ□ぬる迄もかかる所にて

いかて食事をなすべきと　ふんどの余り涙
さへ不出　鳴乎帰らんか　舟は只前進急な
るのみ　何を云てもを　前は金がナイトこ
た　へるのみ　鳴乎無念是より食をたつ二
三日　いろいろ我身を思ふにかく何事もヒ
アイのうちにのみしつむなれば　とてもか
くて我身はなき物と思入又浮せむもあらん
か只一ツのたのみにはコヲーカイ免状の有
をせめての□□さに　是より心ををにに
てよし死なば死ね　生きなば生きよ」

自尊心をずたずたにされた高邁なりんは、「心ををにに　よし死なば死ね　生きなば生きよ」と度胸を決めた。度胸を決め、死さえ恐れなくなると、りんは少しおちついてきた。日記帖に「サイゴンの景」、「シンガポールの女」などのスケッチも入れる心の余裕も生まれてきた。

留学が決まった時ニコライからりんは、結城紬と木綿の冬物の着物、各々一枚、夏物三枚をもらっている。アレクサンドリアで上陸したりんは、初めて洋服を買い、船内で試着し、「大ニキマリがわるシ」と記している。

また船内でイタリア人とオランダ人の男性二人に身体を求められた。とっさに男まさりのりんはくるりと後を向き、男を背に尻まくりをして撃退したということである。その時の恐しい体験をりんは日記に次のように記した。

「日曜日
九日　少々曇り　大ニシノギ安シ　前日と
同程也　此日遠山ヲノゾム也　海面大ニ清
シ　夜十一時々分イネル時ニ　イタリヤの
者及びオランダノ者トフシドニ来リ　金ヲ
以テ我ヲシタガエントス　我大ニイカル」

りんの日記には、「大ニカナシム」、「大ニイカル」、「大ニ悔ユル」という表現がよくある。「大ニ」という言葉に、りんが自分の意志をはっきり告げ自覚をもって人生を生き抜いていたのだ、というりんの生の姿勢がうかがわれておもしろいと思う。また反面、留学への旅が困難をきわめていたことを物語っているのである。

明治十四年三月十六日、りんは目ざすペテルスブルグの女子修道院へ入った。日本を発って三カ月目であった。だがここでの生活も、「大喜びにて出立なせしこそ、後には深きなげきに入るの糸口とは、神ならぬ身の知るよしもなき」と日記に記された辛苦の生活が待っていたのである。

りんが絵画を学ぶところは、女子修道院の中の聖像(イコン)画工房であった。絵画の学校へ通うものと思っていたりんは驚き失望した。修道院の中には、聖像画工房の他に彫金、繍金、裁縫、手工芸の各工房、食堂、祈禱室、聖器室、図書室、病室、医務室、尼僧たちの工房、来賓用客室、地階には、炊事場、野菜保存室、ペチカ、花輪や画布の制作室があった。りんに与えられた部屋は、鉄製の寝台、小さな机の置かれてある僧房の一室であった。磨き抜かれた床を踏み、白い冷たい白壁にとり囲まれた部屋に入ったりんは突然不安になった。

この索莫とした部屋に五年も耐えられるだろうか。ロシアの修道院に来たけれど、知った人は一人もいない異国で、何一つ言葉の通じない世界に今、自分は立たされているのだ、とりんはひしひしと孤独感を感じたのであった。

翌日からりんの聖像画工房での修業生活が待っていた。りんはさっそく日記を続けた。三月の日記を繙いてみたい。

十八日　此日九時より画ニ取カカル也
廿二日　此日よりヤソノ画ニトリカカル
廿三日　終日画ヲカク　此日形ヲトル
廿四日　午前形　午後よりヌル也
廿五日　二時半迄画ヲカク
廿七日　終日イリサバチノ画を画ク
廿八日　終日イリサバチノ画ヲカク

イリサバチはエリザベタのことである。エリザベタはヨハネの母に当たる聖人である。

工房では、ゆるやかな僧衣の上に踝まで届く前掛をかけて、他の尼僧たちと一緒に聖像画を描いた。聖像画は、教則本や下絵を参考にして描く場合と、模写によって描いていく場合があった。ローニヤ尼は、初めて聖像画を描くりんに聖エリザベタのイコンを模写するようにと、りんに与えた。

工房には、美術アカデミーの校長をしてい

るヨルダンが教えにきていた。りんはフォンタネージの指導を思い出し、ヨルダンの指導に不満であった。イコンを描写する際には、写実や陰影法は極端に否定され、威厳さと柔和さを備えている目と目の周辺から放たれる内面的な光が重要視されたのである。

五月三日の日記には、「夜ロヲソクヲクレザルニ困リ大ニかなしむ」とある。夜の灯となるローソクがもらえず不安なりんの顔が見えるようである。五月十四日には白夜に驚いたようすが記されている。

復活祭が終り、聖女イリーナの殉教記念日である五月十六日がきた。イリーナの聖名を持つりんの許に、尼僧たちから果物、小皿、茶碗、石けんなどの贈物が届いた。この日はりんも工房を休んだ。ロシアへ来て以来初めてりんは笑った。この日りんの部屋からは華やかな尼僧たちの笑声がもれていた。その時の尼僧たちの会話から、りんはエルミタージュ美術館の話を聞いた。エルミタージュ美術館は、代々皇帝の手で欧州各国から蒐集された美術品が陳列されているのである。りんはぜひ一度ロシアの宝物館に等しいその美術館の中の絵画を観てみたいと念願するようになり祈った。

六月中旬、りんは突然、アナトリー神父とともにフォードル神父につれられてエルミタージュ美術館を訪問した。ネヴァ河に沿って建つエルミタージュ美術館は、日本にいては想像もできない規模の大きな絵の宝庫であった。

一階はエジプト・アッシリアから発掘された品、古代ギリシア・ローマの彫刻、壷、中世の武具甲冑などが陳列され、二階には、二十を越す広大な部屋が絵画で埋めつくされており、オランダ、ドイツ、フランス、スペイン、イタリアの巨匠たちの絵がずらりと陳列されていたのである。

りんはレンブラントよりも、ボッチェリイー、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロの絵画に感動した。中でもラファエロの「聖母子とヨハネ」の前では吸いよせられる感動を覚えた。今まで観たこともない西欧の宗教画であった。ラファエロの絵からは優美さと気品がただよっていた。感動のあまり、りんはふるえながら、習いたてのロシア語で、「神父様、エルミタージュで絵を勉強することはできませんか」と聞いてみた。りんの強い意志と勇気のあらわれである。神父の解答を得られないまま、再び、工房での生活が続いた。聖像画の描き方は形も色彩も厳格に定められていたのである。

聖像画はどうして自由に描けないのだろう。イコンといえども、遠近法を用いて自由に描きたい、とりんは思った。

ラファエロの構図、色彩感覚、技法に触れるとフォンタネージに教授してもらったことが思い出されるのであった。ラファエロの絵には優美さ柔和な気品をたたえた人間のぬくもりが香気となって立ち昇っているとりんは思った。それに比べると、聖像画はまるで「おばけ絵だ」とりんは思わずにいられなかった。

八月末、りんは再び、エルミタージュ美術館をくぐることができるようになった。念願の美術館通いが可能になったのである。その時、りんは学芸員に迎えられて「ヤコブの像」の前に案内された。りんは「ヤコブの半身」を模写することにした。その日からりんには、婆やか尼僧がつきそってエルミタージュへ馬車で通えるようになった。どんなにりんはハリストスに感謝したことだろう。

次にりんは、ラファエロの「聖母子とヨハネ」を模写することになった。

模写が終ってほっとした時、りんは十五歳で故郷笠間を出奔した自己の道はラファエロの絵とのめぐり逢いへの道に続いていたのだ、としみじみと思わずにいられなかった。

西洋画に憧れ、西洋画を習得して一人前の洋画家になりたいと精進し続けた道は、イコン画習得の道に続いていた。りんはこのころ、自分の一生が独身であることの覚悟をしていたのである。イコンを描きながらもりんは、日本で女流画家として活躍できる日を夢に描いていたのではないだろうか。模写したラファエロの絵を、りんは生涯自室に大切に飾っ

て青春の日の形見としたのである。

りんのエルミタージュ通いは続いていたが、十一月二日突然、りんはエリミタージュ通いを禁止されたのである。

他の尼僧に混って命じられた聖ニコライ像を白い画布の上に形どる、という聖像画工房生活が、また始まった。エルミタージュでりんを魅惑した、優れた技法の絵の数々がしのばれてならなかった。

りんは、聖像画も西洋画の一つにすぎないくらいに簡単に考えて、西洋画の修業のつもりでロシアまで渡ってきてみたが、この修道院ではイコンの他は絵と認めないかのように、他の絵の模写は許されない。これから先の長い歳月をどうしよう、とりんは不安で食欲もすすまなくなった。

エルミタージュ行きを禁止された時、りんは尼僧に向かって、「エルミタージュでの絵の技術の習得は、聖像画を描くのに大いに役立つと思うのですが」と言ってみた。だが尼僧は、「イリーナ、エルミタージュには聖像画の手本になるものはありません。手本になる絵は、この修道院の聖堂にあるのです」と冷たい答えが返ってきたにすぎなかった。聖像画を学びたくないのなら、他のお金のある留学生を呼んでもらうよう、ニコライ主教に手紙を書きます、と尼僧に告げられては、もうエルミタージュに通えないりんであった。

眠れない夜が続いた。工房の尼僧たちとの間は気まずくなった。ロシア語を教えてくれていつもお茶をご馳走してくれた一番親しいウベラ尼からも冷遇された。工房の尼僧たちも口を聞いてくれなくなった。エルミタージュ通いは、尼僧たちとの対立をまねいてしまった。当時の修道院に入ってくる女性のすべてが敬虔な生活と霊的体験のための環境を求めて入院してくるとは限らなかった。

当時、何人もの息子、娘をもった上流階級の家庭では、嫁資を与えることのできない娘を修道院に送り込んだりした。修道女は、特に貴族やジェントリーの家の者が多く、下層階級の貧しい娘が修道女であった例はあまりなかったということである。修道院とはいえやはり女性の葛藤もあったのである。

りんは泣きたいほど不安になった。ベッドに臥している日が多くなった。工房では、突然、頭痛、倦怠感に襲われて立っていられなくなった。酢っぱい黒パンは益々酢っぱく感じられ、食欲のないまま呕吐が続いた。りんは粥がなつかしかった。全身にじんましんも出た。だが医師は病気でないと診断した。外は凍てつくような酷寒の冬であった。

そんなある日、りんは夕べの祈りを終えた後、聖堂で一人、典礼祭儀の献香やろうそくの煤煙によって暗褐色にすすけた「生神女聖像画」のお顔をじっと見つめていた。するとイコンのマリアは、「イリーナ、修道女にとっては祈りが、家庭婦人には子供を育て夫に献身的に尽くすことが天命であるように、あなたにとってイコンを描き続けることが天命なのですよ、天命であるからには、必ず道は開けましょう」と呼びかけてくださっているような気がしたのである。この時からりんは一生聖像画家として生きようと決心したのである。

だが、翌年一月五日、思いがけず政府から正式にエルミタージュで模写を許可する旨の通知が届いた。苦悩のあまり、「病ノスデニシヲ待ツノミ　何の楽も無シ」と日記帖に記したりんにようやく道が開けるようになったのである。その後の一年間りんはノボデーヴィチ女子修道院で聖像画の修業を続けたのである。

（五）

二年間の留学を終えてりんは、明治十五年三月七日、ペテルスブルグを出発した。ベルリン、パリを経てマルセイユに至り、三月十八日の船で日本に向かった。明治十六年四月二十八日、りんは横浜に着いた。

帰国してからのりんは、ニコライ女子神学校の敷地内の二階建の家に一日中閉じこもり、身を浄め、黙想しながらイコン製作のためにエネルギーを注いだ。イコン製作で一番難しかったところは顔であった。イコンに描かれる顔は、人間の美しさではなく、長い間の自己浄化と恩恵により神と一致した者の顔である。当時のりんには近寄りがたいものがあったといわれる。ここでりんは全国各地（主に北日本）にあるハリストス正教会の聖像画を

描き続けたのである。

明治二十四年三月ニコライ聖堂が竣工した。りんはイコン画家ベセホノフの助手として大聖堂聖障のイコン制作を終了した。この時、りんは生き生きした人間の表情さえ描かれたベセホノフの新しいイコンに希望を見い出した。伝統と規範を守りながらも、「山下りんでなければ描けぬようなイコン」を描いていこうとりんは思った。

この年の四月下旬、来朝したロシア皇太子ニコライに、りんは「救世主復活」のイコンを献呈した。

多感な青春時代、フォンタネージに教わった技法を断ち、聖像画のみを書き続けるということは、並大抵のエネルギーと忍耐力が必要であったことだろう。また画家にとって毎日同じ構図の画面をくりかえし描くことは苦痛なことである。

りんは、「日本人には、日本人の手による聖像画」が必要だというニコライの考えに共感し、東洋的な顔ばせのマリア、漢文の聖書、花なども自分の好みを入れて絵を完成させた。

初めてロシアへ留学して聖像画を見たりんは、それを「おばけ絵」といったが、晩年は工夫を加えたりんなりのイコンを描ける余裕も生まれたのである。りんは祈りながら一枚一枚、黙々と描き続けた。描き続けていくうちに若い頃持っていた野望もすっかり消えていた。絵筆を持つことに疲れるとりんは、疲れをいやすために酒を買いに行った。

明治四十五年二月十六日、師ニコライは七十五歳の生涯を閉じた。りんは、ニコライの死と同時くらいに白内障を患い、しだいにイコン制作より遠ざかった。

大正七年、六十一歳のりんは、郷里笠間に帰り、弟峯次郎の家の敷地内に小さな家を建ててもらい隠棲した。一生涯、駿河台の正教会で一生を終りたかったに違いないが、ロシア革命で正教会の資金源が絶えたため、やむなき隠棲であった。

りんは近所の誰にもロシア留学のことも、ニコライのことも、聖像画制作についても語らなかったらしい。近所のお婆さんがおはぎを重箱に詰めて持ってきてくれると、りんは重箱の四隅についたあんを人差指できれいにして返したという。小魚の骨まで焼いて食べるほど、ものを大切にする人でした、と小田氏の奥さまは話してくださった。独身者にありがちな頑固なところもあったという。夕方になるとりんは、酒を二合ずつ買いに行くのが楽しみであった。淋しいから酒を飲むというのではなく、酒を飲むことが楽しみであったのだという。近所の人がお見舞に行くと、枕元には一升瓶がずらりと並んでいたといわれる。りんの晩年は全く自然を相手の生活であった。それは天命をはたし終えた安らかな生活であった。

昭和十四年一月二十六日、りんは八十三歳の天寿を完うした。

現在、りんのイコンは全国のロシア正教会に百五十余点あるといわれる。小田氏夫妻は、りんのイコンを求めて、函館正教会、須賀正教会、北鹿正教会、札幌正教会、高崎正教会、足利正教会などを訪ねられた。そして今もその聖画巡礼は続いているのである。なお、ご夫妻は、エルミタージュ美術館にも足を伸ばされ、りんが模写した「拷問されるキリスト」の原画を確認しておられる。その際、「まるであの世からおばあさんが、ほら、ここにもあるよ、と教えてくださっているようです」と優しそうに小田氏の奥さまは言われて微笑まれた。

森鷗外は「伊澤蘭軒」の中で、「新しい女」について次のように記している。

たかの性行中より、彷彿として所謂新しき女の面影を認むるであろう。後に抽斎に嫁した山内氏五百も亦同じである。此二人は皆自ら夫を擇んだ女である。わたくしは所謂新しき女は明治大正に至って始て出でたのではなく、昔より有ったと謂ふ。

ここにその一端がうかがわれるように、鷗外のいう「新しい女」が己の人生を自ら切り開いていく女性であるならばまさに、山下り

んは「新しい女」の先達ではないだろうか。

現代社会では、特に第二次世界大戦以後、女性にとっても「学問の場」、「芸術の場」、「職業の場」での活躍の道が開かれるようになった。まだまだあらゆる分野に男尊女卑の思想や言動、視線が強く残っており差別されることはあっても、現代女性の人生には選択するという自由と権利が与えられている。あらゆる価値観が激変した明治時代では、ほんの一部の恵まれた人を除いては、女性の自立、自我の確立ということは、まだたいへん困難な時代であった。そういう時代に己の意志を貫き果敢に己の人生を切り開き、イコン画家としての生涯を完うした山下りんのゆるぎない強い意志と行動力とに、私は敬服せざるを得なかったのである。

（石岡市在住、詩人）

（本稿の執筆に当って、小田秀夫氏著『山下りん』に負うところが多かったので、ここに感謝の意を表したい）

（参考文献）

小田秀夫著『山下りん』（日動出版部刊、昭和五二・六）

川又一英著『われら生涯の決意』（新潮社刊、昭和五六・三）

高橋保行著『ギリシャ正教』（講談社学術文庫、昭和五五・一二）

茨城県立美術博物館編集『初期洋画と茨城の作家展』（茨城県立美術博物館刊、昭和五六・九）

古谷功著『イコン』（あかし書房刊、昭和五三・八）

れふぁむ例会レポート

＊55回／10月23日　高槻の正路宅にて

スウェーデンに行って意気軒昂の米家さんのスライドとレポート。2月にひっこしした正路宅の2階のせまい部屋に次々とおしよせて総勢22名、スライド上映は毎日放送の今田忠七郎氏、この旅行団の黒一点、解説にはおとなりの日吉台に古くから住む向田さんも加わって。美しいスウェーデンの町、保育園や老人たちの住まいそして東ドイツのブーヘンワルト収容所などにみんなうっとり、結局5時まで話しつづけて、いざ討論になるとそろそろ夕やみせまるころ。

私はお茶くみにいそがしく1階と2階ののぼりおりですっかり疲れはて、どんな話が交わされたのやら。

6時には大阪帆船まつりとかで、松野さんも神崎さんもテレビの前に陣どり、わが家のお姑さんとべちゃくちゃ。

藤さんと米家さんはさらにおそくまで居残って"はたしてスウェーデンのような福祉国家が日本にできるのか。日本は世界2位の経済成長だというが一人一人の所得は少なく貧しいのだから"と論争は果てしなく、おいしい辛子明太子をおかずに夕食がすんでもまだ続くのでした。

初参加は、西原、向田、藤原、吉田、今田さんでした。

（正路）

84年度例会のお知らせ

＊2月5日（日）一時～五時　華麻衣にて

れふぁむ17号の合評会と新年会

荒井由美子さんのフラメンコなど目下準備中です。軽食つきで楽しくやりたいと思いますので世話人をひきうけて下さい。

問いあわせは正路怜子まで（0726／87／8797）

華麻衣＝大阪市淀川区新北野一の十一の二三　ハイム北野　電06／304／2785

れふぁむの財政

この会は会費もなく場所もあちこち持ちまわり、もちろんレポートする人にお礼を出すこともなく、お金はちっともかかりません。例会にきた人から二百円うけとり、百円はへや代に百円は事務局費にして、例会案内のハガキ代にしています。

でもミニコミづくりにはお金がいります。印刷にきりかえた8号からはずっと一〇〇〇冊つくっていますので、いまその在庫がダンボール2箱ほど。といっても11、13、14、15が一〇〇冊と16が二〇〇冊くらい残ってるでしょうか。

まわりの人に一人でも二人でもすすめて話の輪をひろげて下さると経済的にも運動的にもいちばんうれしいのです。いまのところ、20号までは正路がスポンサーで、その後毎号編集長をかえてはどうか、お金も独立採算にしたらなどと考えてはみるのですが。

乾いた街の夢―シュール・レアリスム絵画―

土倉智美

私の住んでいる所は千里ニュータウンの端で、この二、三年竹ヤブがどんどん切り崩されていくのを目の当たりにしている。そのうちニュータウンの端というのはなくなって、オールドタウンを島とする海ができるのだろうけれど。

今年の春、バスで最寄りの地下鉄の駅まで行った時のこと。駅からふた停留所前はそのオールドタウンの残っている地域だが、ここしばらく大きなクレーンが林立していたあたりに大高層住宅が完成していた。「ハイム○○」または「○○ヒルズマンション」として入居者募集中くらいの時期だろうか。朝靄の中に立つ、陰影に富んだ無人のかっ色の立方体の群れは長い影を曳いていて、もし輪まわしをする少女の影と交差するなら、キリコの絵そのままというふうだった。瓦屋根とこんもりした木立ちの点在する村落を見おろして建つ住宅群のシュールレアリスティックな姿を、一瞬私は美しいと感じた。

そして、九月、私はあの建物をバスの中から見た。もう入居者募集中でもなく、どの窓からも蒲団が、シーツや毛布も上に集せて、ベーッとたれさがっていた。まるで、巨きな口が汚い物をはき出しているかのように。

この日「シュールレアリスムの巨匠たち展」（一九八三年八月二四日～九月一二日大阪梅田大丸ミュージアム）を観た。

窓辺のテーブルに一本の棒パンが置かれている。念入りに描かれたテーブルの木目も、ほどよいパンの焼け具合も目には日常的なものだ。画面をL字型に区切って窓のむこうには、青い山並みと星空。何の変哲もない物の組み合わせから生まれる一種のショックを感じて私は立ち止まる。（ルネ・マグリット「未来」）そこにあるのはあこがれのようなもの。

窓はまた、私を街から隔てるもの。眠りから醒めようとする見知らぬ街の上空に、パンとグラスだけが重力から自由になる。（ルネ・マグリット「物の力」）

外に出て、まだ明るい空のもと、なつかしくも暖かい家にたどり着けば、窓から見えるのは夜の光。水面にも光の反映。（ルネ・マグリット「光の帝国」）

概してシュールレアリスムの絵には、夢の中のできごとめいた情景が多い。しかし私たちの見る夢の、奇妙につじつまの合った現実的なそれとは異なって、乾いた夢である。

サルバドール・ダリの「風景」では、水面にも似た荒野のかなたにそびえ立つ岩陰からまた細工をほどこしたオブジェと木の股とに張りめぐらされた布のうしろから、誰も山に来る気配はない。牛乳の入ったコップを捧げる婦人靴だけが人待ち顔だ。

乾いた夢には人間がいない。そして空はあくまで青く、雲はいつも典型的な雲の形。丁度いいあんばいに散らばっていて。

夢から醒めて覚えるのは内にある郷愁。しかし停車場の到着と出発の心を騒がせるざわめきもなく、人形のように同じ貌の女たちが駅で待つ。（ポール・デルボー「青い電車」）女たちは裸で散歩し、敷石に置いたベッドに憩う。花咲く街路樹に沿ってレンガ造りの家が並び、遠くを走る汽車と煙は空に貼りついている。（ポール・デルボー「春」）

異質なものを同じ画面上に組み合わせることも、シュールレアリスム絵画の特技のようだ。実際にはない状況をありそうなものにしてしまう技。そのことで日常世界の裂け目から非合理的世界が幻のように現われる。また、マグリットの作品のように、日常的なものの取り合わせから生まれる日常世界へのショックも、ひとつの技。

日々の現実を追いかけ、そこに埋もれて暮らす私には、こういった方法は身近かだ。見慣れた部屋の見慣れた家具が、よそよそしく感じられる時があるのだから。

そして、それとは反対に、巨きな口からはき出された汚物のようなあの物は、時が経ち建物とそこに住まう人々との間に、何ほどかの物語が生まれるようになった時、非合理の世界を幻想させることを止めるのだろうか。その時には、木々に囲まれた平穏なオールドタウンに調和するのだろうか。

ウェンツェル婆さんへの道

岩田典子

尾形さんもアメリカの詩人、エミリ・ディキンスンが好きだ。突然電話があって、出向いた喫茶店で、彼女は会うなりディキンスンの詩行を指さし、矢継ぎ早に質問した。初めて会うという感じではなく、何かを必死に探しているといった激しさがあった。因襲的な時代にあって、自我を主張し、新しい詩の創造にかけた新しい女、ディキンスンを好きになるわけだと、私はその時圧倒されるおもいで彼女を見つめていた。

ディキンスン論も入っている彼女の随筆集『わたしの生田花世像』に続いて出た第一詩集『エルベ河のほとり』にも、その熱気がこもっている。欧州旅行をした十二日間の旅の詩が、詩集の前半分を占める。このことに初め唐突な感じをうけた。キリストとか、カタカナの外国地名を並べた詩行に、私が馴染めなかったからである。しかし読み進めていくうち、ここに彼女が詩を書く原点があることが解ってきた。

後半部に収められている詩「菜の花のある風景　I」には、カトリック幼稚舎の保母をしていた二十歳頃のことが書かれている。その頃の体験が、彼女を今もキリストに目を向けさせるのかもしれない。喀血した彼女を見舞った二人の修道女が、詩を書く彼女に、文学など「なんの救いになりましょう」と笑う。遠ざかっていく「誇り高いシスターたちの後姿」を見つめながら、彼女は「ぬけ出されたイエス様も／輝きながら／遠ざかってゆかれたのです」と思った。

宗教に救いを求めた彼女は、差し出した手を、何度も拒まれたことがあるようだ。というより、救いを求めておきながら、近づいてきたイエスを彼女の方が拒否した、といった方がいいかもしれない。しかも「遠ざかっていく」イエスに、彼女はまた手をさしのべ、助けを乞う。そしてふりむいたイエスを、拒む。どうしても最後のところで神を見つけられない彼女は、そこから詩をはじめる。彼女にとって、詩とはそういうところにある。

だから結婚して三日間、停電した新居でローソクをたよりにとった二人の夕食を書く「一夜」でも、「この焔の前で　たくさんの生と死と／祈りを見てきた修道女　修道士だったことを夢想する」ことで、イエスに手をのばす。しかし自分たちを「修道女　修道士」として「夢想」せずにはおれないこの新婚夫婦が、実際、どれほどの緊張関係にあるかは察しがつく。二人は「この魂の高みにいざなう光のそばで／夫婦となった」が、「スープをすする」という日常のなかで、自分たちの生きる場を探すしかないのである。

北国、新潟に生れ育ち、「聖なる自我」を探し求めて詩を書き続けた尾形さんは、結婚して茨城県に住むようになった。そして結婚してまもなく、一人で参加した欧州旅行は、観光のためではなく、これからの彼女を探す大切な旅であった。

旅行中、イエナで「ウェンツェル婆さん」に巡り会う。尾形さんは「婆さん」に理想の女性像、人間のあるべき姿を見つけた。「愛嬌ある小肥りのウェンツェル婆さん」は、シラーとゲーテの往復書簡や作品、「巨星の燃える言葉　聖なる自我を」、「町人たちの手紙小包／季節の果物と一緒に背負い」、運び続けた。

腐れた林檎の匂いのする
シラーの手紙を運ぶ時
エプロン姿のウェンツェル婆さんは
詩人の肺患と痙攣の発作さえも
軽々と背負い
冷たい足を厚い靴下に包み
凍てつく冬の道で
毎日　郵便物馬車に追越され
歩き続けた

一生涯　歩き続けることで
孤独感を克服した

ウェンツェル婆さんは
後世の人々から
古典文学の運搬人と言われたが
世界的文化を運んでいるという
思いもないまま
独身の生涯を閉じた
（「ウェンツェル婆さん」結び二連）

これからも詩人としての尾形さんの魂は、「独身の生涯を閉じた」といえるほど、詩の荒野をさまようことだろう。「凍てつく冬の道」を、少女のようなういういしさを失うことなく、「歩き続ける」だろう。

＊尾形ゆき江さんの本をぜひおよみ下さい。「わたしの生田花世像」は六〇〇円「エルベ河のほとりで――尾形ゆき江詩集」は国文社刊、一八〇〇円で、いずれもとても素適な本です。注文は、茨城県石岡市東光台5の3の5須藤方　尾形ゆき江、電話〇二九九二一六一四五三三です。

村上信彦さんとの出会い　三木草子

女性史研究家の村上信彦さんが亡くなられた。ガンの転移で入院することになったと、昨年出版された著書『大正女性史』上巻（理論社）にしるされてあったので、無事を祈っていたけれど。

わたしが村上信彦さんの著書『服装の歴史』全三巻（現在は五巻）に出会ったのは、もう20年もまえの、大学生のときである。

なぜ女だけがスカートをはくのか――そのナゾときがとてもおもしろく、友人たちにつぎつぎと本を回していくうちに、だれの手にわたったのか、ついにその全三巻はゆくえ知れずになってしまった。この本によって、冬に、当時ではめずらしいズボンをはきはじめたわたしが、小さなキャンパスで〝有名〟になったのも、なつかしい想い出だ。いまはナント、年中ズボン党。

しかし、なによりもわたしにとってわすれがたいのは、この本を読んで大きな発見をしたことである。

それは、服装の歴史は人間の歴史そのものであって、たんなるファッションの移り変わりではないということ。服装には、社会における人間関係、女と男の支配関係が、くっきり反映している。いいかえれば、日常、なんでもないことだと見すごしていることのなかに、社会はしっかり根をおろしているのであり、「人間の解放＝自由」とは、ただ政治や経済の問題を解決すれば達成できるものではない、ということを知ったのである。

服装は人間を束縛もし、解放もする。人間の活動の自由は、両足が分かれているかいないか、すなわち、ズボン＝ハカマか、スカート＝キモノかに左右され、これからはズボンの女性がふえるだろう、と村上さんはいったが、20年後のいま、そのとおりになっている。

もうひとつの発見は、日本で〝女らしい〟といわれるしぐさは、じつは女であるゆえのものでなく、女の服＝キモノの束縛性がもたらしたものであるということ。おもたい日本髪で顔はうつむきかげん、長い袖で動作はゆっくり、太い帯で元気なく、すそがはだけないよう内股で小さく歩く（これは長いスカートの場合もほぼおなじ）。キモノをすてたあとにも、からだでおぼえた動作だけが〝女らしさ〟としてのこったわけ。

三つ目の発見は、人間の歴史は世界共通であるということ。だから女の歴史も世界共通。よく〝それは外国の話で、日本はちがう〟という議論があるけど、たとえばスカートとキモノ、外見はちがっても基本はおなじ。女（人間）の問題は、人種、国家に関係なく、インタナショナルであるということである。

日常性の重視とインタナショナル性。このふたつは、わたしのたいせつにしている視点だけど、それは20歳のわたしが『服装の歴史』によって発見した視点である。

この本に感動して書いたのが「れふぁむ」No.3（一九六三）の「大人になったらなぜキモノが着たくなるか」である。

村上さんの『大正女性史』は、『明治女性史』全四巻につづいて全三巻が予定されていたが、はたして中・下巻は出るのだろうか。仕事の中途だとすれば、ほんとうに惜しまれる。

編集室より

▼いつのまにか原稿〆切がすぎてしまい、いちばんさいごに入れさせてもらうつもりでいたのだけど、とうとう今回はパス。雇用平等法について書きたかったのです。

女にたいする就職差別は女の生きる道を閉ざすもの。女が女であるというだけで、就職の条件にきびしい制約があるために、女は自分の生を自分の力でささえようとしても、それができない。もう息の根をとめられているわけだけど、それにしては女たちの怒りの声がすくない。雇用平等法の成立をもとめる声が小さすぎる。女は自分の主張さえもできないほど、飼いならされてしまったのだろうか。

「保護か平等か」という問題のたてかたは企業側の論理だから、そのことで女どうしが対立することは不幸なことだ（企業側の目的は達成というところ）。女は保護されるのではなく、女であることを保障させるのでなくては、平等を達成することはできない（だから母性保護ではなく女性保障といいかえたい。）なぜなら、平等とは女であることで差別をうけないということなのだから。〝女がきていけるために、女性保障と雇用平等法を！〟とわたしはさけびたい。問題を自分たちの論理で設定していくという姿勢をなくしてしまったら、いつまでたっても女たちは企業の論理＝男の論理にふりまわされるだけ。

雇用平等法は女の生存権にかかわる重要な問題だから、84年は〝女が生きていけるために〟がんばりましょう。（まつの）

▼高橋たか子さんが、スウェーデンの生協の人たち三十人を伴なって、再会を果たしました。

メンバーのスウェーデンの人たちとも一緒に話をしました。一人の女性が、いろいろ質問に来ました。「あなたたちの婦人問題に対するとりくみはどんな政治的立場でやっているのか」と尋ね、自分は社会民主党員だと言います。一緒にいた私の友人が、あまりはっきりしていないというと、

「それはおかしい。政治に自分の立場をもってかかわることなしに、どんなに婦人問題に努力しても意味はない」と彼女は断言。

汚職や金権　政治があまりに漫延しているので、そんなキタナイものには無関係とばかり、政治のことを言うのはカッコ悪いとする風潮がこのごろはあるとか。明解なスウェーデンの人たちの政治意識に、社会変革の根っこを見た思いでした。

ひるがえって日本の現状は、福祉にはお金を出さず、別ワクで拡大するのは軍事費だけ。スウェーデンはすばらしい、なんてはしゃいでいる場合じゃないようです。こんな時こそ、地についた正確な知識が大切、と名分をつけて、スウェーデン語をかじりはじめました。何カ国語目かの語学遍歴。ものになりますやら。（米家）

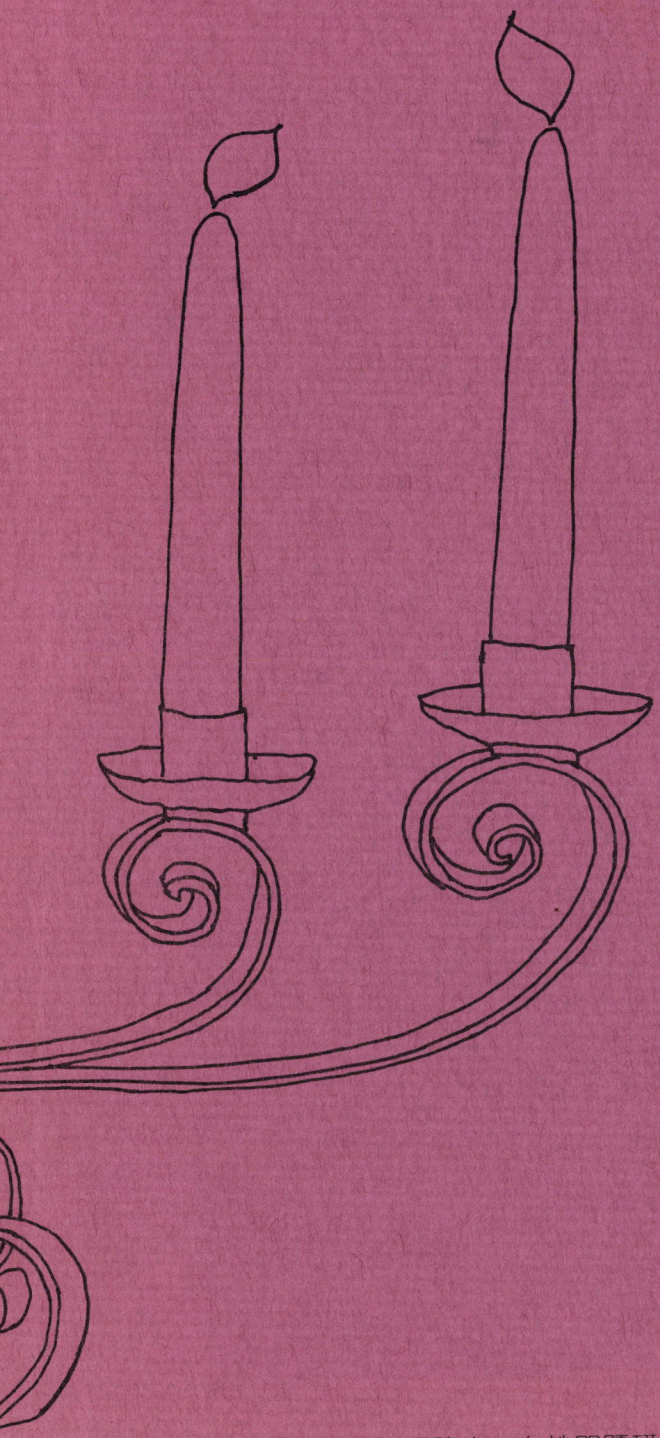
▼高校ＰＴＡの進路部委員を引き受けたので、就職希望の女の子たち二十人ばかりに模擬面接。予測されたこととはいえ、彼女たちが異口同音に「結婚したら仕事をやめます。子供は自分で育てたい」というのを聞いて暗然。

しかし学校が発行している「進路のしおり」を読んでみて謎はとけました。なぜ働くのかとか職業の種類を知ろうとか将来の仕事について考えようと詳細をきわめる大冊であるにもかかわらず、結婚退職制、若年定年制、男女の賃金差などの現実については皆無。一方女性の労働権とか母性保護規定などたてまえのほうにも一言半句ふれていません。男女別々に扱っていないことで、男女平等をつらぬいているつもりなのだろうと思いました。

今年はやっと校正に参加、時間がなくて徹夜仕事となったため見落しが心配です。（片岡）

▼この号の初校がでたのが総選挙の告示日、再校がでたのが一週間のち。田中ロッキード判決への是否が国民の関心となり、いつになく盛り上がった選挙戦の真最中でバタバタと作りあげた17号です。松尾道子弁護士の「共働き」の本を2冊作りました――仕事でも花開いた私の83年。バックナンバー11・13～16号あります。（正路）

第17号　1983年版　¥500　〒200
発行日　一九八三年12月23日
編集　女性問題研究会＝高槻市真上町6の31の3　正路怜子方
印刷　聚文堂印刷



1983-84年
500円

発行・高槻市真上町6の31の3 正路方・女性問題研究会